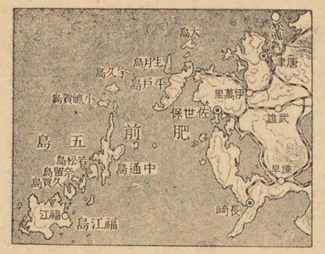
黑線が付く。○はへたる　延へたる。○とほつちか　遠つ値嘉。續紀に遠知駕とあるに同じい。次句の値嘉の岬に重ねていひ續けた。尙次の「ちかのさき」を見よ。「庭」阿野本その他に遲とある。さては「阿」は津の誤、「志」は衍字で、遠津遲可の顚倒であらう。古義はいふアヂガスムの誤かと。○ちかのさき　値嘉は肥前國松浦郡。今の五島列島及び平戸島の舊稱。血鹿、知訶、知駕とも書く。



五島列島より松浦灣　(388)

記（上）の二尊國生みの條に、次生二知訶島一、亦名謂二天之忍男一と見え、西蕃往來の門戸に當る。肥前風土記に大近小近、續紀に遠知駕の島名がある。知訶の稱は風土記に、景行天皇が平戸の志式島の行宮にいまして、西海中の島を望み給ひ、此島雖レ遠、猶見レ如レ近、可レ謂二近島一と仰せられたのに起つたと記してある。地名辭書の著者が大近を中通島、小近を宇久島、遠知駕を福江島に充てたのは信じてよい。福江島の西北端美彌良久の崎は、遣唐使船の泊所である。「岬」原本に岫とあるは誤。契沖說による。○おほとものみつ　既出（二三五頁）。○はまび　濱邊の轉。海び、野びはこの類語。○ただはてに　直終に。直ちに行き著く意の副詞格。○つつみなく　恙なく。凶事なく。

【歌意】神代からいひ傳へたことは、この日本の國は皇神の嚴めしい國、言葉の神靈の幸する國と、語り繼ぎいひ繼いでをる。それは現代の人も悉く目前に見てをり、知つてゐる。さて世の中に人間は澤山居るけれども、天子樣には神とますまゝに、貴方をば御寵任の餘に、天下の大政を執られた家（多治比氏）の子として、特に選出遊ばされて、で貴方は大命を捧げ持つて、唐の遠い境に遣はされ、出張なさるので、大海の岸邊にも沖にも、留まつてそこを領してゐられる諸の神達は、船の舳先に立つてお導きなされ、天地の神達や倭の大國魂の神は、大空を翔つて、見渡してお護りなされ、使命が終つて還る日には、又更に大神達が船の舳に御手を掛けてお助けなされるので、恰も墨繩を引張つたやうに一直線に、値嘉の岬から御津の濱邊に、一途に貴方の御船は到著するであらう。どうぞ恙なく機嫌よくいらつしやつて、速くお歸りなさいませ。

評　開口一番皇神と言靈との威靈を唱道した。神威のことは後段に神達の活躍を叙してゐるから、その前提であることは明かだ。言靈に至つては、漫然と讀過しては、その何に照應があるかわからないから、無用の冗語に聞える。

抑も「言靈の幸はふ」は言葉が玄妙な意味をもつとだけの讃辭と思つては間違ふ。そんな學術的の見地からのものではなくて、信仰上の問題である。蓋し言語は一種靈活なる應驗の德を具へたものとして、古代に信ぜられてゐたのである。或豫言にせよ、或誓約にせよ或願望にせよ、それらの詞は現在及び未來に於いて、必然的なる應現を如實に示すものと考へられたのである。こんな思想は當時のいはゆる外國卽ち韓唐天竺にはない事なので、「言靈の幸はふ國」と特に揚言したのである。

敷島のやまとの國は言靈の幸はふ國ぞ眞幸くありこそ　（卷十三——3254）

もそれで、「眞幸くありこそ」と祝福すれば、その言靈が靈驗をあらはし、願望通りの眞幸さが實現される。こゝに至つては言葉は咒物的性質を帶ぶることになる。詰り結末の「恙なく幸くいまして早歸りませ」との祝

禍の詞は、卽ち必ずその應驗あり實現せらるべき約束のもとに置かれたものであることを、確認させたい爲の前提である。

さて更に、神と言との靈動は神代からの傳統的信仰であり、又現在にこの應果を目前に現代人は知悉してるといひ添へた。

上の「いひ傳てけらく」を承けて、下に「いひ繼がひけり」と重ねていふは古文の格で、祝詞には多い。

次に愈よ本題にに入つて遣唐使の事に及んだ。

小野妹子が遣隋大使として、絢爛たる漢土の文化を目擊して歸朝してから、漢土崇拜の思潮は益す拍車を加へて來た。遣唐使は孝德天皇朝から始まり、爾來天武持統元明の三朝を除いては、御代毎に發遣され、探長補短の意味で、唐風摸倣に必死であつた。

使人はわが邦の代表者であるから、對手國への儀禮としても、その門地官等の相當高い人を選任するのが通例である。加之對手國の歷史を知り學問を識り言語文章も操れゝば、資格に於いて滿點である。この天平五年の遣唐大使には多治比眞人廣成が選任された。

廣成は宣化天皇の孫多治比王の子左大臣島の子で、兄に大納言池守、中納言縣守（本集歌人）がある。實に面正しい「天が下まをし給ひし家の子」である。そのうへ彼れは漢學者でもあつたから、まづ適任といふ事が出來よう。

航海の安否、これが遣唐使人の最難關で、瀨戸內海の潮騷も相當に魂を消すが、日本海の風波は殊に生命の問題であつた。然し大切なる國家の使節たる以上は、神の擁護は必ずあるべきであつた。住吉（攝津）から始め

て、市杵島（安藝、嚴島）豐浦（長門豐東上村、住吉荒御魂）志加（筑前博多）田心姬（同、宗像）湍津姬（田心姬の別名か）の神々は、その航路の奥に邊にます大御神達である。されば第一に、これらの海の神達が代る〳〵船の舳艫に立つて、順送りに安全に勅使の船を「導き申す」のであつた。

この「船の舳に導きまをし」は決して作者の創案ではない。かうした思想は古代からの傳承である。殊に住吉の神は海童神で、（記紀所見）海路の守護神として、神功皇后征韓の際、その荒魂和魂を現じ給うて以來、尤もその崇敬を極めた。

　　大船の　泊つる泊り　水の上は　土ゆく如く　船の上は　床にますごと　大神の　しづむる國ぞ　——。（卷十九、遣唐使賜酒肴御歌——4264）

かけまくもゆゆしかしこき、住の江のわが大御神、船の舳にうしはきいまし、船艫に御立ちいまして、さし寄らむ磯の崎々、漕ぎはてむ泊々に、荒き風浪にあはせず、平けく居て歸りませ、——。（卷六——1021）

住の江にいつく祝部が神ごとを行くとも來とも舟は早けむ（卷十九、多治眞人古——4243）

懸けまくのゆゝし恐こき、墨の江のわが大御神、船のへにうしはきいまし、船どもに御立たしまして、さし寄らむ磯のさきゝ〳〵、漕ぎはてむ泊々に、荒き風波に合はせず、平らけく率て歸りませ、本の國へに。（同卷、作者未詳——4245）

皇御孫尊の御命もちて、住吉に稱辭竟へまつる。皇神等の前に申し賜はく、大唐に使遣はさむとするに、——皇神の命もちて、船居は吾作らむと教へ悟し給ひき。——。（祝詞、遣唐使時奉幣）

住吉の神の導を給ふまゝに、はや船出してこの浦を去りね。——（源氏、明石卷）

（近世金毘羅神の出現によつて說かれる靈異は、古へはすべて住吉神のものであつた。又この神は神功皇后の征韓役に軍神としても現じ、後世弘く外敵に對する守護神とも考へられた。古事談所載の漁翁と白樂天との唱和——謠

曲白樂天――の如きもその意味での派生である。）

海路は、既にかくの如く懇切なる海の大御神達の擁護が望まれるとしてからが、陸上はその支配外である。さては遣唐一行の唐土上陸後は何としたものか。

これに對して作者はまづ「天地の大御神達」と弘く呼び掛けた。が主としては倭の大國魂神に懇請したものだ。蓋しこの神は國土の主神であるから、遣唐一行の唐地に於ける行旅の無事平安を「天翔り見渡し給ひ」と祈禱し切願した。

要するに海には住吉、陸には大國魂、この二神が萬葉人の信奉の對象であつた事が諾かれよう。

事は再びその歸航に及んだが、内容は往路とその精神に於いて變るべくもない。よつてその敍筆に面目を聊か革めた。即ち上には「船の舳に導きまをし」とあるを、更に一層の佑助を望んで「大神達船の舳に御手打掛けて」といひ、一直線にの意を「墨繩を迎へたる如く」と譬喩し、迅速にの意を地理的描寫を交へて「値嘉の岬より――三津の濱邊にただはてに」といふ、繁簡精粗その宜しきに適ひ、行筆實に變幻自在を極めてゐる。要するに、海陸共にわが大御神達の行き屆いた冥助のあらうことを强力主張して、その行旅を祝福した。

末段「つゝみなく幸くいまして早歸りませ」は、冒頭の「言靈の幸はふ國」とあるを顧應した結語で、首尾整然として分寸のゆるぎもない。而もこの語は遠行者に餞する套語で、

在根良對島のわたりわた中に幣取り向けて早歸り來ね（卷一、春日藏首老――62）

――とどまれる我は幣とり、いはひつつ君をばやらむ、早歸りませ、（卷八、笠金村――1453）

荒津の海わが幣まつりいはひてむ早かへりませ面變りせず（卷十三――3217）

大船をあるみにいだしいます君つつむ事なく早歸りませ（卷十五――3582）

の類頗る多い。現代でも千萬言の送別の詞も、究竟はこの一語に盡きる。

遣唐の往來は約三年の長日子、海陸の行旅難に加ふるに、天災あり人災あり病災あり、その無事に歸朝するは實に天佑であらねばならぬ。で徹頭徹尾神樣に縋り付いた。この時代は聖武天皇が三寶の奴と宣はせられた時（天平勝寶元年四月）より以前で、疑もない惟一神道であつた。一方に佛陀に歸敬し。「禮二拜三寶一無二日不レ勤」といふ憶良ではあるが、それは箇人の信仰で、かうした公式の遣唐使送別の際の辭令としては、古神道を眞つ向に振翳すのが至當であつた。平安期になると、これが躊躇なく「佛神憐み給へ」（源氏明石卷）となるから面白い。

この篇の構成は「神代より」より「見たり知りたり」までが第一段、「人さはに」より「まかりいませば」までが第二段、「海原の」より「三船ははてむ」までが第三段である。その第三段を更に區分すれば、「導きまをし」までを第一節、「見渡し給ひ」までを第二節、「三船ははてむ」までを第三節とする。以下「早歸りませ」までは第四段となる。

更にいふ、この篇の中心は海陸行旅の平安を神達に要望する點にある。海の恐怖は固より甚大だから、海路を主に陸路を從としたのは當然の事である。不思議なことは、讀下してゆくうちに何となく、祝詞の精神と宣命の文辭とが、彷彿として眼前に投影することである。

作者憶良は壯時遣唐使の隨員（少錄）として、唐都長安に往來した人である。されば多少異國情景に渉つた餞の詞を、この序（ツイデ）に見たかつた。否この歌はこれで結構だ。別に絢爛を窮めた唐代文化を日本人として見聞し

た製作を、憶良はなぜ遺さなかつたか。外國風景異國情調、もしそれらの諸作があるとしたら、憶良の歌人としての價値は、より以上に偉大なるものとなつたであらう。徒らに旅愁を諷詠に托する事のみを知つて、特異なる眼前の好題目を漫然看過、啞のやうに默してしまつたことは不思議でならない。歌人としては餘に無能である。これは憶良のみならず、安倍仲麻呂等にも通じていへる事である。

反歌

おほともの　みつのまつばら　かきはきて　われたちまたむ　はやかへりませ

大伴御津松原　可吉掃弖　和禮立待　速歸坐勢　897

釋 ○かきはきて「かき」は接頭語。

【歌意】 貴方の御船の著く御津の松原を、よく掃除して、私が立ちつゝお待ちしませう。で早くお還りなさいませ。

評 難波の御津の松原は、當時にあつては著名な存在で、集中にも再三歌はれてある。その下蔭を掃除して待たうとの聲明は、その奉仕の勞働行爲に歸朝歡迎の懇情が極度に露出し、而も御津の松原の出迎は、その頃奈良京に居たと思はれる憶良としては、今日なら東京人が御歸朝の節は是非橫濱までお迎に行きますといふのと、略同樣の親切味を想はせる。これが使船出發の際に當つての辭令であることを思ふと、そこに惜別の情味が津津として迸るを覺える。「早歸りませ」は套語ではあるものゝ、又よく落著して、一首の總意を締め括つてゐる。

なにはづに　みふねはてぬと　きこえこば　ひもときさけて　たちばしりせむ

難波津爾　美船泊農等　吉許延許婆　紐解佐氣弖　多知婆志利勢武　898

釋 ○なにはづ「大伴の御津」と同處。○みふね　遣唐の使船をさす。○ひもときさけて　紐解放けて。紐も結ばぬ體をいふ。○たちばしり　景行天皇紀に、日本武尊望レ海高言、是小海耳、可二立跳一渡一とある。

【歌意】 難波の津に貴方のお船が著いたと、私の耳に這入らうなら、著物の紐も解き放つたまゝで、飛び出しませう。お迎の爲にさ。

評 それと出迎の爲に、著物を著換へて驅け出すのである。その取る物も取り敢へぬ周章しさを、「紐解け放けて立ち走り」と、具象的に表現したのは面白い。世說に皇甫規の事を敍した、

衣不レ及レ帶、履出、云々。

の趣と全くその規を一にする。作者は漢學者だから、寧ろ世說の敍筆を運用したと見るのが至當かも知れない。現に旅人卿なども、世說の鄭泉の故事をその讃酒歌中に引用してゐる。新考に奴隷の如く奔走せんの意とあるは誤解で、又働の都合よきやうに紐を結ばずとするは、事實が反對してゐる。

廣成の歸朝を一途に待望してゐる情意が、ひし〳〵と人の胸臆を打つ。實をいへば奈良京から難波津まで、「紐解きさけて立ち走り」される譯のものではない。そこに極度の誇張があるが、決して不自然に聞えぬ程に、眞劍なる緊張がある。作者の人間味に富んだ性格の發露であらう。

天平五年三月一日、良宅對面、獻三首。　山上憶良謹上。

天平五年の三月一日に廣成が憶良の家で面會し、さてこの三首の歌を廣成に獻するとの意。○良宅　「良」は憶良の略。○三首　原本に三日とあるが文理が快くない。舊註その他には、獻ることは三日なりの意に解してゐるが牽強で、日は「首」の誤である。

右の註文によれば、大使廣成は憶良の宅を訪問したのである。廣成は上にも述べた如く名家の子で、憶良とは門地に格段の懸隔があるから、所用があるなら憶良を自邸に招致してもよい筈。尤も廣成は兄の縣守が太宰大貳、憶良は筑前守で、筑紫時代に入懇の間柄であつた關係もあり、又憶良は例の立居不自由の病人でもあるので、廣成の方からわざ〳〵足を運んだものか。さてその所用は今回の外遊に就いて、曾ての渡唐者憶良の經驗談や注意を聞かうが爲かと想はれる。

「山上憶良謹上」の六字は書簡としての記署である。

大唐大使卿の記室

これは書簡の宛名である。○大使卿　遣唐大使多治比廣成卿のこと。○記室　前出（一四五三頁）。

沉痾自哀文　山上憶良作

永い病を自分で悲しんだとの意。○沉痾　チンアと音讀するもよい。年久しき病をいふ。「沉」は沈に同じい。「痾」は深く進んだ病をいふ。原本に荷とあるは誤。神本その他によつて改めた。

竊以、朝夕佃食山野者、猶無災害而得度世。謂下常執弓箭、不レ避二六齋一所レ値禽獸、不レ論二大小孕不孕一竝皆殺食、以レ此爲レ業者上也。晝夜釣漁河海者、尚有慶福而全經俗。謂下漁夫潜女、各有レ所レ勤。男者手把二竹竿一能釣二波浪之上一、女者腰帶二籠龍一探二深潭之底一者上也。況乎、我從胎生迄于今日、自有修善之志、曾無作惡之心。謂レ聞二諸惡莫作、諸善奉行之教一也。所以、禮拜三寶、無日不勤。謂二每日誦經、發露懺悔一也。敬重百神、鮮夜有闕。謂敬拜天地諸神等一也。嗟乎媿哉、我犯何罪遭此重疾。謂下未レ知二過去所レ造之罪一、若是現前所レ犯之過上無二犯罪過一、何獲二此病一乎、初沈痾已來、年月稍多。謂レ經二十餘年一也。是時七十有四、鬢髮斑白、筋力尪羸。不但年老、復加斯病。諺曰、痛瘡灌鹽、短材截端。此之謂也。四支不動、百節皆疼、身體太重、猶負鈞石。二十四銖爲二一兩一、十六兩爲二一斤一、三十斤懸布欲レ立、如二折翼之鳥一、倚レ杖且步、比二跛足之驢一。吾以身已穿俗、心亦累塵。欲知禍之所伏、崇之所隱、龜卜之門、巫祝之室、無不往問。若實若妄、隨其所教、奉幣帛無不祈禱。然而彌有增苦、曾無減差。吾聞、前代多有良醫、救療蒼生病患。至若楡柎、扁鵲、華佗、秦和緩、葛稚川、陶隱居、張仲景等、皆是在世良醫、無不除愈也。扁鵲、姓秦字越人、勃海郡人也。割レ曾探レ心、傷而置レ之、投二以神藥一、即寤如レ平也。華佗、字元化、沛國譙人也。

若有病結積沈重者、在内者、刳腸取病、縫腹摩膏、四五日差之。追望件醫、非敢所及。若逢聖醫神藥者、仰願割刳五藏、抄探百病、尋達膏肓之隩處、肓鬲也、心下爲膏、攻之不可、達之不及、藥不至焉。欲顯二豎之逃匿。謂晉景公疾、秦醫緩視而還言、可謂爲鬼所毀也。命根既盡、終其天年、尚爲哀。聖人賢者一切含靈、誰免此道乎。何況、生錄未半、爲鬼枉殺、顏色壯年、爲病横困者乎。在世大患孰甚于此。志怪記云、廣平前太守北海徐玄方之女、年十八歲而死。其靈謂馮馬子曰、案我生錄、當壽八十餘歲、今爲妖鬼所枉殺、已經四年、此遇馮馬子、乃得更活是也。内教云、膽浮洲人、壽百二十歲。謹案、此數非必不得過此。故延壽經云、有比丘、名曰難達、臨命終時、諸佛請壽、則延十八年。但爲善者天地相畢。其壽夭者業報所招、隨其脩短而爲半也。未盈斯竿而遄死去、故曰未半也。任徵君曰、病徒口入、故君子節其飲食。由斯言之、人遇疾病、不必妖鬼。夫醫方諸家之廣說、飲食禁忌之原訓、知易行難之鈍情、三者盈目滿耳、由來久矣。抱朴子曰、人但不知其當死之日、故不憂耳。若誠知羽翮可得延期者、必將爲之、以此而觀、乃知我病、蓋斯飲食所招、而不能自治者乎。帛公略說曰、伏思自厲以斯長生。生可貪也、死可畏也。天地之大德曰生。故死人不及生鼠。雖爲王侯、一旦絕氣、積金如山、誰爲富哉。威勢如海、誰爲貴哉。遊仙窟曰、九泉下人一錢不直。孔子曰、受之於天不可變易者形也、受之於命不可請益者壽也。見鬼谷先生相人書。故知生之極貴、命之至重。欲言言窮、何以言之、欲慮慮絕、何由慮之。惟以、人無賢愚、世無古今、咸悉嗟歎、歲月競流、晝夜不息。曾子曰、往而不反者年也。宣尼臨川之嘆、亦是矣也。老疾相催、朝夕侵動、一代歡樂未盡席前。魏文惜時賢詩曰、未盡西苑夜、劇作北邙塵也。千年愁苦更繼坐後。古詩云、人生不滿百、何懷千年憂矣。若夫群生品類、莫不皆以有盡之身、竝求無窮之命。所以道人方士、自負丹經入於名山、而合藥之者、養性怡神、以求長生。抱朴子曰、神農云、百病不愈、安得長生。帛公又曰、生好物也、死惡物也。若不幸而不得長生者、猶以生涯無病患者爲福大哉。今吾爲病見惱、不得臥坐、向東向西、莫知所爲。無福至甚、惣集于我。人願天從、如有實者、仰願頓除此病。賴得如平、以鼠爲喩豈不愧乎。已見上也。

釋 本文非常に割註が多い、依つて釋中、割註の句は⊙の印を以て分つた。次の漢文もこの例による。

○朝夕 「夕」原本にない。次句の「晝夜」に對して夕のあるが正しい。西本その他によつて補つた。○佃食 山野者 山野に獵をして生活する者が。「佃」は禽獸を狩り取ること。○無災害而得度世 災禍を受けることなく、平穩に世を暮すことが出來る。「災」は災の書寫字。⊙六齋 六齋日の略。四天王經、增一阿含經にある。毎月八、十四、十五、二十三、二十九、三十日の六日を斥す。これ等の日は不吉な日であるから、殺生などはやめ、謹んで功德を行はなければならぬといふ。⊙所値 「値」は遇ふこと。以下割註の誤字は正字に改め、その說明を略いた。⊙毀食 毀は殺の古字。○慶福 さいはひ。○全經俗 生命を全うして浮世に永

らへる。◉潜女　カヅキメ。海女。◉能釣　「能」字不用。◉鑒　鑒の書寫字。◉深潭之底　深き淵の底。○我從胎生――　自分がこの世に生を享けてこの方今日まで。「胎生」は佛教にいふ四生の一で、卵生、濕生、化生に對して、人類、獸類の生まるゝ狀相をいふ。◉諸惡莫作――　七佛通戒の偈の一節。全文は、諸惡莫レ作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教の四句の偈。「諸惡莫作」は消極的に惡を止むるを示し、「衆善奉行」は積極的に善をなすことを示してゐる。○禮拜三寶――　佛法僧の三つを禮拜して。「三寶」はこの世の三つの寶の意で、佛法僧の三者を斥す。天平勝寶元年の聖武天皇の詔勅にも、三寶乃奴の語がある。◉每日誦經　この句の上、謂を補つた。○發露懺悔　誠心を露はして懺悔する。「懺悔」は過去の罪惡を悟つて後悔すること。○鮮夜有闕　一夜だつて缺かしたことはない。「夜」は前句の「無日不勤」の日に對應したまで。○嗟乎嫗哉　あゝ愧かしいことよ。「嗟乎」は歎辭。「嫗」は愧に同じい。○七十有四――　七十四で鬢髮の斑白なのは當り前で、悲傷するには當らない。年紀に必ず誤があらう。潘岳の二毛之歎は四十二歳だからである。○鬢髮斑白　毛髮が胡麻鹽になつて。「斑」原本に班とあるは誤。西本その他による。○筋力尪羸　體力が弱くやつれ。尪はつかれて弱々しいこと。羸は痩せた貌。「尪」原本に延とあるは誤。○痛瘡灌鹽　ひどい傷に鹽を振りかける。當時の俗諺であらう。泣き面に蜂などといふに同じい。○短材截端　痛瘡灌鹽と同意の俗諺。上に「みじかきものをはしきる」とある（一五四九頁）。○四支不動　手足は動かず。「支」は肢と同じい。○百節皆疼　節々は悉く痛い。○身體太重　力が拔けての語を補うて聞く。○猶負鈞石　甚く重い物を肴負つたやうだ。鈞と石との解は割註にある。○懸布欲立　力布を引つ懸けてそれに縋つて立たうと思へば。○如折翼之鳥　翼を折つた鳥のやうに自由がきかず。○倚杖且步　杖に身軀を托して一寸歩かうとすれば。○比跛足之驢　びつこの驢馬のやうな具合だ。○吾以　自分で考へるに。○身已穿俗　この身は早くから世俗に入り混り。○心亦累塵　心も亦浮世の塵が堆つて汚れてゐる。「亦」原本に思とある。神本その他によつて改めた。○禍之所伏　病の原因たる禍の潜んでゐる處。○崇之所隱　物の祟の隱れてゐる處。「祟」は物のけなどの所爲によりて災難をうけること。○龜卜之門　韓唐流の卜者の家。「龜卜」は龜の甲を燒いて、その罅のつき方に依つて吉凶を卜ふ支那の卜占法。○巫祝之室　日本流の祈禱者の家。「巫」は巫女のことで、神々に仕へて神樂を舞ひ、又は祈禱を行ひ、或は神意を伺ひなどする女。「祝」は神に仕へる職の稱。はふり、かんなぎ。○無不往問　詣つて尋ねぬことはない。○若實若妄　その教示の虚實にかゝはらず。○奉幣帛無不祈禱　神佛に幣を捧げて祈禱しないことはない。「ぬさとりむけ」を見よ（一三二頁）。「幣」原本に弊とあるは誤。○然而彌有增苦　さうしても愈よ苦みを增して。「彌」原本に禰とあるは誤。○無減差　病氣が輕くはならぬ。「減」は減の俗字。「差」は病の癒ゆること。○救療蒼生病患　萬民の病氣を救ひ癒す。「蒼生」は人民のこと。前出（一四二六頁）。○楡柎　兪跗、扁跗、曳跗とも作る。支那の上古、黄帝時代の名醫。史記の扁鵲傳に「上古ノ時、醫楡柎有リ、病ヲ治ムルニ湯液醴灑、鑱石、撟引、案机、毒熨ヲ以テセズ、一撥シテ病ノ應ヲ見ル、五藏之輸ニ因リテ、乃チ皮ヲ割キ、肌ヲ解キ、脈ヲ訣シ、筋ヲ結ビ、髓腦ヲ搦シ、荒ヲ攄シ幕ヲ仇シ、腸胃ヲ湔洗シ云々」とある。○扁鵲　春秋戰國の世の人。長桑君の禁方を得て名醫となつた。詳しくは本文の註及び史記の扁鵲倉公列傳を見よ。○華佗　三國時代の名醫で、魏の曹操の頭風を一度癒したが、再度召されても參候せず、竟に曹操の怒を買つて殺された。倚本文の註を見よ。「佗」原本に他とあるは誤。○秦和緩　秦人の名醫和と緩。○葛稚川　名は洪、稚川は字。句容の人。少時より神仙の道と醫術とを好んでこれを修め、晉時代

の神醫と謳はれた。その著に抱朴子内外一百十六篇がある。「葛」原本に葜とあるは誤。○陶隱居　梁の人。字は通明、名は弘景。秣陵に生まれ、十歳の時、葛洪の神仙傳を讀んで醫術に志し、青年に及んで名醫の名を博した。晩年、華陽洞に隱れ、華陽眞人と號したので、世人陶隱居と呼んだ。○張仲景　仲景は字、名は機。漢代の人で長沙大守となつた。時に惡疫流行し、仲景はこれを療して名醫の名聲を得た。その著に傷寒論、金匱方の二大名著がある。○無不除愈也　病の根原を除き癒さないことがない。◉割胷探心―列子記載の寓話。魯公扈、趙齊嬰の兩患者が、扁鵲に治療を依頼したところ、扁は、公扈は志强く氣弱く、齊嬰は志弱く氣强きことが、その病因であることを知つて、兩名に毒酒を與へて迷死させ、その心臟を剖いて心を入れ換へた後、神藥を投じて蘇生させたところ、公扈は齊嬰の家へ、齊嬰は公扈の家に歸つて、その妻子を吃驚させたといふ。◉結積沈重者　病原が滯りつもるものが。◉在内者　内臟に在れば。○追望伴醫　前述の名醫達を後から望んだところで。○非敢所及　どうしたつて追つ付くことではない。○仰願　割剖より逃匿までの語句にかゝる。○割剖五藏　腹中を割り剖つて。「五藏」は五臟のこと。即ち肝、心、脾、肺、腎の五つの臟腑をいふ。○抄探百病　種々な病をさぐり取り。○尋達膏肓之隩處　膏肓の如き身體の奥深いところまでも尋ね達して、「膏肓」は身體の局部の名稱。病がこの二所に在れば全快し難いといふ窮所。尙ほ割註を見よ。「隩處」は深きところ。隩は澳に同じい。◉鬲　膈に同じい。心と脾との間即ち胸中をいふ。◉攻之不可　之を治療しようとしても不可能である。「攻」は鍼へ正すこと。◉達之不及　これに針を鍼たうとしても深くて屆かない。「達」は針を鍼つこと。◉藥不至　飲んだ藥もそこまで屆かない。○欲顯二豎之逃匿　病魔の潜み匿れてゐるのを見つけ出さうと思ふ。「二豎」は病魔のこと。轉じて疾病の義にもいふ。左傳に「晉侯疾病アリ、醫ヲ秦ニ求ム。秦伯醫緩ヲシテ之ヲ爲メシム。未ダ至ラズ。侯夢ム。疾二豎子トナリ、曰ク、彼ハ良醫ナリ、懼クハ我ヲ傷ケン、焉ゾ之ヲ逃レン。其一曰ク、肓ノ上膏ノ下ニ居ラバ、我ヲ若何セン。醫至リテ曰ク、疾爲ムベカラザル也。肓ノ上、膏ノ下ニ在リ、之ヲ攻ムルモ可ナラズ、之ニ達スルニ及バズ、藥モ至ラズ、爲ム可カラザルナリ。侯曰ク良醫ナリ。厚ク禮ヲナシテ之ヲ歸ス」とあるによる。「豎」原本に竪とあるは誤。○命根既盡　命のもとが既に盡きて。○終其天年尙爲衰　天より享けた壽命が終つて滿足に死んだのでも、尙衰しいものとする。◉聖人賢者一切含靈――　聖人賢人を問はず、すべての生物が、誰れがこの死といふことを免れられるだらうか。「一切含靈」は佛教語。「含靈」は靈を抱くもの即ち生物を指す。○何況――乎　どうしてまあ……をさ。反語の形式を採つた强意の語法。○生錄未半　天命がまだ半分も盡きないのに。「生錄」は命數、天命に同じい。○爲鬼枉殺　疫鬼のために無理に殺され。○爲病橫困者　病の爲に橫さまに困められるもの。○在世大患孰甚于此　この世に在る大きな患で、これより大きなものがあらうか。◉志怪記　志怪錄の誤記か。志怪錄は支那の陸勳の著。◉廣平前大守徐玄方女　前に廣平の刺史であつた徐玄方の娘。大守は刺史と同じで、今の縣知事の如き官。◉馮馬子　人名。◉案我生錄當壽――　自分の天壽を考へるに、壽命は八十餘歲となつてゐるのに。◉妖鬼　あやしき鬼。ものゝけ。「妖」原本に妓とあるは書寫字。◉内教　佛教のこと。佛道を内教、佛書を内典といひ、他を外道外典といふは佛者の言。◉贍浮洲人――　長阿含經に、閻浮提人壽百二十歲、中天者多とあり、又、阿毗曇論に、閻浮提人、壽命不レ定、有二其三品一、上壽一百二十五歲、中壽一百歲、下壽六十歲、其間中天者、不レ可二勝數一とある。◉贍浮洲　閻浮提のこと。古代印度の世界説において、須彌山の南方に位し、十六の大國、五百の中國、十萬の小國を有し、佛に遇ひ法を聞くこと本洲に過ぐるはな

しとされたので、もともと印度國を名づけて言つたものであるが、轉じて、吾人の住む世界を弘くいふやうになつた。◉非必不得過此　強ひてこの壽命數を越えられないといふのではない。◉延壽經　延壽妙門陀羅尼經の略稱。原本壽延とあるは顚倒。◉比丘　梵語。男の出家をいふ。◉但爲善者　およそ善を爲す者は。「爲善」原本に善爲とある。契沖は、左傳杜預の註を引いて、爲ハ治ト同義と解し、ヨクヲサムルモノハと訓み、舊註はヨクタスクルモノハと訓んでゐる。◉天地相畢　その壽命が天地と終始する。天地の齊と一緒であるの意。◉其壽夭者　「壽」は長命、「夭」は若死に。◉業報所招　自分の所業の報がその結果を招いたもので。「業報」は作行に應じて來たむくい。「業」は身口意の所作のすべてをいふ。轉じて惡業をもいふ。◉隨其脩短而——　その作行の長短に從つて壽命の長短の半をなすものである。「脩」は長と同義。◉未盈斯半　まだこの壽命數に滿たないで。「半」は算に同じく、數ふ又數の意。◉故曰未半也　それ故に壽命の半にもならぬといふのである。◉任徵君　梁の人で名は安、字は定祖。學を好み、名利を欲せず一生出仕しなかつた。時の人、號して任徵君といつた。◉由斯言之　この意味から病のことを言へば。◉不必妖鬼　あながち疫鬼の爲ばかりではない。◉飮食禁忌之原訓　飮食を忌み禁ずるといふ根本の誡。◉知易行難之鈍情　知ることは容易であるが、さてそれを實行することは難しいといふ愚な心。◉三者盈目滿耳——　以上の三つの事柄は、耳目に飽きるほど見聞きして來たことは、久しいものである。◉抱朴子　先述した晉の葛稚川の著書の名。內外篇八卷あり、黃老を主とした、所謂道家の書である。◉若誠知豹豳——　もしも實際に仙人となつて死期を延すことが出來ると知れば、きつとこれを實行しようとする。「豹豳」は支那で仙人となることを羽化登仙といふので、仙人となるの意。「豳」は豹の本のこと。

◉扁公略說　未詳。◉自嶌以斯長生　自ら勵むにこの長生を目的とし。「嶌」は勵に同じい。◉天地之大德曰生　自然の大きなめぐみを生といふ。◉死人不及生鼠　萬物の靈長たる人でも、死んでは生きてゐる鼠にも及ばないほど價値がない。◉一旦絕氣——　一度び息が絕えたら、金を山ほど積んだとて、誰れが富人となさうか。「一旦」原本に一日とあるは誤。◉遊仙窟　唐の張文成が仙窟に遊んだことを記した支那最古の軟文小說。◉九泉下人——　死人は一文の値打もない。「九泉下人」は地下の人に同じい。卽ち死亡した人。「九泉」は地底のこと。木虛の海賦の註に、地有二九重一、故曰二九泉一とある。◉受之於天——　天から授つたもので易へることの出來ないものは形である。◉受之於命——　之を運から授つて勝手に求め益すことの出來ぬものは壽命である。「命」は天の智的の方面をいふ語で、天道の配劑、自然の曆數のこと。「請益」は求め益す。◉鬼谷先生　楚の人。その姓名は不明。たゞ鬼谷（地名）に隱遁してゐたので、自ら鬼谷先生と號したといふ。所謂鬼谷子はその著であるといはれる。縱橫家張儀、蘇秦は共に之に師事した。◉相人書　人相を占ふ書。◉欲言言窮　以上のことを言はうとしても、いひ表はす言葉に窮する。◉欲慮慮絕　考へようとしても考へ切れない。◉咸悉嗟歎——　みな悉く歲月の經過の早く、晝夜をやすまず過ぎ去つて行くのを歎く。「嗟」は歎聲。◉晝夜　「晝」原本に書とあるは誤。◉曾子　名は參、字は子輿。南武城の人。孔子の弟子で、孔子より四十歲餘も若かつたが、その孝道に通じた故を以て業を授けられた。その著に孝經がある。◉宣尼臨川之嘆　孔子が流水を見て、逝くものが二度と返らぬを嘆いたこと。論語（子罕篇）に、子在二川上一曰、逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一と。「宣尼」は孔子の諡文宣王とその字の仲尼とを撮み合せての略稱。◉老疾相催　老と病とがお互に萌して。◉朝夕侵動　朝となく夕となく身體を次第に侵しすゝむ。「動」はうつり進むの意。◉一代歡樂——　一生の

散樂がまだ自分の前に殘つてゐるのに。「席前」自分の座席の前。◉魏文　魏の文帝のこと。◉時賢　その時代の賢人。◉未盡西苑夜――　帝宮の西の苑で樂しい夜を盡さぬうちに、忽ち死亡して北の方邙山の塵となつてしまふとの意。「邙」は河南省洛陽の北に横たはる山の名。こゝには貴人名士の墳墓が多い。○千年愁苦――　死の手は自分のすぐ背後に迫つてゐるとの意。「千年愁苦」は永久の愁ひ苦しみ即ち死を斥す。「坐後」は背後に同じい。◉古詩　文選所載の支那漢代の古詩を斥す。◉人生不滿百――　人の生涯は百歳にも滿たないものであるのに、人はその心の中に常に悠久永遠の憂を持つてゐる。文選には「人生」を生年、「何懷」を常懷とある。今は文選によつて解釋した。○若夫群生品類――　かのあらゆる生物の各階級の者は、悉く何れ終りある身體をもつて、すべて無窮永遠の命を求めない者はない。○道人　道家又は佛者の說を修めて得道した人。こゝは道家の說を修めた者をいふ。○方士　神仙の方術を修める者。○自負丹經――　自身で靈藥の方書を身につけて深い山に入り。「名」は大の意。○丹經　丹砂を煉つて不老不死の藥となす術書。○合藥之者　仙藥を製するはの意。これは支那で仙術を修める者の所作である。「藥」原本に樂とあるは誤。「之」を衍とする。○養性怡神　生命を養ひ精神をやはらげる。「養性」は生命を養ふこと。孟子の養性とは異る。○神農　支那上古の三皇の一人。姓は姜、炎帝ともいふ。始めて農耕を教へ、又醫藥を作つた。○帛公「公」原本に出とあるは誤。○爲福大哉　幸福が大なるものとなさうか。○不得臥坐　身體の自由が利かない。「臥坐」は寢たり起きたりの意。○向東向西莫知所爲　どちらを向いても、どうすることも出來ない。「向東向西」はあちら向きこちら向き。○無福至甚――　不幸の頂點がすべて自分の上に集つてゐる。「惣」原本に惣とあるは書寫字。古義に、上に脫語あるべしとあるは非。○人願天從　人が誠心から願へば天はその願に從つて、願望を叶へてくれるとの意。周書の泰誓に、天矜二于民一、民之所レ欲、天必從レ之。とある。○如有實者　もし周書の言が本當であれば。○賴得如平　幸に平癒するやうになつたならば、○以鼠爲喩　上に「死人は生鼠に及ばず」と喩へたやうな無禮さは。こゝの「以鼠爲喩」は詩經の鄘風にいふ主意とは異る。○豈不愧乎　天に對して大いに愧ぢ入る次第だとの意。豈……乎は反語の形。

沈痾自哀の題意の命ずるがまゝに、例の四六駢儷の筆致をもつて、布陳これ力めた。まづ佛教にいはゆる四苦のうち、老と病との二苦に虐げられてゐる自己の境涯を詳敍し、次いで病苦そのものに就いて、醫藥の殊方のないことを歎き、さて筆を轉じて生死の問題に突入した。病苦のはてに來るべきは即ち死苦である。憶良はその覺悟はもちながら、尙生の執著を飽くまで强調し、綿々密々に反復した。「死人不及生鼠」の語の如き、辛辣も亦甚しい。結局無病息災を切願してゐる。世の富貴利達の人達が不老長生の仙術方術を講ずるのとは違つて、只さし迫つた當面焦眉の問題、即ち病魔の手から遁れたいだけの小さな、而も緊切な欲望に過ぎない。如何に彼れがその苦痛に困惑してゐたかが窺はれる。

堂々たる大文字ではあるが、概してやゝ雜駁の感がある。引據は頗る廣汎で、彼れが博識であつたらうことは否めないものゝ、雅俗雜糅、殆どその繁に禁へない。殊に小說遊仙窟の引用に至つては不倫の譏を免れ得まい。蓋し同書は當時舶載日なほ淺く、隨つてこれを引用することは、頗る尖端的の知識を誇り得るものであつたらう。

文中憶良の生活狀態の一部とその病質とがほゞ推知され、又その思想信仰の傾向を看取することが出來る。

「當時七十有四、鬢髮斑白」、「生錄未半爲鬼枉殺、顏色壯年爲病横困者乎」の諸句の如きは、憶良の年齡を推定する上に於いて、重要なる材料である。

△憶良傳及び憶良年紀考（雜考——二）參照。

悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序

人世は佛說にいふ假合卽離で、はかなくなり易く住まり難いことを歎く詩一首と、その序文との意。○俗道　世俗の道の義。人間世の約束をいふ。○假合卽離　會者定離といふに同じい。宇宙の萬物は、因緣が假に和合して成つたものであるから、その因緣が盡きれば遂に離散しなければならぬといふ佛說。「假合之身」を見よ（一五三四頁）。○易去難留　常住性のないこと、卽ち無常なることをいふ。

竊以、釋慈之示教、謂釋氏慈氏。先開三歸謂歸依佛法僧。五戒、謂二不殺生、二不偸盜、三不邪淫、四不妄語、五不飮酒一也。而普化法界。周孔之垂訓、前張三綱謂君臣父子夫婦一。五敎、謂父義、母慈、兄友、弟順、子孝。以齊濟郡國。故知引導雖二、得悟惟一也。但以、世无恒質、所以陵谷更變、人无定期、所以壽夭不同。擊目之間、百齡已盡、申臂之頃、千代亦空。旦作席上之主、夕爲泉下之客。白馬走來、黃泉何及。隴上青松、空懸信劒、野中白楊、但吹悲風。是知世俗本無隱遁之室、原野唯有長夜之臺。

先聖已去、後賢不留。如有贖而可免者、古人誰無價金乎。未聞獨存遂見世終者。所以維摩大士、玉體疾于方丈、釋迦能仁、掩金容乎雙樹。內敎曰、不欲黑闇之後來。莫入德天之先至。德天者生也、黑闇者死也。故知生必有死。死若不欲不如不生。況乎縱覺始終之恒數、何慮存亡之大期者也。

○釋慈之示敎　佛樣達が御敎へなさるのに。「釋慈」は釋迦と彌勒と。現當二世の衆生濟度の佛者。故にこの二者で佛を代表させた。○釋氏　釋迦氏の略。「釋迦能仁」を見よ（一四〇三頁）。○慈氏　彌勒の譯。釋迦の後を追つて、この世に出現し衆生を濟度する菩薩。○先開三歸五戒　先づ第一に三つの歸すべき所と五つの守るべきことを示し。「三歸五戒」は佛道に入る者の最初に受ける戒。「三歸」は佛法僧の三寶を歸依の對象とするをいふ。「五戒」は五つの惡行の戒。その目は割注に出てゐる。○普化法界　總體に現世を敎化する。「法界」は佛法の行はれてゐる世界卽ち現在の世をいふ。「普」原本にない。下の「齊濟郡國」の齊に對する爲に補つた。○周孔之垂訓　周公と孔子とが示された訓。周公も孔子も共に儒敎上の大聖。前に釋慈に佛敎を代表させ、こゝには周孔に儒敎を代表させた。○前張三綱五敎　先づ三綱五敎を布き。「張」は「三綱」の綱に對應して用ゐた語。「三綱五敎」は人間の守るべき大道を示したもの。儒敎の根幹をなしてゐる敎。詳しくは割注を見よ。○齊濟郡國　遍く國中を濟ふ。契沖がいふ、こゝに「齊」の字あれば「化法」の上、まさに普などの字脫ちしなるべしと。「郡國」の「郡」は行政區劃の一、「國」は郡の總合したる名稱。西本等に「郡」を邦に作つて

あるが、これは國々の意。○引導雖二——　人間を教導する教は儒佛の二つに分れても、悟を得るといふことは唯一つであるの意。「引導」は一定の方向を誘引し指導すること。轉じて死人を葬る時、冥土に行くしるべをなすとて、僧侶の行ふ誦經の式をもいふ。こゝは前者の意。○世无恒質　世には永久不變なものはない。「恒質」は永久不變の實體。「无」原本に元とあるは誤。○陵谷更變　陵は谷、谷は陵と變じ。世の變遷を稱する語。毛詩小雅に、高岸爲レ谷、深谷爲レ陵とある。○人无定期　人には定つた生命といふものはない。「无」原本に元とあるは誤。○壽夭不同　生命の長短が等しくない。「夭」原本に夭とあるは書寫字。○擊目之間——　目を瞬くほどの短い間に、百年の齡は早くも盡きてしまひの意。人生の儚さを悠久の自然に對比して言つた語。○申臂之頃——　臂を伸すほどの短時間に、千代も赤空しく過ぎ去るの意。「頃」は少時、しばらくの意。原本に項とあるは誤。○旦作席上之主——　朝には座上の主人となつてゐるが、夕には地下の人となつてしまふの意。「泉下之客」は「九泉下」を見よ（一五八一頁）。「客」原本に容とあるは誤。○白馬走來——　驅け出して往つても、地下にはどうして及ばうぞの意。「白馬」は「黃泉」の對語で、白に意はない。「黃泉」は九泉に同じい。土の色は黃色であるのでかくいふ。○隴上青松——　墓陵の上の青松に、今は亡き人の爲に空しく心約束の劒を懸けの意。「隴」は土の盛りあがつた處の稱。ヲカと訓む。こゝの隴は墓處を指す。「懸信劒」は吳王壽夢の季子札が徐君の墓に劒をかけた故事をいふ。史記吳世家に「春秋ノ時、吳ノ季札出デ使シテ徐ノ君ニ過ギル。徐ノ君季札ガ劒ヲ好ス。然レドモ敢テイハズ。季札心ニ之ヲ知ルト雖モ、上國ニ使スルガ爲ニ未ダ獻ゼズ。還リテ徐ニ至レバ、徐ノ君已ニ死セリ。乃チ其ノ寶劒ヲ解キ、之ヲ徐ノ君ノ冢樹ニ掛ケテ去ル。」とある。「劒」は劍の俗字。○野中白楊——　野中に立つてゐる墓側の白楊は、ただ悲風に吹かれてゐるの意。支那の俗、白楊を墳墓に植ゑる。通志に、種二壟墓ノ間一、故曰、白楊多二悲風一、蕭々愁二殺人一。とある。「白楊」は筮楊のこと。楊柳科に屬する木で、葉は圓形にして尖り、鋸齒をしてゐる。花はカハヤナギに似て、春の初、葉の出ぬ先に咲く。○世俗本無隱遁之室　現世には始めから死の魔手から遁れ隱れる部屋はなく。「世俗」は世の中といふほどの意。○原野唯有長夜之臺　荒凉たる野原に、只死の安息所があるばかりだ。「長夜之臺」は墓の意。「長夜」は死をいふ。人が一度び死して復活しないのを、何時までも明けぬ夜に喩へた。○先聖已去——　先聖もすでにこの世を去り、後賢もこの世に留まらずに死んで行くの意。○如有贖而——　もしも死といふものが金で買へて、死を免れることが出來るならばの意。「免」原本に免とあるは誤。○古人誰無價金乎　古人誰れが死を贖ふ價の金がなからうかい。○維摩大士　前出（一四〇二頁）。○疾玉體于方丈　尊い身體をその方丈の居室に於て疾に犯され。「玉」は美稱。「方丈」は「在乎方丈」を見よ（一四〇二頁）。○釋迦能仁　前出（一四〇三頁）。○掩金容乎雙樹　尊い身體を涅槃後、沙羅雙樹に掩はれた。「金」は美稱。「雙樹」は「坐於雙林」を見よ。（一四〇三頁）。○內教　前出（一五七九頁）。○不欲黑闇之後來——　黑闇天が後から迫ることを嫌ふならば、功德天の前に來たのを受け入れるな。卽ち死を欲せざれば生るゝなかれの意。「黑闇」は死を掌る神。「德天」は功德天女卽ち吉祥天女のこと。こゝには生を掌る神とした。○不如　「如」原本に知とあるは誤。○況乎縱——　まして縱ひ生必有死といふ自然の道理を覺つたとしても、どうして生死の大時機を考へられようか、とても人智の及ぶ所ではないの意。「況乎……者也」は反語の形。○始終之恒數　始有る者は必ず終有るといふ自然の道理。「恒」はつね。「數」は條理、道理の意。揚子法言に、有レ生者必有レ死、有レ始者必有レ終、自然之道也とある。○存亡之大期　生死の大時機といふほどの意。

この文はまことに引締つて無駄なしによく書けてゐる。尤も主意は佛教の專ら提唱する假合即離にあるから、新味の缺けてゐるのも亦當然であらう。初頭儒佛を相對的に排斥したが、「所以維摩」以下無常變易の意を強調し、死生の理に渉るに及んでは、全然佛教の典故を根本としてゐる。中間無常不住の事相を叙したあたり、辭句精煉、決して文選の諸公の作に遜らないと思ふ。

俗道變化猶擊目。人事經紀如申臂。空與浮雲行大虛。心力共盡無所寄。

○俗道變化――現世の變化は恰も目を瞬く如く速く。○人事經紀――人の一生は臂を伸ばすほどの短い間に經つてしまふ。「經紀」は常の道理。文選曹子建七啓の、耗二精神乎虛廓一、廢二人事之經紀一の注に、劉良曰、經紀常理也とある。○空與浮雲――浮雲と共にあてどもなく空にさ迷つての意。「大虛」は虛空のこと。○心力共盡――心身共に盡きた死後は、寄る所も無いのだわいの意。「心力」は精神と體力と。詩とはいへ、例の漢讀で、詩味は索莫たるものである。

老身重病經年辛苦、及思二子等一歌五首

年寄つた體で重い病に懸かり、歳月を重ねて苦み、又子供の事を思うて詠んだ歌との意。○五首　原本七首とある。それはこゝに誤載した「富人の」「あら妙の」の二首を加へて數へたからで、今はそれを「貧窮問答歌」の條に移したので、減じて五首となつた。又原本、題詞の下に「長一首短六首」と割註がある。後人の記入だから略いた。

たまきはるうちのかぎりは　調二瞻浮洲人壽一百二十年一也
靈剋内限者　平氣久　安久母阿良牟遠　事母無　喪無
もあらむを　よのなかの　うけくつらけく　いとのきて　いたきぎには　からしほを
每阿良牟遠　世間能　宇計久都良計久　伊等能伎提　痛伎瘡爾波　鹹鹽遠
そそぐちふがごとく　ますますも　おもきうまにに　うはにうつと　いふことのごと　おいに
灌知布何其等久　益益母　重馬荷爾　表荷打等　伊布許等能其等　老爾
てある　わがみのうへに　やまひをら　くはへてあれば　ひるはも　なげかひくらし　よるはも
丑阿留　我身上爾　病遠等　加丑阿禮婆　晝波母　歎加比久良志　夜波母
いきづきあかし　としながく　やみしわたれば　つきかさね　うれひさまよひ　こととは
息豆伎阿可志　年長久　夜美志渡禮婆　月　累　憂吟　比　許等許等波
しなともへど　斯奈奈等思騰　五月蠅奈周　佐和久兒等遠　宇都丑丑波　死波　不知　見乍阿
れば　こころはもえぬ　かにかくに　おもひわづらひ　ねのみしなかゆ
禮婆　心波母延農　可爾可久爾　思和豆良比　禰能尼尾志奈可由

語釋　○たまきはる　「うち」に係る枕詞。既出(三六頁)。「剋」は刻に通じ、キザムと讀む。○うちのかぎり　現の限。生きてある世の限の意。「うち」はウツの轉。○謂瞻浮洲人壽一百二十年　これは割註の文。上に「うたまきはる

ちの限」とある人壽の定數を示したもので、贍浮洲卽ち須彌山の南にある大陸に生息する吾人の世界では、人壽が通例百二十歳だといふこと。○こともなき　無事なるをいふ。○もなく　「も」は凶事の意。マガ(凶)の約マの音轉。喪をモと訓むも、喪は凶事だからである。この語集中にも二三見え、又伊勢物語、蜻蛉日記などにも出てゐる。宣長がマガゴトの約と說いたのは頗はしい。「愛」は借字。○うけく　憂くの延言。中止格。○つらけく　悪くの延言。中止格。神代紀に、其中一兒、最悪不レ須二教養一とある。○いたきぎには――　上の沈レ痾自哀文に、諺曰、痛瘡灌レ鹽、短材截レ端とある。「は」は輕く添へた辭。○からしほ　辛鹽。利きのよい鹽のこと。延喜式に甘鹽、味鹽、煮鹽の目がある。○そそぐちふがごとく　「何」を衍としてソヽグチフゴトクと訓んでもよい。○おもきうまに　荷の重き馬。語は不完であるが、意はこれで通じたもの。○うはにうつ　上荷を付くること。「うはに」は餘分に載する荷の稱。「うつ」は荷に付くこと。重荷の馬に上荷打つとは當時の諺であらう。後撰集(賀)にも「重荷にはいとゞ小附を」とある。○おいにてある　年寄つて居る。「に」は去にの意。○やまひをら　この「ら」は强辭。複數の意ではない。卷二十にも「子をら妻をらおきてらも來ぬ」とある。○なげかひ　歎きの延言。○うれひさまよひ　前出(一五四九頁)。○ことことは　他に所見のない語である。(1)悉は(古說)。(2)異事は(契沖說)。(3)かくの如くならばの意(中島廣足說)。以上のうち(1)が稍可なりと思ふ。「こととことは死ななな」は全く死にたいと釋してよい。○しなな　死ななむ。「きかま」を見よ。(一一頁)。○さばへなす　「騒ぐ」の枕詞。既出(一〇三九頁)。○うつてては　打棄てはの意。チスの約ツとなる(契沖說)。卷十一に「打棄乞」とある。○しにはしらず　六言の句。死にはならず、死ぬ方角もない、などの意。「しに」は假體言。○みつつ　子どもを。古義に、生老病死の憂き事を見つゝの意としたのは誤。

【歌意】　この生きの限は、平らかで安穩にもあらうものを、無事で悪い事もなくあらうものを、世の中は憂いつらいもので、取分け、諺に傷手には鹽を撒りかけるといふやうに、重荷の馬に小附けをするといふやうに、年寄つてゐる自分の身の上に、病氣をさ加へてゐるから、晝はまあ歎いてくらし、夜はまあ溜息吐いて明かし、年久しく惱んでゐるので、月を累ねて憂へて呻り、全く死にたいと思ふけれど、うるさく立騒ぐ子供達を、打棄てゝは死ぬ方角もなく、それを見てゐると心は愛に燃え立つ。何のかのと思案に暮れて、聲を立てゝのみさ泣かれるわ。

評　「平けく安けく」、「事もなく喪なく」は人間生活の多難が齎す自然的欲求で、又究竟の理想であるから、その實現はとても何時の世でもむづかしい。そこに宗教も生まれ、信仰も生まれ、道德も生まれる。佛者は人間界を苦界と說き、生老病死の四苦を主張した。作者は特に佛教信者であつたから、「世間の憂けくつらけく」の厭世觀をもつのも亦當然の事である。

作者は老苦に病苦を重ねて、長年月この濁世に喘いだ。堪へかねては時に死を思ふ。そこが人間の弱さだ。といつて屑よく死にもならぬのは、足拄手拄の子供故で、進退谷まつては音を擧げて泣くといふ。

こんな事は世間にザラにある事だが、その當事者としては、自分ばかりが特別に非道の重壓を蒙つてゐるかに感じ、その不幸悲運を强調して、身を歎き世を恨むも亦人情の常である。殊更に高邁達識の醒語を著けぬ處に、凡人としての作者の正直な小心な性格が想望される。

尙こゝに註脚を要することは、作者が死を思ふ際に、一言も妻君の上に言及してゐない事である。上の思ニ子等ニ歌の評中に絮說した如く、その妻君は既に病歿してゐたので、作者ひとり老境に穉兒を抱いて、その慘めな生活を送つてゐた事を知らねばならぬ。

本篇は多くの人が體驗し、又は體驗すべき悲痛な事相が骨子であるから、その感想と敍述とが常識的皮相的である割に、頗る大衆に共鳴をおこし易い。「痛き瘡には辛鹽をそそぐ」「重き馬荷に上荷打つ」の諺語を取入れた排對も、この卑近な歌柄にふさはしい措辭である。隨つてこの歌は、高渾雅馴な歌調を執する前代の歌聖人麻呂赤人の如き作家の、殆ど夢想だもせぬ範疇のもので、作者憶良が、かの大作家達の後を承けて、別に一旗幟を樹て得た所以もこゝにある。

修辭の上から見ると、初頭から「年長く病みし渡れば」までは無難だが、「月累ね憂ひさまよひ」の句は、上の「歎ひくらし」「息づきあかし」にさし合ふので面白くない。寧ろこの一句は削つて、「年長く――」の句を單句とするがよい。「見つつあれば心は燃えぬ」の情語は、この篇中の警策である。

篇法は一意到底で、別に段節を切る必要を認めない。

反歌

なぐさむる　こころはなしに　くもがくり　なきゆくとりの　ねのみしなかゆ
奈具佐牟留　心波奈之爾　雲　隱　鳴往鳥乃　禰能尾志奈可由

釋 ○こころはなしに　「に」はニテの意。○なきゆくとりの　鳴き往く鳥の如く。

900

【歌意】慰む心は更にないので、雲の中に鳴いて往く鳥のやうに、音を立てゝさ泣かれるわ。

評 三四の句は譬喩で、序詞のやうな輕いものではない。「雲がくり鳴きゆく鳥」、いかにも陰慘な背景を作すものではないか。

すべもなく　くるしくあれば　いではしり　いななともへど　こらにさやりぬ
周弊母奈久　苦志久阿禮婆　出波之利　伊奈奈等思騰　許良爾佐夜利奴

901

釋 ○いなな　去なむの意。○さやり　障りの古言。

【歌意】せう事もなく苦しいので、家を驅け出して去なうと思ふけれど、子供に引つ懸かつてね。それも出來ない。

評 弱者の安息は逃避より外はない。西行のは理想に活き、子供の縋るのを蹴飛ばしても出家したといふが、わが人間憶良は何處までも子煩惱だから、屑くそんな逃避も出來得ない。八方からの矢柄責に喘いで、徒らに苦悶してゐる。「子らにさやりぬ」、何と慘ましい又溫かい愛の叫であらう。

みなわなす　もろきいのちも　たくなはの　ちひろにもがと　ねがひくらしつ
水沫奈須　微命母　栲繩能　千尋爾母可等　慕久良志都

902

釋 ○みなわなす　水沫の如き。「みなわ」は水のあわの省約語。「なす」を見よ(九〇頁)。○もろきいのち　脆

い生命。「微」をモロキと讀むは意訓。○たくなはの　栲繩の如く。千尋に係る枕詞。「たくなはの」は既出（五八九頁）○ちひろにもが　千尋は長くの轉義。「ち」は多數の義。「ひろ」は尺度の稱。兩手を左右に伸ばした程の長さをいふ。約六尺。「もが」は願望辭。既出（七四七頁）。○ねがひ　「慕」をかく讀むは意訓。

【歌意】水泡に似たはかない命を、栲繩の長いやうに、長くありたいと希うて、日を送ることよ。子供故にさ。

【評】「水沫なすもろき命」は、金剛經の十喩に本づき、上の爲二熊凝一述二其志一歌の序中にも、「泡沫之命難レ駐」と、この作者は書いてゐる。卷二十の願壽歌の

水ぼなす假れる身ぞとは知れどもなほし願ひつ千歳の命を　（——四三〇）

と同想同型であるが、その長壽を願ふ動機に至つては、非常な複雜な感情をこれは包藏してゐる。作者は始から長壽を願つてゐない。寧ろ「死ななと」と思つてゐた。只父性愛の强烈さに、自まゝな死の逃避を中止して、その老軀に鞭打つて强く生きようとするので、實に沈痛の聲酸楚の語である。初句三句の修飾語の相對、これも亦一體。

しづたまき　かずにもあらぬ　みにはあれど　ちとせに　もがと　おもほゆるかも

倭文手纏　數母不在　身爾波在等　千年爾母何等　意母保由留加母

去神龜二年作レ之。但以レ類故更載二於茲一。

この一首は神龜二年の作だが、前の「水沫なす云々」の歌意に類してゐるから、茲に並べて載せたとの意。これは憶良の自註である。

903

【標】○しづたまきかずにもあらぬ　既出（一二九三頁）。

【歌意】私は數へるに足らぬ、身ではあるけれど、壽命だけは千年でもありたいと、思はれることよな。

【評】老境に臨んだ感慨である。幼い子供の行末を想へば、是非とも長命をして、その面倒を出來るだけ見て遣らねばならぬ責任がある。長壽を願ふその動機を想ふと、そこに一段の哀愁が漂ふ。但尊貴の御方や何やは勿論、數ならぬわが身でもと、頗る分別に著した抑揚の語を發した。生活に大した變調のない時期では、感情が隨つて平靜で、自然理に詰んだ作に墮ちるのは據ない。

神龜二年には作者の妻君はまだ存命であつたことを記憶したい。

天平五年六月丙申朔三日戊戌作。

右の老病云々の長短歌は、天平五年の丙申が朔に當るその六月、戊戌の日に當るその三日に詠んだとの意。

戀二男子一名古日　歌三首

死んだ男の子を戀ひ思ふ歌との意。割註「名古日」は原本に本行に書き下してある。又原本題詞の下に「長一首短二首」との割註がある。無論後人の記入。

よのひとの　たふとみねがふ　ななくさの　たからもわれは　なにせむに　ねがひほりせむ　わが

世人之　貴慕　七種之　寶毛我波　何爲　慕欲世武　和我

904

なかの　うまれいでたる　しらたまの　わがこふるひは　あかぼしの　あくるあしたは　しきたへの
中能　産禮出有　白玉之　吾子古日者　明星之　開朝者　敷多倍乃
とこのへさらず　たてれども　をれどもともに　はらからと　あそびたはぶれ　ゆふづつの
登許能邊佐良受　立禮杼毛　居禮杼毛登母爾　同胞等　遊戯禮　夕星乃
ゆふべになれば　いざねよと　てをたづさはり　ちちははも　うへはなさかり　さきぐさ
由布弊爾奈禮婆　伊射祢余登　手乎多豆佐波里　父母毛　表者奈佐利　三枝
の　にをねなかむと　うつくしく　しがかたらへば　いつしかも　ひととなりいでて
之　中爾乎祢牟登　愛　久　志我可多良倍婆　何時可毛　比等等奈理伊豆天
あしけくも　よけくもみむと　おほぶねの　おもひたのむに　おもはぬに　よこしま
安志家口毛　與家久母見牟登　大船乃　於毛比多能無爾　於毛波奴爾　横
かぜの　にはかにも　おほひきぬれば　せむすべの　たどきをしらに　しろ
風乃　爾母布敷可爾布敷可爾　覆來禮婆　世武須便乃　多杼伎乎之良爾　志路
たへの　たすきをかけ　まそかがみ　てにとりもちて　あまつかみ　あふぎこひの
多倍乃　多須吉乎可氣　麻蘇鏡　手爾登利毛知弖　天　神　阿布藝許比乃
みくにつかみ　ふしてぬかづき　かからすも　かかりもよしゑ　あめつちの　かみのまに
美　地　祇　布之弖額拜　可加良受毛　可賀利毛吉惠　天地乃　神乃末爾
まと　たちあざり　われこひのめど　しましくも　よけくはなしに　やややにか
麻仁等　立阿射里　我例乞能米登　須臾毛　余家久波奈之爾　漸々可
たちくづほり　あさなあさな　いふことやみ　たまきはる　いのちたえぬれ　たちをど
多知久都保里　朝朝　伊布許登夜美　靈　剋　伊乃知多延奴禮　立乎杼
り　あしすりさけび　ふしあふぎ　むねうちなげく　てにもたる　あがこどばしつ
利　足須里佐家婢　伏　仰　武禰宇知奈氣苦　手爾持流　安我古登婆之都
よのなかのみち
世間之道

釋　○ななくさのたから　佛經に金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀を七寶と稱する。○なにせむに　の下、一句脫ちてゐる。古義は慕欲世武と補ひ、考はかなしき妹と補つた。○わがなかの　わが夫婦中の。不完ながらかう解しておく。この句は下の「吾子」に係る。新考は「能」を爾の誤としてワガナカニと訓んだ。これは解し易い。○しらたまの　白玉の如き。○あかぼしの　「あくる」に係る枕詞。アカ、アクの同意語の類音を疊んだ。六帖の「明星のあかぬ心に」も同例。古義に、朝の枕詞として說を立てたが頗はしい。金星を夜明には明星、夕方には夕づつと稱する。○しきたへの　枕及び床の枕詞。既出(二五五頁)。○ともに　の下、戯禮」の上に句が落ちてゐる。同胞等遊タハブレとするか。古義は可伎奈遲弖言問タハレ、新考は父母等遊タハブレと續けた。尚適當の語を何とでも補つてよい。○ゆふづつの　夕の枕詞。ユフの語を疊んでいふ。既出

（五一七頁）を參照。○いざねよと　古日の詞。○てをたづさはり　手携ひと同意。「を」は強辭。「たづさはり」は携ひの延言。○うへはなさかり　側は離れるな。「うへ」はほとりの意。眞淵は「表」を遠の誤としてトホクハナサカリと訓み、新考は「者」をも衍としてトホクナサカリと訓んだ。○さきぐさの　中に係る枕詞。「さきぐさ」は三枝草。葦が三叉に出て春花の咲く草。三つあるものは中ある故に中の枕詞となり、又「春さればまづさき草の」（卷十）とも詠まれた。但その物は不明。(1)萱草。文字集略云、萱草枝々相値葉々相當也、和名佐木久佐（和名抄）とあるが、萱草は未詳。(2)山百合。山百合の古名佐草の轉（眞淵説）。これは令義解に、三枝祭、謂二率川社祭一、三枝華以飾二酒樽一とあつて、率川祭には山百合を用るから諸はれさうだが、百合は夏季の花で、「春さればまづさき草の」とあるに協はぬ。(3)三叉そはな（白井氏説）。この他靈芝、瑞香、蒼朮、三椏木、三葉芹、福壽草などの説は遠い。○なかにを　「を」は歎辭。○うつくしく　愛らしく。古義訓ウルハシクは非。○しが　「し」は其れの意と古義は解した。其奴をシヤツといふ例もある。○いつしかも　何時かまあ。「か」の疑辭は「みむ」に係る。「し」は強辭。○ひととなりいでて　人と成り出でて。一人前になるをいふ。○あしけくもよけくもみむ　「あしけく」「よけく」の下、あらむの語を各補うて聞く。○おほぶねの　頼むの枕詞。既出（五六九頁）。○よこしまかぜ　横様なる風。契沖訓によつた。○にはかにも　「爾母布敷可爾布敷可爾」は訓み難い。契沖は改めて、爾波可爾母布敷爾と訓んだが、宣長が更に布敷爾を削つてニハカニモと訓んだのに從ふ。○おほひきぬれば　古義訓オホヒキタレバ。○たどきをしらに　「たどき」は手著の轉。「たづきをしらに」を見よ（四一頁）。○しろたへのたすき　白栲の襷は即ち木綿襷のこと。神供を扱ふに木綿にて襷する。○たすきをかけ　六言の句。○まそかがみ　既出（六四二・一一九三頁）。○あまつかみ　天にます神。○こひのみ　既出（九八三頁）。○くにつかみ　地にます神。○ぬかづき　額衝き。頭を地に著けて禮すること。故に「額拜」の字を充てた。○かからずもかかりも　神の惠にかからざらむもかからむもの意。契沖説による。さてこの句の下、落句があらう。古義は吉惠、天地乃と補つた。假にこれに從つておく。「よしゑ」はまゝよの意。「ゑ」は歎辭。○まにまと　「まにま」はまに〳〵の意で、祝詞に用例が多い。古義にいふ、原本の「仁」は衍字と。○たちあざり　「あざり」は解し難い。(1)アセル（焦心）と同じ（契沖説）。(2)アザル（靡亂）と同語で、土佐日記に「いと怪しく鹽海のほとりにてアザレあへり」とある（古義説）。思ふに或は「阿」は居の誤で、キザリ（膝行）か。さらば立つたり居ざつたりの意。○よけくはなしに　よき事はなくて。「に」はニテの意。○ややややに　稍を重ねた副詞。眞淵訓による。古義は稍は彌々の義だから、それを又重ねていふ理なしと難じて、ヤウ〳〵ニと訓んだが、既に成語としての稍の語が存在してゐる以上は、それを反復したとて差支ない。又ヤウヤウはやや〳〵を音便で伸べた語で、平安期に初見の語である。舊訓ヤウヤクニ。○かたち　容貌。○くづほり　壞るゝこと。くづをれと同じい。「久都」原本に都久とあるは顚倒。契沖説による。○いふこともやみ　六言の句。○たえぬれ　絶えぬればの意。古格。○あしすり　「すり」清んで讀む。○なげく　「苦」原本に吉とあるが、歎きと申しては意が徹らない。○てにもたる　舊訓テニモテル。○あがことばしつ　吾が子の白玉を飛ばしつの意。上の「白玉のわが古日は」に應ずる。掌中の物を失つた意を弘めて、「飛ばしつ」といつた。新考の解は牽強。○よのなかのみち　前出（一五五〇頁）。

【歌意】　世人の貴んで欲しがる七種の珍寶も、私は何の爲に求め望まうぞ。私夫婦間に產まれて來た、白玉のやうな私の子古日は、明けの早朝は床のあたり退かず、立つてゐてもすわつてゐても、一緒に同胞達と遊び戯れ、

夕方になるとさあ寢なされと手を引張つて、父母は側を離れるな、その眞中に私は寢ようと、可愛らしくそれがいふので、何時かまあ大人になつて、よかれ惡しかれあらうを見ようと、力賴みに思ふに、意外に橫しまの風が、俄にも襲うて來るので、どう仕樣にもその手がかりを知らず、白栲の襷を肩に掛け、鏡を手に持つて、天の神を仰いで乞ひ祈り、地の祇を伏して禮拜し、神のお惠が懸からなからうが懸からうがまゝよ、只天地の神の御心のまゝにお任せ致しますと、立つたり居ざつたりして、私が乞ひ祈るけれど、一寸の間もその病狀のよい事もなくて、段々に容貌が痩せ衰へて、每朝いうた詞も止んで命は絕えたので、私は跳りあがり足を摺つて叫び、伏し仰いで胸を打つて歎く。あゝ到頭、手に持つてゐた私の子の白玉を飛ばしなくしたことよ。仕方のないものは人生の遲路さ。

評 七珍萬寶は世人の欲求する處、而もわが子古日のあるに及かず、上に

白玉も黃金も玉もなにせむに勝れる寶子にしかめやも（憶良――803）

とその著想を同じうする。これこの作者に就いて憶良說のおこる一理由である。

「明星のあくる朝は」以下、在世の古日の行動を丁寧に追憶し廻想した。朝は床のうちから起ち居して兄弟達と巫山戲まはり、夕は又さあ寢ようと兄弟と手を繋いで、兩親の眞中に自分は寢るのだと頑張つたといふ。頑是ない幼兒の痴態を遺憾なく描寫し盡したものだ。成人してどんな者になるかわからぬが、とまれかくまれ末長く面倒を見て遣らうと、それを又親は樂しみに待つのであつた。

突然の病氣、橫しま風が俄に吹いた。この風を風邪のことゝする說もあるが、さう拘はらぬ方がよいと思ふ。

子供の病氣ぐらゐ親心の途方に暮れるものはない。勿論醫師はゐるけれど、祈禱は更に醫師以上と一般に考へられてゐた時代だ。卽ち自身木綿襷を懸け、手に鏡を執つた。鏡は榮樹に懸けて神體とも仰ぎ、又病魔退散の厭勝の具ともなるのであつた。かくしてあらゆる天神地祇を仰ぎ伏して禮拜し祈願する。ひたすら熱誠を輸して、御利益は一切あなた任せだ。然るに何事ぞ、病は少康さへなしに憔悴脫落、口も利き得ず遂に絕命してしまつた。實に神も何も世にないの餘意が搖曳する。

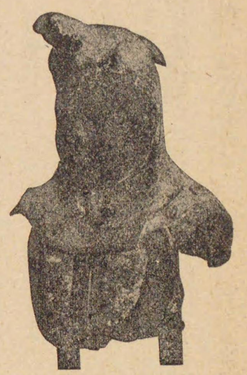
敍筆は始めて本題に入り、亡き古日の哀悼に逆上した自分の狀態を細かに描き、さてこの作を物する程に漸う落付きの出た卽今の心境から、玆に批判の語を下して、「世間の道」と、稍あきらめに近い冷語を以て結收した。それが又却てその悲痛を反撥する。要するに、親子愛を基調とした悼亡の悲曲で、情眞語眞、人をして卒讀に堪へざらしめる。

この篇惜しい事に本文にまゝ誤脫がある。「わが子飛ばしつ世間の道」の句の如き、奇拔ではあるが稍不完でもある。又既に「仰ぎ乞ひ祈み」「伏して額づき」とあるのに、更に「伏し仰ぎ胸打ち歎く」は、煩冗の感を免れない。

反歌

わかければ　みちゆきしらじ　まひはせむ　したへのつかひ　おひてとほらせ
和可家礼婆　道行之良士　末比波世武　之多敝乃使　於比豆登保良世

補 ○わかければ「わかし」は古へは幼弱なるをいふ。稚兒を若子、若郎子といふはその證である。（脇子の說



下方の使（389）（五部浄）

は附會）。○みちゆきしらじ　道を行くことを知るまい。「みち」は黄泉の道。冥途。○まひ　賂ひ。古へ禮物を幣と稱する。悪い意味での賄賂ではない。○したへのつかひ　下方の使。冥途の使者といふこと。下方は冥途をさす。佛説に、地獄餓鬼畜生人間天上の五道の世界に居りて、善悪を照鑑する神とす。菩薩處胎經に見える。冥官。○おひてとほらせ　古日を負うて通つて下さい。「とほらせ」は通るの敬相たる通らすの命令格。

【歌意】古日は年が往かぬから、冥途を行く方角もあるまい。依つてお禮物を上げませう、冥官様よ、古日を背負つて連れて往つて下さいよ。

評　古日は背に乘るほどの幼兒であつた。親心はあはれなもので、佛説によつて、末遙なる冥途を子供の一人旅する光景を想像しては、矢も楯もたまらず、その保護を下方の使に依頼した。幽明境を殊にしてゐる以上は、この依頼が果してその使の耳に達するか否か、甚だ覺束ないものだが、そんな理性を一切なくしてゐる處に、一本氣の愛情が躍動する。下方の使を人間使ひにしての「まひはせむ」も面白く、「負ひて通らせ」もこの事態に極めてふさはしい。

ふせおきて　われはこひのむ　あざむかず　ただにゐゆきて　あまぢしらしめ
布施於吉豆　吾波許比能武　阿射無加受　多太爾率去豆　阿麻治思良之米　906

語句　○ふせおきて　布施は梵語檀那の譯。施をせと讀むは吳音。布は普、施は捨又は散で、一切衆生を哀愍する故に、一切のものを普く惠施するをいふ。○あざむかず　欺かず。欺くは(1)出し抜くこと。(2)ダマスこと。こゝは(1)の意。○ただにゐゆきて　直ちに率て往つて。○あまぢ　天上界の路。佛經に修羅、人間、天人の三善道に地獄、餓鬼、畜生の三悪道を合はせて六道といひ、六道に生まるゝ者は何れも輪廻して成佛することがないとある。然し天人界は六道の最上位で、天上に住み歡樂を受けるもの。上の「久方の天路は遠し」の天路とは異なる。○しらしめ　「しめ」は使相の命令格。

【歌意】お布施を捧げて、私は佛様に乞ひ祈ります。佛様よ、子供だからとて馬鹿にせず、すぐに連れて往つて、天上の路を教へて遣つて下さいよ。

評　佛説に、親に先立つ子はその不孝の罪によつて、死後の成佛を得ないといふ。據なく極樂往生は諦めて、六道の最上位たる天人果を要望し期待したのは、せめてもの親心の現れである。さてさうとしてからが、頭是ない幼兒が死出の初旅では、全く「道行き知らじ」だから、布施を奉つて、「ただに率ゆきて天路知らしめ」と佛の慈悲に縋り付く。聊か蟲のよい注文も、結局は親心の悲しい愛の叫びである。「あざむかず」は人間的の情緒から出た冷語で、覺者たる佛に對しては失禮極まるが、その際の作者としては、子を思ふ熱愛より外に、

他を顧慮する遑もなかつた。神供には置くといふが常なので、それに倣つて佛供にも「布施おきて」といつた。布施の漢語而も佛語を躊躇なしに使つてゐるなど、萬葉人は大膽だ。

前の歌には冥途を管する下方の使に、この歌には十界の最上位者たる佛陀に、死者古日の保護を分擔させてゐる。實に到れり盡せりの行き屆いた情合を見る。

以上の長短歌三首は、左註によれば作者未詳であるのを、略解古義共に、この卷憶良の家集と見ゆれば、自らの名書かざりしもありしなるをやとて、憶良の作とし、左註は削るべしといつた。甚しい顚倒の論で、元來この卷を憶良の家集とすることからして謬見である。況や假にこの歌を憶良の作とする時は、憶良の妻は神龜五年に死んだのに、この長歌には「父母は表はなさかり」とあつて、夫妻共に存在してゐる趣だから、そこに矛盾がある。或は憶良が後妻を迎へてゐたかの疑もあるが、契沖は神龜五年に六十九歲（異論がある）の憶良が後妻を迎へらるべうもなしといつてゐる。何處までも左註を信じて、詠者未詳と見るが穩かである。

右一首、作者未詳。但以二裁歌之體一、似於山上之操一載二此次一焉。

右は作者不明の歌である。但詠歌の體裁からすると、山上憶良の歌調に似てゐる、よつて憶良の歌どもの次に書き添へたとの意。○操　風調の義。

この左註は上の長短歌三首をこゝに附載した所以を記したもので、何人の追記か。前人は家持の所爲とした。或はさうかも知れぬ、又さうでないかも知れぬ。斷言は早計である。

萬葉集卷第六目錄

雜歌

〔評釋頁〕

養老七年癸亥夏五月、幸二于芳野離宮一時、笠朝臣金村作歌一首并短歌……一六一一
或本反歌曰……一六一七
車持朝臣千年作歌一首并短歌……一六一〇
或本歌……一六二三
神龜元年甲子冬十月五日、幸二于紀伊國一時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌……一六二六
二年乙丑夏五月、幸二于芳野離宮一時、笠朝臣金村作歌一首并短歌……一六三一
山部宿禰赤人作歌二首并短歌……一六三四
冬十月幸二于難波宮一時、笠朝臣金村作歌一首并短歌……一六四一
車持朝臣千年作歌一首并短歌……一六四七
山部宿禰赤人作歌一首并短歌……一六五〇
三年丙寅秋九月十五日、幸二於播磨國印南野一時、笠朝臣金村作歌一首并短歌……一六五四
山部宿禰赤人作歌一首并短歌……一六五九

「千」原本に「于」とあり。
「歌」原本に「反歌曰」とあり。

過二辛荷島一時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌……一六〇五
過二敏馬浦一時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌……一六〇七
四年丁卯春正月、勅二諸王諸臣子等一、散二禁於授刀寮一時作歌一首并短歌……一六〇九
五年戊辰、幸二于難波宮一時、作歌四首……一六一三
膳王　歌一首……一六一四
太宰少貳石川朝臣足人歌一首……一六一五
帥大伴卿和歌一首……一六一六
冬十一月、太宰官人等、奉レ拜二香椎廟一訖退歸之時、馬駐二于香椎浦一各述レ懷作歌……一六一七
帥大伴卿歌一首……一六一八
大貳小野老朝臣歌一首……一六一九
豐前守宇奴首男人歌一首……一六二〇
帥大伴卿遙思二芳野離宮一作歌一首……一六二一
帥大伴卿宿二次田溫泉一聞二鶴喧一作歌一首……一六二二
天平二年庚午、勅遣下擢駿馬使大伴道足宿禰上時歌一首……一六二三
冬十一月、大伴坂上郎女發二帥家一、上道、超二筑前國宗像郡名兒山一之時作歌一首……一六二四
同、坂上郎女海路見二濱貝一作歌一首……一六二五
冬十二月、太宰帥大伴卿上レ京之時、娘子作歌……一六二六

（原本になし。）

大納言大伴卿和歌二首……一六二九
三年辛未、大納言大伴卿在二寧樂家一思二故郷一作歌……一六三一
四年壬申、藤原宇合卿遣二西海道節度使一之時、高橋連蟲麻呂作歌一首并短歌……一六三二
天皇賜二酒節度使等一御歌一首并短歌……一六三三
中納言安倍廣庭卿歌一首……一六三五
五年癸酉、超二草香山一時、神社忌寸老麻呂作歌二首……一六三七
山上臣憶良沈痾之時歌一首……一六三〇
大伴坂上郎女、與下姪家持從二佐保一還上歸二西宅一歌一首……一六三四
安倍朝臣蟲麻呂月歌一首……一六三五
大伴坂上郎女月歌三首……一六三六
豐前國娘子月歌一首　娘子字曰二大宅一　姓氏未詳也。……一六三九
湯原王月歌二首……一六四〇
藤原八束朝臣月歌一首……一六四一
市原王宴二于交友貴王一歌一首……一六四二
湯原王打酒歌一首……一六四三
紀朝臣鹿人跡見茂岡松樹歌一首……一六四四
同鹿人至二泊瀬河邊一作歌……一六四六

大伴坂上郎女詠二元興寺之里一歌一首……一七四七
同坂上郎女初月歌一首……一七四九
大伴宿禰家持初月歌一首……一七五〇
大伴坂上郎女宴二親族一歌一首……一七五一
六年甲戌、海犬養宿禰岡麻呂應レ詔作歌一首……一七五三
春三月、幸二于難波宮一之時歌六首……一七五五
筑後守外從五位下葛井連大成、遙見二海人釣船一作歌……一七六二
梭作村主益人歌一首……一七六三
八年丙子夏六月、幸二于芳野離宮一時、山部宿禰赤人應レ詔作歌一首并短歌……一七六五
市原王悲二獨子一歌一首……一七六八
忌部首黒麻呂恨二友除一來歌一首……一七六九
冬十一月、左大辨葛城王等賜二姓橘氏一之時、御製歌一首……一七七〇
橘宿禰奈良麻呂應レ詔歌一首……一七七四
冬十二月十二日、歌儛所之諸王臣子等、集二葛井連廣成家一宴歌二首……一七七一
九年丁丑春正月、橘少卿并諸大夫等、集二彈正尹門部王家一宴歌二首……一七七八
櫻井王後追和歌一首……一七八二
春二月、諸大夫等集二左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣家一宴歌一首……一七八三

作 原本になし。

位 原本になし。

辨 原本に臣とあり。

櫻 諸本に榎とあり。

便 原本に使とあり。

家 原本に屋とあり。

夏四月、大伴坂上郎女奉レ拜二賀茂神社一之時、便超二相坂山一望二見近江海一而晩頭還來作歌……一七八四
十年戊寅、元興寺之僧自嗟歌一首……一七八八
石上乙麻呂卿、配二土佐國一之時歌三首并短歌……一七八八
秋八月二十日、宴二右大臣橘家一歌四首……一七九八
十一年己卯、天皇遊二獵高圓野一之時、小獸泄走堵里之中。於是適二値勇士一、生而見レ獲、即以二此獸一獻二上御在所一副歌一首 獸名俗曰二牟射佐比一。……一八〇三
十二年庚辰、冬十月、依二太宰少貳藤原朝臣廣嗣反謀發一レ軍、幸二于伊勢國一之時、河口行宮内舍人大伴宿禰家持作歌一首……一八〇五
天皇御製歌一首……一八〇七
丹比家主眞人歌一首……一八〇八
獨漉二行宮一大伴宿禰家持作歌……一八一一
美濃國多藝行宮、大伴宿禰東人作歌……一八一三
大伴宿禰家持作歌一首……一八一六
不破行宮、大伴宿禰家持作歌一首……一八一七
十五年癸未秋八月十六日、内舍人大伴宿禰家持獻二久邇京一作歌一首……一八二〇
高丘河内連歌……一八二二

安積親王　宴ニ左少辨藤原八束朝臣家ニ之日、内舍人大伴宿禰家持作歌一首……八三
十六年甲申春五日、諸卿大夫集ニ安倍蟲麻呂朝臣家ニ宴歌一首……八三四
同十一日、登ニ活道岡ニ集ニ一株松下ニ飲歌二首……八三五
傷ニ惜寧樂京荒墟ニ作歌三首　作者不レ審……八三七
悲ニ寧樂ノ故京ヲ一作歌一首并短歌……八三〇
讃ニ久邇新京ヲ一歌二首并短歌……八三九
春日悲ニ傷三香原荒墟ヲ一作歌一首并短歌……八四四
難波宮作歌一首并短歌……八五九
過ニ敏馬浦ニ一時作歌一首并短歌……八六二

宴歌一首の下、舊本に姓氏不審の四字割註あり。

京の下、原本に鄕の字あるは衍。

萬葉集卷六

この卷はまづ養老七年夏から神龜年中、次に天平十六年頃までの諸作が收載されてある。

雜歌

養老七年癸亥夏五月、幸ニ于芳野離宮ニ時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

幸于吉野離宮　續紀に、元正天皇養老七年夏五月癸酉（九日）、行ニ幸芳野宮ニ、丁丑（十三日）車駕還ニ宮ニとある時のこと。「芳野離宮」のことは、「吉野宮」（一四四頁）、人麻呂の幸ニ吉野宮ニ之時歌の第二の長歌の評語（一五六頁）、及「吉野宮址考」（雜考7）を參照。○金村　傳既出（八四二頁）。△地圖及寫眞　挿圖35（一一〇頁）も（一一三頁）も（一四五頁）も（一四七頁）50（一五一頁）を參照。

たぎのへの　みふねのやまに　みづえさし　しじにおひたる　つがのきの　いやつぎつぎに
瀧上之　御舟乃山爾　水枝指　四時爾生有　刀我乃樹能　彌繼嗣爾
よろづよに　かくしもがもと　みよしぬの　あきつのみやは　かみからか　たふとかるらむ
萬　代　如是二二知三　三芳野之　蜻蛉乃宮者　神柄香　貴將有

くにからか　みがほしからむ　やまかはを　きよみさやけみ　とこみやと　うべしかみよゆ　さだめけらしも

國柄鹿　見欲將有　山川乎　清　清常宮等　諾之神代從　定家良思母

【標】○たぎのへのみふねのやま　既出(六四八頁)。○みづえ　瑞枝。うるはしい樹枝をいふ。「みづ」は美稱。「水」は借字。○しじに　既出(七八六頁)。「四時」は借字。○つがのきの「繼ぎ」の枕詞。既出(一二三頁)。「瀧のへの」よりこの句までは序詞。「刀」にツの音がないが、漢音タウ呉音トウだから、ツに轉用した。正辭はいふ、呉の轉音なるべし、同轉の毛をム、抱をフと呼べる例ありと。略解に都の旁の落ちたるを刀と書き誤れるかとあるが、寫字の心理上、都の字を書くに、者を落してβのみを書くことは諸ひ難い。舊訓トガノキ。○かくししらさむ「かく」は現在の事實をさしていふ。「し」は強辭。「二二」は算數的戲書。「三」は次句の頭の「三」と重ねて「二二」に對した「三三」の戲書。○みよしぬ　既出(一一〇頁)。○あきつのみや　蜻蛉野の離宮。「あきつのぬべ」を見よ(一四六頁)。○かみからか——くにからか「くにからか」を見よ(五九六頁)。○みがほし　既出(七八六頁)。○やまかはを　ヤマカハと清む。「を」は敷辭。○きよみさやけみ　清さに亮けさに。「清清」を濱臣が晴清の誤としてフカミサヤケミと訓み、古義が淳清の誤としてアツミサヤケミと訓んだのは何れも非。晴は僻字に過ぎ、淳は卷十八に「山河を廣み安都美と」の例もあるが、アツミは天下の廣大なる趣を表した語で、こゝに必要とする景勝を讃する語ではない。○とこみやと　常置の宮として。この句原本には缺けてゐる。古義に大宮等を本文に立てたが、今はその一考たる常宮等の方を本文に立てた。尙「とこみや」は下の「とこみやと」を見よ(一六二七頁)。○うべし　「うべ」は既出(七五二頁)。「し」は强辭。

【歌意】瀧の上方の御船の山に、瑞々しい枝を刺して、繁く生えてゐる栂の樹の名のやうに、彌よ繼ぎ〳〵に打續いて、萬代までに御門樣が、かうさお占めなさるであらうこの芳野の蜻蛉の宮は、こゝの神故に貴いのであらうか、こゝの國故に見たくあるのであらうか。こんなに山も川もまあ清く亮かさに、道理でさ常置の離宮を遠い神代から、此處に定められたのであるらしいわい。

【評】「瀧の上の」から「刀我の樹の」までの五句は序詞で、この樣式は赤人の登神岳歌、

三諸の神南備山に、五百枝さし繁に生ひたる、栂の樹のいや繼ぎ〳〵に、云々。(卷三、——376)

と全く同じだ。赤人の歌は、神龜元年の聖武天皇芳野行幸御時の歌の數首後に擧げてあるから、まづその頃の作と思はれる。これは元正天皇の御代の作だから、無論先出である。

蜻蛉離宮の前面に百千の銀龍を跳らす瀧つ瀨と、行雲の去來する御船の山とは、この離宮の景勝を代表する大事な山川で、「瀧の上の御船の山」といふ所以もこゝにある。さて栂の樹だ。いゝ具合に神名備山にも御船の山にもあつたものと思ふが、或は序詞を構成する爲の文飾かも知れない。詞人は時に無から有を生ぜしめる幻手段を弄する。「いや繼ぎ繼ぎに萬代にかくし知らさむ」は、離宮が永久に行幸の光榮に浴するであらう事を、眼前の事態から立證した讃辭である。

「神からか——國からか——」は人麻呂も既に用ゐた套語ではあるものの、山川の景勝に對する時、萬葉人はかく神と自然との威力を痛感せざるを得ないのであつた。そして「貴し」と仰ぎ、「見がほし」と慕ふのが

常であつた。

この兩行の對句から胚胎して、いひ換へればそれを結收して、「山川を清みさやけみ」と轉換し、遠く冒頭の「瀧の上の御船の山」に呼應して、以てこの離宮の存在に價値づけた。玆に至つて「うべし神代ゆ定めけらしも」の浮誇に近い言辭も、感情の昂揚に煽られて、眞實性をもつて受け取られる結果を將ち來した。實をいへば、芳野離宮は應神天皇朝にその端を發したもので、神代からあつた事は史に所見がない。神代を上代の意に解して、この矛盾を彌縫してもよいが、歌なり詩なり藝術なりには、時に虚實の間をゆく變化があるから、一概には律せられない。

この篇初頭より「見がほしからむ」までが第一段、以下が第二段で構成されてゐる。比較すると第一段の分量が多きに過ぎて、平衡が取れないやうだが、それは長い序詞を冠した爲である事を思へば、さのみ苦にならない。反面から見れば、一意到底の敍法が結末に一寸した變化を見せたともいへる。だが赤人の登三神岳一の作に比すると、數籌を輸する。概して著想が凡常で、敍事も新味が乏しい。

吉野離宮の題詠は人麻呂の長短歌數首（卷一所載）がその先鞭を著けてから、萬葉歌人は各心血を傾注して雄を爭ひ巧を競ひ、互にその力作を發表したが、遂に歌聖の作の右に出づるはさておき、その壘を摩することさへ出來ず、徒らにその範疇の間に東西するに過ぎなかつた。これ詩仙李白が黄鶴樓に崔顥の題詩の上頭にあるを見て、去つて金陵の鳳凰臺に題した所以である。

反歌

としのはに　かくもみてしが　みよしぬの　きよきかふちの　たぎつしらなみ

毎年如是賞見牡鹿　三吉野乃　清河内之　多藝津白波　908

釋 ○みてしが「しが」は願望辭。「牡鹿」の借字は戯意あるか。○かふち　既出（一四五頁）。○たぎつ「たぎつかふち」を見よ（五三頁）。△寫眞　挿圖50（一五一頁）を參照。

【歌意】 毎年このやうにまあ見たいがなあ、この芳野の美しい川曲の、瀧の白波をさ。

評 「清き河内の瀧つ白波」は芳野離宮の全生命であつて、さればこそ人麻呂は「瀧の都」（卷一）と呼び懸けた。瀧は即ち宮瀧で、約數町に亘る河床の岩石に河水の激突して雪を噴く光景は、實に語言に絶した佳勝であつたらう。今はその岩盤が高く露出して河床でなくなり、水量は減少して別に平瀬を作つて流れてゐる。滄桑の變、古への風光は求むべくもないが、寛平御記（扶桑略記所載）の文と現在の地形とを湊合すれば、ほゞ萬葉時代の瀧つ河内の景象を思ひ浮べることが出來る。

芳野行幸は持統天皇時代には頗る頻繁であつたが、元正天皇時代には漸くたまさかになつた。さてはこの瀧つ白波に對して、「年のはにかくも見てしが」と、年々の行幸を供奉者が希望するのも偶然でなくなる。尤もこの希望は單なる行人の所感としても聞えるが、題詞の言を重んじて、行幸時の感想として考へるのが至當ではあるまいか。

この下句は萬葉時代には珍しい綺麗な造語で、かうした體製は平安人の渇仰したものだ。集中の類句としては、僅に「三吉野の瀧の白波」（卷三）の一例を見るに過ぎない。

やまたかみ　しらゆふばなに　おちたぎつ　たぎのかふちは　みれどあかぬかも

山高三　白木綿花　落多藝追　瀧之河内者　雖見不飽香聞　909

【標】○しらゆふばなに　白い木綿花の如くに。「ゆふばな」は既出（五三八頁）。なほ「栲の穗に」を見よ（二七四頁）。

【歌意】山が高くて、恰も白木綿花のやうに、眞白に落ちたぎる、激流の川曲は、見ても〳〵飽かぬことよなあ。

【評】瀧は瀑布でないから、「山高み」は急角度の傾斜を表現したもので、懸崖の意ではない。吉野川は矢治、菜摘、蜻蛉のあたり、河中に亂石が散在して激湍を成し、その好風景は屢ば古代詩人の舌端に上つてゐる。

山高み白木綿花に落ちたぎつ夏身の河門見れど飽かぬかも　（卷九、式部大倭——一七三六）

は、四句が普通名詞と固有の地名と相違してゐるだけである。その語調聲調を按ずると、「瀧の河内は」は穩雅に、「夏身の河門」は剛健に聞える。音數の排敍如何にもよるが、「は」の辭の有無が殊にこの關鍵を握つてゐる。「白木綿花に」の譬喩は、打聞くから峻潔鮮白の感じが與へられ、激湍雪を噴く光景が如實に看取される。但これは萬葉人の慣用語で、

はつ瀬川白木綿花におちたぎつ瀬をさやけみと見に來しわれを　（卷六——一〇七）

の他、なほ盛に疊見する。

「見れど飽かぬ」は物の面白さを表現する套語で、端を人麻呂の吉野離宮の作に發した如くであるが、人麻呂とてもその創語者ではあるまい。集中餘にその使用が多い。必ずや當時の平語であらう。この歌の如き、四句までは、いかにも雄渾なる風姿と瑰麗なる詞藻とで只押しに押して來たのに、惜しい事に結句で頓挫して、理路に流れ、卒易に墮してしまつた。

更にいふ、この歌の作者金村と、卷九の歌の作者式部大倭とは同時代と思はれる。さては何れが先出か。

或本反歌曰。

かみかから　みがほしからむ　みよしぬの　たぎのかふちは　みれどあかぬかも

神柄加　見欲賀藍　三吉野乃　瀧河内者　雖見不飽鴨　910

【標】○たぎの　タギツとも訓まれるが、類聚抄にも瀧之とある。

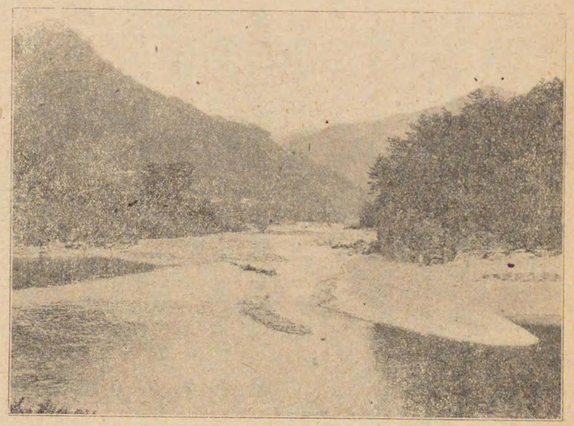
【歌意】この神故でかうも見たいのであらうか。この吉野の瀧の河内は、見ても〳〵見飽かぬことよ。

【評】初二句は長歌中の語を拉し來つたものだが、二句の「見がほし」と、結句の「見れど」とがさし合つて、不快である。但集中に例は山ほどある。

みよしぬの　あきつのかはの　よろづよに　たゆることなく　またかへりみむ

三吉野之　秋津乃川之　萬世爾　斷事無　又還將見　911

【標】○あきつのかは　蜻蛉の川。秋津の川。吉野川が蜻蛉野を通過する時の稱。今も宮瀧の水の平淺に委した邊に、アキドの稱が遺つてゐる。アキツの訛であることは疑ふ餘地もない。又その南岸の小平地を御園と稱



秋津川（宮瀧ノ下流）（390）

する。靈異記に、吉野郡桃花里――同處有レ河、名曰二秋河一とある。桃花里を御園に充てれば、秋河は卽ち秋津川に當る。秋河は秋津河の落字であらう。○あきつのかはの　初句よりここまでは序詞。

【歌意】吉野のこの秋津川のやうに、萬年も絶えることなしに、何遍となく來て見ようわい。

評　直接には吉野川の景勝の讃美、間接には吉野離宮の禮讃である。下句が套語なので、多少でも新味を欲して、秋津川の稱呼を點綴したのは作者の機轉である。ここゝは激流宮瀧の景致とは反對に、水淺く沙濶く、左右の山がなだれて、水を挾んで相接した川曲である。

この下句に就いては、

見れど飽かぬ吉野の川の常滑（トコナメ）の絶ゆることなく又かへりみむ（卷一、人麻呂――37）

の評語（一五一頁）を參照。

はつせめが　つくるゆふばな　みよしぬの　たぎのみなわに　さきにけらずや

泊瀨女造木綿花　三吉野瀧乃水沫開來受屋　912

語釋　○はつせめ　初瀨に住む女の稱。河内女、難波男などの同例。「はつせ」を見よ（八頁）。○はつせめがつくるゆふばな　古へ初瀨女が專ら木綿花を作つたのでいふ。この句の下にがの辭を含んでゐる。○みなわに　水沫と。この「に」はノ如クの意ではない。トナツテ、トシテなどの意。○さきにけらずや　「けら」は過去詠歎の助動詞けりの第二變化。「や」は反動辭。

【歌意】初瀨女が作る木綿花が、不思議にも、この吉野の瀧の飛沫となつて、咲いたことではないかい。

評　色相の聯想から初瀨女の木綿花を拉へて、吉野の瀧の水沫に配合するに至つて、一段の姿致が橫生する。抑も木綿花が水沫に咲くことが既に不思議であり、その木綿花が初瀨女のであり、水沫が吉野の瀧のである事によつて、地理的に愈よ不思議である。かく取混ぜた不思議の念を強く表現し、讀者の注意を緊と引付けて脇目も振らせぬのは手際である。

開きにけるかもと平敍の詠歎で終る處を、殊更に曲折を求めて、「開きにけらずや」と反語の辭樣を用るたことは、上句の力強い調子に對應させる爲の手段でもあり、詠歎を強く永くする所以でもある。

古義に瀧を吉野の西河の大瀧に充てたのは拘はつてゐる。又小川村の丹生川の瀑でもない。吉野川の激湍なら何處でもよい。が强ひていへば矢張宮瀧の瀨であらう。尙委しくは吉野離宮址考（雜考――7）を參照されたい。

車持朝臣千年作歌一首并短歌

○車持朝臣千年　傳未詳。車持は氏。車は加行四段活の繰ル輪の轉。故にクラの略訓が生ずる。「千」原本に于とある。元暦本その他に從つた。

うまごり　あやにともしき　なるかみの　おとのみききし　みよしぬの　まきたつやまゆ
味凍綾丹乏敷鳴神乃音耳聞師三芳野之眞木立山湯　913
みくだせば　かはのせごとに　あけくれば　あさぎりたち　ゆふされば　かはづなくなべ
見降者川之瀬毎開來者朝霧立夕去者川津鳴奈辨詳
ひもとかぬ　たびにしあれば　わのみして　きよきかはらを　みらくしをしも
紐不解客爾之有者吾耳爲而清川原乎見良久之惜蒙

【標】○うまごり　「あや」の枕詞。既出（四五五頁）。四言の句。童本訓ウマゴリノは非。○あやにともしき　奇しいまでに結構な。「ともしき」は既出（七二四頁）。この句「みよしぬ」に係る。舊訓アヤニトモシク。○なるかみの　音に係る枕詞。「なるかみ」は雷。嚴槌のこと。○おとのみききし　音に聞くは噂に聞くの意。名詞に音聞といふ。卷七に「動神の音のみ聞きし卷向の檜原の山を」とある。○まきたつ　既出（一七七頁）。○みくだせば　見おろすと。遊仙窟に「直下則有二碧潭千仞一」とある。契沖初訓ミオロセバ。○あけくれば　夜が。○ゆふされば「ゆふさりくれば」を見よ（一七八頁）。○かはづ　既出（七八七頁）。○なくなべ　鳴くにつけ。「詳」は衍字、元暦本その他にない。「辨」を眞淵は理の、古義は利の誤として、ナクナリと句を切つたが、切らずに末節にいひ續ける體もあるから、文字を改易する說には從ひ難い。○ひもとかぬ　衣の紐も解かぬ旅と續く。家にあれば衣の紐を解いて打解けもするが、旅ではその餘裕がないのでいふ。卷九、檢稅使大伴卿登二筑波山一時歌に「うれしみと紐の緒解きて、家のごと解けてぞ遊ぶ」とある。○みらくし　「みらく」は見るの延言で、見ることがの意。「し」は強辭。○をしも　「惜」原本に情とあるは誤。

【歌意】奇しい程に結構な、そして噂にばかり聞いて居たことであつた、この吉野の眞木の茂つてゐる山から、いま見瞰すと川の瀨毎に、夜が明けてくると朝霧が立ち、夕方になると蛙が鳴くにつけ、何にせよ、衣の紐さへ解かぬ旅中でさあるので、自分ばかりで以て、この奇麗な吉野の河原を見ることがさ、勿體ないことわい。思ふ人にも見せたいなあ。

【評】「三芳野の眞木立つ山」は吉野の何處か。反歌に「三船の山」が出てゐるから、やはり蜻蛉離宮附近の山として置かう。朝霧が立ち、蛙が鳴く、これらの景物はお約束のやうだが、吉野の行遊は大抵夏秋の季間が主だから據あるまい。況や作者は始めての吉野行だ。凡常の景物も尙感興を惹くに十分であつたらう。

一寸赤人の登二神岳一歌（卷三）の風調に似た處がある。吉野の詠としては、今少し輪廓の大きな描寫が欲しいが、景に依つて情を起し、つぶさに家人に寄懷したその兼愛の情味は、誠になつかしいものがある。この點他の吉野遊覽の諸作に發見し難い特徴と認められる。

「蛙鳴くなべ」の句、は實に鳴くなりと切つて、段節を劃然とさせたい處である。然しこの時代には一意到底

の敍出が漸く多くなり、段節に就いての觀念が薄らいで來たやうである。下の赤人の玉津島の作の如きも、これと同軌である。

反歌一首

たぎのへの　みふねのやまは　かしこけど　おもひわすれる　ときもひもなし
瀧上乃　三船之山者　雖　畏　思　忘　時毛日毛無　914

【釋】○かしこけど　畏けれども。遠けどもと同語法。「とほけども」を見よ（九〇二頁）。宣長の「畏」は見の誤にてミツレドモなるべしとの考は無用。

【歌意】瀧の上の三船の山は畏いけれど、私の心に思ひ忘れる、時とても日とてもないわ。

【評】三船の山には白雲の下りることが集中に歌はれてもあるが、僅かの小山だから、「畏けど」は誇張に過ぎはしまいか。又離宮當面の山たるが故に、聯想的に畏いといはれぬこともないが、「思ひ忘るる時も日もなし」は、この山に對する感想としてはふさはしくない。必ず假托の言である。

想ふに作者は或貴女に戀して居たのであらう。吉野客中の無聊は、愈よ奈良京裏の人戀しさに拍車を懸け、乃ちその人を當面の三船の山に準擬し、畏い事だが思ひ忘れる時とてはないと呻吟したものであらう。長歌の「吾のみして見らくし惜しも」も、さてこそ大いに有意味の切實感をもつ。

「時も日も」の漸層は珍しい事ではいが、この場合いひ得てよい。

或本歌

原本には或本反歌曰とある。又この題詞の無い本もある。次の二首の意を按ずるに反歌ではないらしい。左註にも只類を以て茲に連載したとある。よつて改めた。

ちどりなく　みよしぬがはの　かはとなす　やむときなしに　おもほゆるきみ
千鳥鳴　三吉野川之　川音成　止時梨二　所思公　915

【釋】○ちどり　既出（六八七頁）。○みよしぬがはの　卷七にも「馬なめて三芳野河を見まく欲り」とある。○かはとなす　川音のやうに。「川」原本にない。活字本に依つて補つた。

【歌意】千鳥が鳴く、吉野川の川音のやうに、止み間なしに、戀しく思はれる君様よ。

【評】客中人を憶ふは前首と同じい。主格の「公」を最後に据ゑて、層々積み上げた樣式も面白く、素直に暢びやかな作である。只「川音なす」は既に聽覺を主とした譬喩であるのに、初句の「千鳥鳴く」が又聽覺の語である事が不快である。それは單に吉野川の修飾に過ぎない、輕いあしらひの語であるにせよ、この重複は主感の統一を妨げ、混線の嫌を招く。但千鳥鳴く佐保川、蛙鳴く井手の儔、一首のうちに多少のさし合ひはあつても、古人はあながち拘泥しなかつた。

古義に「面白き勝地の景色を本郷人に見せたくて」とあるは、上の反歌として強ひて曲解したもので蛇足。

あかねさす　ひならべなくに　わがこひは　よしぬのかはの　きりにたちつつ

茜刺　日不並二　吾　戀　吉野之河乃　霧丹立乍　916

【釋】○あかねさす　日の枕詞。既出(九二頁)。○ひならべなくに　日數を並べぬのに。日數經ぬをいふ。○わがこひは　「吾」の代名詞は大體において、上代はアの獨行、奈良時代はア、ワ並行、平安時代以後はワの獨行で、三期にわかれてゐる。古義に集中の「吾」(我)を一律にアとのみ訓んだのは非。○きりにたち　霧と立ちの意。この「に」は上の「みなわに」のにと同意。

【歌意】別れて後、さう日數を重ねもせぬのに、私の戀の息吐は、この吉野の川の霧となつて、立ち〳〵するわ。

【評】客中の感懷だが、別離の意はその實境に托されて、歌には言及してない。依つてその意を補足して聞かなければならぬ。

「わが戀は――霧に立ちつつ」も簡略過ぎた表現である。委しくは戀の歎き(長息)が霧に立つとあるべきだが、歎きの霧は古來からの套語となつてゐる以上、當時はこれで明かにその意が通じたものらしい。なほ卷五、「大野山霧立ち渡る」の評語(一四一四頁)を參照されたい。

右年月不レ審。但以二歌類一載二於此次一焉。或本云、養老七年五月幸二于芳野離宮一之時作。

右二首の歌はその製作年月が分明しない。但上の車持朝臣の長短歌の類だから、この次に載せたとの意。この註語は右二首が反歌でないことを主張したもの。「或本云――」はその意が不完であるが、これは車持朝臣の長短歌及び或本歌を、上の笠金村の作と同じく、養老七年五月の吉野行幸時の作と見たものであらう。

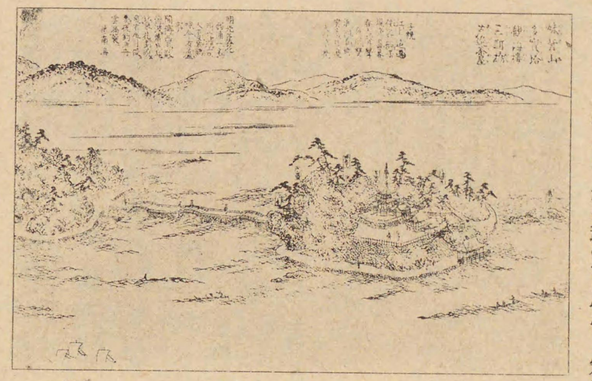
神龜元年甲子冬十月五日、幸二于紀伊國一時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌

○十月五日　は聖武天皇が紀州行幸のため、奈良京御發輦の日である。○幸于紀伊國　續紀に、神龜元年冬十月辛卯(五日)天皇幸二紀伊國一。癸巳(七日)行至二紀伊國那賀郡玉垣勾頓宮一。甲午(八日)至二海部郡玉津島頓宮一、留十有餘日。戊戌(十二日)造二離宮於岡東一、是日從レ駕百寮、六位已下至二于使部一、賜レ祿各有レ差。壬寅(十六日)云々。又詔曰、登レ山望レ海此間最好、不レ勞二遠行一足二以遊覽一、故改二弱濱一名爲二明光浦一。宜下置二守戸一勿令二荒穢一。春秋二時差二遣官人一、賫二祭玉津島之神一、明光浦之靈一。己酉(廿三日)車駕至レ自二紀伊國一。

やすみしし　わごおほきみ　とこみやと　つかへまつれる　さひがぬゆ　そかひにみゆる
安見知之　和期大王之　常宮等　仕奉　流　左比鹿野由　背上爾所見　917
おきつしま　きよきなぎさに　かぜふけば　しらなみさわぎ　しほひれば　たまもかりつつ
奥　島　清波瀲爾　風吹者　白波左和伎　潮干者　玉藻苅管
かみよより　しかぞたふとき　たまづしまやま
神代從　然曾尊吉　玉津島夜麻

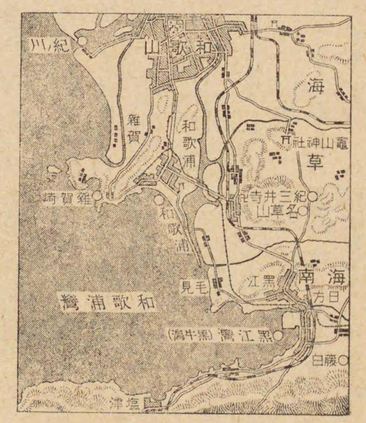
【釋】○やすみしし　既出(三〇頁)。○わごおほきみ　既出(二〇五頁)。○とこみやと　「とこみや」は常置の宮、又は常置さるべき宮をいふ。「常宮」を宣長の「トツミヤ(外つ宮)と訓むべし、常は借字なり」との說が出てか

らは、註家は絶對盲從してゐるが、如何にしても無理な訓である。卷二に「木の瓱の宮を常宮と定め給ひて」とあるのも、常住の宮の意である。尚評語を參照。

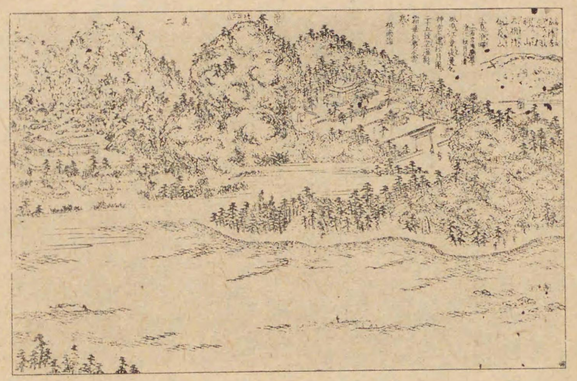


和歌 (392)

○つかへまつれる　直ちに「左比鹿野」に續く。玉津島離宮は左比鹿野（雜賀野）にあつた。○さひがぬ　紀伊國海部郡雜賀野。（今海草郡）。雜賀山（突端は雜賀崎）下の今の和歌浦町より東南方へかけた野。○そかひ　既出（八三四頁）。○なぎさ　既出（八六六頁）。○しかぞたふとき　かうも尊い。○たまづしまやま　玉津島といふに同じい。島中更に隆起ある島を島山といふ。○たまづしま　玉津島。後紀及び紀略には玉出島と



近附浦の歌和 (391)



浦全景

ある。津をヅと濁る證である。和歌の浦の入江にある小嶼で、後世妹妹島といつた。古へこゝに玉津島の神社があつた。今伽羅山の東麓にある玉津島明神は江戸時代の再興で、新玉津島と稱する。

【歌意】　わが天子樣の離宮としてお仕してゐる、雜賀野からそちらに見える、あの沖の島、その奇麗な波打際に、風が吹くと白波が立ち騷ぎ、潮が干ると玉藻を海人が刈り〳〵して、神代からさうも尊いわさ、あの玉津島山は。

【評】　聖武天皇はその神龜元年十月八日に弱（和歌）の浦玉津島に御到著、風光頗る叡慮に協ひ、十二日に至つて離宮造營の勅命が下つた。が實際は八日から十餘日間、黑木の柱に尾花刈り葺きの頓宮に御逗留あらせられたのであつた。後にその離宮が竣功してから守部を置かれた。

「大君の常宮」は事實に於いては外つ宮即ち離宮の事であるが、語意は頓宮行宮の假宮に對しての永住の宮の義である。さればこの歌は離宮造營の事が發表になつた十二日以後の作であらう。

抑も弱の浦は、雜賀野の北を局つて西走する雜賀山の岬端雜賀崎から、南方名草山の突端紀三井寺の崖下に至るまでの海灣の總稱で、今は北灣を新和歌浦と稱してゐる。

玉津島の頓宮（のちは離宮）は何處に置かれたか。玉津島は「雜賀野ゆそがひに見ゆる奥の島」とあるによれば海中の島嶼だつた。そして潮がさすと渚に白波が立ち、潮が引けば海人が玉藻を刈るやうな場所だとすると、雜賀（和歌）川河畔の後世妹妖島と稱した小嶼がこれに當る。然し分内が甚だ狹いうへに離れ島だから、頓宮を置かうにも離宮を置かうにも間に合はない。

茲に至つて雜賀野の一端妙見山附近に、當時の御座所を考へずばなるまい。離宮を造られた岡東は卽ち妙見山の東麓を斥すものらしい。この時の詔に、

登レ山望レ海此間最好、不レ勞二遠行一足二以遊覽一、故改二弱濱一爲二明光浦一。（續紀卷九）

と見え、登臨眺望の便宜があつたこともその證である。稱德天皇の天平神護元年十月の行幸に、

御二南濱望海樓一、奏二雅樂及雜技一。權置二市鄽一、令下陪從及當國百姓等任爲中交關上。（續紀卷廿六）

とある南濱は妙見山の南濱で、前面の玉津島を隔てゝ、近く紀三井寺の名草山、遠く藤代山に沿うた和歌黑牛の海灣を望み、遙に大崎と相呼ぶ形勝の地である。況や周圍は流下する土砂と、海風の吹き上げる堆砂とで潟地沼沮地を出現し、そこに鶴などの遊息に適する蘆荻の叢生を見るのであつた。西方は明け放しの大海であるが、餘り風の荒れない冬十月（舊曆）頃は、實に暢んびりした明媚な風光なので、桓武天皇の延曆廿三年冬十月の行幸の詔にも、

此月波閑時爾之旦、國風御覽須時止奈毛常母開所行須、今御坐所乎御覽爾、礒島毛奇麗久、海濱毛清憂爾之旦、御意

母於多比爾御座、云々。（後紀卷十二）

と仰せられ、御船遊があつた程だ。この時以後、史に行幸の所見がない。

この歌は雜賀野の頓宮邊から玉津島を眺望してのスケッチである。始に作者自身の立場を說明し、次に玉津島の海潮の干滿時の風景を自然と人事とに分つて對敍し、次に玉津島の禮讃に及んで筆を擱いた。この一結は冒頭の天皇をかけて歌ひ出した崇高莊重な意調と對應して均衡が保たれる。「しかぞ貴き玉津島山」、山岳の勝を讃へるに貴しの語を以てすることは、萬葉人の感情から出た、否山嶽崇拜時代からの套語である。

反歌

おきつしま　ありそのたまも　しほみちて　いかくろひなば　おもほえむかも

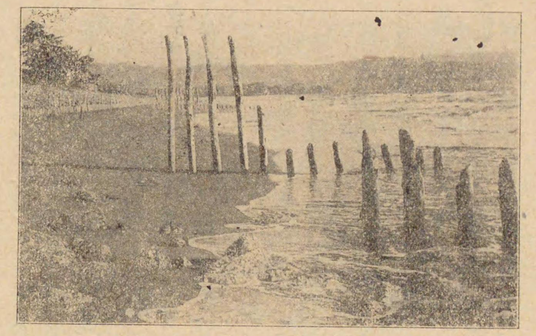
奥島　荒礒之玉藻　潮干滿　伊隱去者　所念武香聞　918

釋 ○しほみちて「潮干滿」は干を衍字としてかく訓む。但シホヒミチの古訓もある。○いかくろひなば　隱れなば。「い」は發語。イカクレユカバの訓は非。○おもほえむ　戀しく思はれよう。「宇陀の大野はおもほえむかも」（卷二）「筑紫の子島おもほえむかも」（卷六）など同例。

【歌意】 沖の島の荒礒の海藻が、潮が一杯にさして隱れようなら、定めし戀しく思はれよう事かいな。

評 潮干に露はれた礒つきの海藻に、新奇の物珍しさを感じたが、忽ち反射的にやがての滿潮には水の下であらうことに想到し、「おもほえむかも」と、強い執著を語つた。海珍しい都人士の口吻。

わかのうらに　しほみちくれば　かたをなみ　あしべをさして　たづなきわたる
若浦　爾　鹽滿來者　滷乎無美　蘆邊乎指天　多頭鳴渡　919



和歌の浦の干潟（393）

釋　○わかのうらに　若の浦、弱の浦。和歌と書くは後世のあて字。又眞若の浦（巻十一）ともいつた。續紀に弱浦を改めて明光浦となされたとあるが、それはアワの音通により、詩文を作るに都合のよい好字面を撰ばれたもので、矢張ワカノウラが泛稱であつた。○かたをなみ　「かた」は既出（三八六頁）。「を」は歎辭。○あしべ　「蘆」原本に蓧とあるは誤。元本その他に從つた。

【歌意】　若の浦に潮がさしてくると、干潟がまあ無さに、蘆原のあたりをさして、鶴があれ鳴いて行くわ。

評　潟は潮の干滿に隨つて出頭沒頭する鹵斥地である。干潮時そこに求食してゐた鶴も、滿潮となると渚附近の林樾をさして退去する。岩礁や沙洲に寄せ返る白波、滿々と湛へた遠淺の小波、青青と海風に靡く蘆原、それらのすべてが、沙頭から高鳴きして蘆邊に移動する白鶴の翼のもとに一括されてゐる。大なり小なりあらゆる物がその生命の躍動を感ずる景致と清楚なる色彩と爽快なる氣分とが相俟つて、長け高い行紋が縹渺たる高韻を傳へる。但その「潟をなみ」の一句は聊か理路に泥んだ痕迹を遺してゐる。白璧の微瑕。

右年月不記。但傳從駕玉津島之時作也。因今檢注行幸年月以載之焉。

右の歌は年月が記されてない、但玉津島行幸從駕の作というてゐる、そこで今行幸年月を檢べ注して、こゝに載せたとの意。「傳」は稱の古字。「玉津島」の下、。之時作の三字は原本にない、補つた。

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時、笠朝臣金村作歌一首幷短歌

○神龜二年云々　この行幸續紀に所載がない。紀の脫漏か。

あしひきの　みやまもさやに　おちたぎつ　よしぬのかはの　きよきをみれば　かみ
足引之　御山毛清　落多藝都　芳野河之　河瀨乃　清乎見者　上
へには　ちどりしばなき　しもへには　かはづつまよぶ　ももしきの　おほみやびとも　をちこち
邊者　千鳥數鳴　下邊者　河津都麻喚　百磯城乃　大宮人毛　越乞
に　しじにしあれば　みるごとに　あやにともしみ　たまかづら　たゆることなく　よろづよ
爾　思自仁思有者　毎　見文　丹乏　玉　葛　絕事　無　萬　代
に　かくしもがもと　あめつちの　かみをぞいのる　かしこかれども
爾　如是霜願跡　天地之　神乎曾禱　恐有等毛

【精】○あしひきの　山の枕詞、既出（三四三頁）。○みやまもさやに　「みやま」「さやに」は既出（三九七頁）。○かみへ　上の方。○しもへ　下の方。○ももしきの　宮の枕詞。既出（一二六頁）。○おほみやびと　既出（一三一頁）。○をちこち　(1)あちこち。彼方此方。(2)遠近。「越乞」はその字音を充てたもの。○しじにしあれば　澤山居るので。「しじ」は繁の意。○あやに　「丹」原本に舟とあるは誤。元本その他に從つた。○たまかづら　「絕ゆることなく」に係る序。既出（七八六頁）。○かくしもがもと　契沖初訓による。舊訓カクシモガナト。○かしこかれども　眞淵訓による。舊訓カシコケレドモ。△寫眞　挿圖108（三三〇頁）參照。

【歌意】山も清く鳴り響いて、流れ落ちてたぎる吉野川の、川瀬の奇麗なのを見ると、川上の方では千鳥が繁く鳴き、川下の方では蛙が妻を喚んで鳴く、その上供奉の大宮人も、あちこちに一杯に居るので、それらを見る度にひどくめでたくて、絕間なしに萬年も、かうまああありたいと、天地の神をさお祈りするわい、恐れ多いけれども。

【評】この篇離宮詞の常套たる冒頭句を置かず、突如としてまづ敍景に入つた。作者はこの三年前（養老七年五月）に、既に吉野離宮詞を賦した。樣に依つて胡蘆を描くのも快くないと見え、前度とその樣式を殊にして、かくの如き奇手を出した。

第一段、まづ吉野離宮の象徵たる激湍の勝を高唱し、その「清きを見れば」の一句は、第二段を展開した。

第二段、離宮四圍の景象を回看して、上つ瀨の千鳥下つ瀨の蛙、その清亮たる聽覺美に耳を傾けた。これは夏の蛙に冬の千鳥を配した文飾ではなく、この五月行幸時における矚目の實景なのである。千鳥は夏も盛に鳴ものである。更に回看すると、供奉の大宮人達が恰も點景人物の如く、その緋絲の袖を翻しつゝ、所在に往來する。これは嘗て人麻呂の歌つた、

百しきの大宮人は、船なめて旦川渡り、船きほひ夕川渡る。（卷一——36）

とあるもので、離宮附近の板屋草舍から、或は公務に或は逍遙に出入する人達である。山間の僻鄉蜻蛉野も偏に離宮地たるが故に、臨幸のあるが故に、かゝる異風景を現出し、かゝる光榮を荷ふ。作者は驚異の眼を瞠つて、「見る毎にあやにともしみ」と讃歎した。而もこの句は上を承け下を起す扇鉸の役目を果してゐる。その「見る毎に」は上の「見れば」に呼應したもので、かく反復するが古文の格である。

第三段、吉野離宮地のかく自然と人事とに飽くまで惠まれた幸福を、未來永世まで持續させたいと渴望し、「長かれども」と理性に教へられながらも、天地の神にその祈願を捧げ懸けるのであつた。果然一篇の吉野離宮讃辭である。

反歌二首

よろづよに　みともあかめや　みよしぬの　たぎつかふちの　おほみやどころ

萬代　見友將飽八　三吉野乃　多藝都河内之　大宮所　921

【精】○みとも　見るとも。見るの第二變化の「み」を「と」の接續辭が承けるのは古格。○たぎつかふち　既出（一五三頁）。「かふち」は（一四五頁）に既出。○おほみやどころ　既出（一二七頁）。

【歌意】千萬年になるまで見るとも、飽かうことかい。吉野の瀧の川曲の、この大宮所即ち離宮地はさ。

評　長歌では大宮所の萬代の御榮を祈願したが、これは萬年見ても見飽きることではないと、その景勝を絶對に讃美した。物は馴るれば興味が減殺するといふ前提のもとに詠まれた作。

ひとみなの　いのちもわがも　みよしぬの　たぎのときはの　つねならぬかも
人皆乃　壽毛吾毛　三吉野乃　多吉能床磐乃　常有沼鴨　922

釋　○わがも　吾が命もの略。新考よろしい。○ときはの　古義訓による。眞淵訓トコハノ、舊訓トコイハノ。○つねならぬかも　「ぬ」は願望辭の「ね」の轉。「つねにあらぬか」を見よ(八〇〇頁)。「沼鴨」は戲書。

【歌意】　皆人の命も自分の命も、この吉野の瀧津瀬の平磐のやうに、變らずあつて欲しいなあ。

評　はかない命と不變の岩との對照から生ずる感愴は型の通りであるが、行幸時の折柄を考へると、吉野の勝を人達と一緒に末永く樂みたいの餘意があるやうだ。「三吉野の瀧のときはの」は尤も適切な實際的取材で、人麻呂が「吉野の川の常滑の絶ゆることなく」(卷二)と歌つた如く、河床數町に亘る大磐石を序したものだ。

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

○作歌二首并短歌　この題詞は不完である。作歌二首は長歌の二篇をさし、短歌はその反歌四首をさす。この歌どもはその製作年時が判明しない。左註に不レ審二先後一とある。その時季を勘へると、前篇の長歌は春秋に通じたものであるが、反歌の小鳥の聲は或は暮春の景象ではあるまいか。後篇の長歌に至つては狩獵の事が敍してあり、而も「春の茂野に」と歌つてあるから、仲春頃の作であることは疑ふ餘地もない。

やすみしし　わごおほきみの　たかしらす　よしぬのみやは　たたなづく　あをがきこもり
八隅知之　和期大王乃　高知爲　芳野離宮者　立名附　青垣隱
かはなみの　きよきかふちぞ　はるべは　はなさきををり　あきされば　きりたちわたる
河次乃　清河内曾　春部者　花咲乎遠里　秋去者　霧立渡
そのやまの　いやますますに　このかはの　たゆることなく　ももしきの　おほみやびとは
其山之　彌益々爾　此河之　絶事無　百石木能　大宮人者
つねにかよはむ
常將通

923

釋　○やすみししわごおほきみの　既出(二〇五頁)。○たかしらす「たかしりまして」を見よ(一五三頁)。「しらす」はしる(領)の敬相。○みやは　宮處はの意。或は下にその場處はの語を補つて聞く。もと〳〵「は」の辭の落著がよくない。「宮は——河内ぞ」では意味を成さない。○たたなづく　既出(一五四頁)○あをがきこもり　山の青垣に籠り。「青垣山」を見よ(一五四頁)。○かはなみ　川並。河道の曲折狀態をいふ。「次」は借字。○かふちぞ　河内なるぞの略。○はるべは　既出(一五四頁)。○ををり　「ををれる」を見よ(五一四頁)。○たちわたる　舊訓タチワタリは非。○そのやまのいやますますに　意が聞えない。巖積つて山となる意か。「そ

のやま」は「たたなづく青垣山」をさす。

【歌意】わが天子様の御領知なさる吉野離宮は、その場處が疊まつた青山の垣に籠り、そして河並の奇麗な川曲であるぞい。春になると花が咲いて靡き、秋になると霧が立ち渡る。さればその青垣なす山のやうにいやますます〳〵に、その河のやうに絶える事なしに、大宮人は何時も〳〵來通ふであらう。

【評】大體が人麻呂の吉野離宮作の第一第二篇の詞句を雜揉し撮合して、頗る平凡にお座なりに作り上げたものである。赤人は優に一代の作家であるのに、この作は實に不思議だ。襷掛けの句法も紀記以來のことで、さう珍しくもないが、只中間に二聯を隔てゝの使用は、直接でないだけ、餘裕味を存して宜しい。

反歌二首

みよしぬの　きさやまのまの　こぬれには　ここだもさわぐ　とりのこゑかも

三吉野乃　象山際乃　木末爾波　幾許毛散和口　鳥之聲可聞　924

【釋】○きさやまのまの「きさやま」は「きさのなかやま」を見よ（二五一頁）。西本溫本訓のキサヤマノハノ、舊訓のキサヤマキハノは共に非。○こぬれ　既出（六八九頁）。舊訓コズエ。○ここだ　既出（五九六頁）。○さわぐ「口」は臭音ク。△寫眞　挿圖七（一四七頁）を參照。

【歌意】吉野の象山の邊の梢には、外とは違つて、大層澤山にまあ鳴き立てる、鳥の聲かいな。

ぬばたまの　よのふけぬれば　ひさぎおふる　きよきかはらに　ちどりしばなく

烏玉之　夜乃深去者　久木生留　清河原爾　知鳥數鳴　925

【釋】○ぬばたまの　夜の枕詞。既出（三〇四、四七六頁）。○ふけぬれば　古義訓による。舊訓フケユケバ。○ひさぎ　楸。一名木さゝげ。紫葳科の喬木。河邊に多く自生す。高さ二三丈に達し、葉は卵形、時に掌狀を成す。夏尺餘の穗を出して花を著く。胡麻の花の如く淡黄に紫點あり、實は一尺餘の莢が幾條も下垂す。○ちどり　既出（六八七頁）。「知」は借字。

楸（394）

【歌意】族居の夜が更けたので、楸の生えてゐる清い吉野の川原に、千鳥が頻に鳴くことわ。

【評】吉野の河原にその頃楸が叢生して居たと見える。風情のない樹だが、一度河原の景致に想到すると、自然にそれが心頭にのぼるのである。

山間幽寂の境、瀬鳴の響が枕をゆすつて、圓かな夢は結びがたい深夜に、この凄涼たる千鳥の聲を聽くは、

實に客愁を喚るに十分なものがあらう。「千鳥しば鳴く」とばかりいひ放して、表面は單なる叙景の如く見えながら、その内面に旅客としての寫りない感哀が流動し滂薄して止まぬ。風姿も潔く詞も簡淨で、聲響も亦流滑である。

上の作には晝の小禽を歌ひ、この作には夜の千鳥を歌つた。必ず心あつての趣向であらう。

尙いふ、千鳥の聲は專ら冬季の景物と後世は定められてあるが、實際には四季を通じて鳴いてゐる。さればこの歌を上の反歌や下の長歌と同じく、暮春の作とするに支障はない。

やすみしし　わごおほきみは　みよしぬの　あきつのをぬの　ぬのへには　とみすゑおきて
安見知之　和期大王波　見芳野之　飽津之小野笑　野上者　跡見居置而　926
みやまには　いめたてわたし　あさがりに　ししふみおこし　ゆふがりに　とりふみたて
御山者　射目立渡　朝獵爾　十六履起之　夕狩爾　十里蹋立
うまなめて　みかりぞたたす　はるのしげぬに
馬並而　御獦曾立爲　春之茂野爾

釋 ○あきつのをぬの　「飽津」は蜻蛉の借字。「あきつのぬべ」を見よ（一四六頁）。「笑」は矢箟で、矢箟をノといふ。○ぬのへ　野邊。○とみすゑおきて　迹見の人を立てゝ置き。「とみ」は字の如く、狩の爲に鳥獸の通ふ跡を尋ね求むる人の稱。或は鳥見の義か。この句末の「て」の辭は餘つてゐる。○いめたてわたし　射手をあちこちに多く立たせ。「いめ」は射部の轉。弓射る人達の稱。「目」原本に固とある。元本西本によつた。○しし　猪鹿を稱する。既出「ししじもの」を見よ（五三九頁）。「十六」は算數的戲書。○とり「十里」も戲書。○みかり　「獦」は獵の俗字。○なめて　なべての古言。既出（三六頁）。○みかりぞたたす　敍相の上から、ここは御獵を催すの意とする。「たたす」は立つの敬相で、上の助辭によつて意が變る。獵にたたすは獵に出掛けること、獵をたたすは獵を催すこと。○しげぬ　茂岡、茂山などの類語。△挿書　挿圖ロ（三六頁）127（四九二頁）を參照。

【歌意】 わが天子樣は、吉野の蜻蛉の小野の、野邊には迹見の人を据ゑ置き、山には射手を立て揃へ、朝狩に猪鹿を踏み立てゝ起し、夕狩に草伏の鳥を踏み立てゝ、飛び上がらせ、そして侍臣達と馬を乘り並べて、御獵をお催しなる、蜻蛉のこの春の茂つた野でさ。

評 狩獵は冬を主として春に終る。秋津野の小野を圍む群山は鳥獸の好棲息地であるから、聖武天皇は行幸の序、御獵を催されたのであらう。

中間、野山に跡見据ゑ射目立てたことを、野と山とに分係して文飾とした。「朝獵に――夕獵に――」は家持の安積皇子薨之時作歌（卷三）にも見えた句だが、この歌の方が先出である。

結末は、從駕の人達と馬乘り並べて山野を馳驅遊ばされる光景で、

玉きはる内の大野に馬なめて朝踏ますらむその草深野（卷一、中皇女――36）
日並の皇子の尊の馬なめて御狩立たしし時は來向ふ（卷二、人麻呂――167）

などと同型の措辭である。

全體に小じんまりと引緊まつた作で、迹見、射目の句に、狩獵の狀態が稍つぶさに描出されてゐる。轉結の倒裝、頗る調が勁健で嬉しい。「おきて」のては他にも例はあるが、何としても邪魔な棄石である。

反歌一首

あしひきの　やまにもぬにも　みかりびと　さつやたばさみ　さわぎたりみゆ
足引之　山毛野毛　御獵人　得物矢手挟　散動而有所見　927

【釋】○みかりびと　大君の御獵に奉仕する人。○さつや　既出(二二九頁)。○たばさみ　既出(二二九頁)。「挟」原本に狹とあるは誤。元本その他によつた。○さわぎたりみゆ　「さわぎ」は忙しく奔走すること。「たりみゆ」の續きは古格。良行變格系の動詞に限り、その終止態に動詞が接續する。それも見ゆの動詞に限つてゐる。集中に「かしこき海に船出爲利所見」(卷六)「海人のいざりはともし安敞里見由」(卷十五)又記(下)に「志毘が はたてにつま多弖理美由」などある。古義訓による。舊訓はミダレタルミユ。

【歌意】この吉野の山にも野にも、御狩の人達が、幸矢を手に執つて、奔走するのが見えるわ。

【評】狩場の光景狀し得て遺憾がない。山野に充滿して御狩人が立騷ぐ、その豪勢さが想ひ遣られる。かくて間接に天威の畏さが彷彿する。「幸矢たばさみ」は、その携帶武器は弓は勿論、太刀もあらう鉾もあらうが、一番狩場にふさはしい象徴的描寫である。序にいふ幸矢は通例の征矢を狩獵の時にのみいふ稱。

右不レ審二先後一。但以レ便故載二於此次一。

右の赤人作歌の全部は詠出年代不明で、上の歌との前後がわからない、但同じ吉野行幸の時の歌だから、都合に任せてこゝに載せたとの意。「便」原本に使とある。略解説によつて改めた。これは當初の採錄者か後の補入者かの筆で、文章こそ拙いが、製作年代に就いての大事の註語である。眞淵はこの注を削るべしといつたが從ひ難い。削ればこの歌は上の歌の題詞に係けたものとなつて、神龜二年の作と確定してしまふ。

冬十月幸于難波宮時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

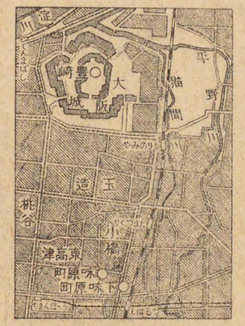
○幸于難波宮　續紀、神龜二年十月の條に、庚申(十日)天皇幸二難波宮一。とある。この時の難波宮は歌によると難波の味生宮であつた。「難波宮」を參照(二三七頁)。

おしてる　なにはのくには　あしがきの　ふりにしさとと　ひとみなの　おもひやすみて　つれ
忍照　難波乃國者　葦垣乃　古郷跡　人皆之　念息而　都禮　928

もなく　ありしあひだに　うみをなす　ながものみやに　まきばしら　ふとたかしきて　をすくに
母無　有之間爾　續麻成　長柄之宮爾　眞木柱　太高敷而　食國

をさめたまへば　おきつとり　あぢふのはらに　もののふの　やそとものをは　いほりして
乎收賜者　奥鳥　味經乃原爾　物部乃　八十伴雄者　廬爲而
みやこをなせり　たびにはあれども
都成有　旅者安禮十方

【標】○おしてる　難波の枕詞。既出(九八五頁)。○なにはのくに　古へ難波國と稱した今の大阪附近一帯の稱。行政區劃の國ではない。吉野國、泊瀬國の類。○あしがきの「ふり」に係る枕詞。葦を結うた垣は初めから舊び煤けて見ゆる故にいふ。なほ亂れ、ほのか、ま近などに係る枕詞。○ふりにし　眞淵訓フリヌル。○おもひやすみて　氣に懸けぬこと。注意せぬこと。「やすみ」は休の意。眞淵訓イコヒテは非。○つれもなく　緣もなく。交渉のないのをいふ。「つれもなき」を見よ(四六九頁)。○うみをなす　績麻のやうに。「長」に係る枕詞。績麻は長い物なので譬へていふ。績麻を「續麻」と書くことは「をみ」を見よ(一〇六頁)。○ながらのみや　難波宮のこと。長柄は難波丘陵一帯の呼稱。すべて連亙した山や岡をナガラといつた。○まきばしら　既出(五〇〇頁)。○ふとたかしきて「みや柱ふとしきませば」を見よ(一四六頁)。「たか」は美稱。○をすくに　既出(一九〇頁)。○をさめ「收」は借字。○おきつどり　沖の鳥。味鳧又は鴨に係る枕詞。鴨の類は多く河海の沖の方に棲む故にいふ。味鳧は「あぢさはふ」を見よ(五一六頁)。○あぢふのはら　「味經」は味生、味原なども書く。攝津國東成郡小橋。(今の大阪市東區味原町)。古へここに難波宮の別宮が置かれ、味生宮と稱した。續紀、天平勝寶八年二月の條に、難波の宮に至り東南の新宮に御すとある新宮はここの事である。三島郡の味生村ではない。○もののふのやそともの　を「もののふのやそうぢ」(六八三頁)及び「やそともの」を」(一〇三七頁)を見よ。○いほり　既出(二二七頁)。○みやこをなせり　新考訓に從つた。眞淵訓ミヤコトナレリ、舊訓ミヤコトナセリ。契沖訓の一にミヤコナシタリは共に非。



生味と崎豐　(395)

【歌意】難波の國は舊い京址だとして、誰れもが氣にも懸けずに、打遣つてゐた間に、天子樣はその長柄の宮に、眞木柱を立派に高く造り建てゝ、國家をお治めなさるので、その味生の原に、多くの役人達は庵住ひをして、都を形作つたよ、旅中ではあるけれどもさ。

【評】難波の京は、孝德天皇の朝以後廢絶したが、難波宮は離宮として存在し、天武天皇の十二年十二月の詔にも、

凡都城宮室非二一處一、必造二兩參一、故先欲レ都二難波一、是以百寮者、各往之請二家地一(紀——卷二十九)

と見えた。天皇の末年(朱鳥元年)に、難波は大藏省から失火して宮室まで燒けたさうだが、持統文武元正の列聖相次いで屢行幸の事が史に見えるから、手狹ながら相當焚餘の宮殿は存在してゐたものと考へられる。然し朱鳥以來四十年の舊構である。

元正天皇の養老元年二月以後約九年振で、今回の聖武天皇の神龜二年十月の行幸があつた。歌に「古りにし鄕と、人皆の思ひ息みて、つれもなくありし間に」とあるは、その中絶期間の長い爲に、難波宮に對する交涉

を、一般人士が忘れてゐた感情と思はくとを打出したものである。然し今回端なく行幸があり、「長柄の宮に眞木柱太高敷きて食國を治め」られたのであつた。この時はまだ難波を皇都とした布告はないが、（皇都と定めたのは天平十六年二月）現神とます大君のましますところは、卽ち皇都であると考へることが、本來のわが國民精神の常識であつた。

茲に留意を要するは「眞木柱太高敷きて」の語である。人麻呂の幸吉野宮一時の歌（卷一）に「秋津の野邊に宮柱太敷しませば」、又「瀧つ河内に高殿を高知りまして」とあるは、吉野離宮の新構を語つてゐる例から類推すると、こゝの長柄の宮も必ず新構の離宮であらねばならぬ。この新宮こそは孝德天皇の難波大郡の味生宮の故地に就いて建てられたものと斷ずる。

孝德天皇の味生宮は豐崎宮の創建後自然廢頽に歸し、徒らに褒煙荒草の野原となつて、味生の原と稱せられた。聖武天皇はそこを再び開發して味生離宮を新建され、この十日から始めて約二十日ほど（翌月十日には天皇奈良の大安殿に御し給ふ）滯留あらせられた。供奉の官人卽ち「物の部の八十伴緒」は、倉卒の際とて各黑木の柱に茅の軒、假廬造りして住むのであつた。皇居を中心として、野原の間に忽然と一團の聚落を出現したことは、一寸驚異でもあり面白くもある。その感じが昂揚した餘り、遂に「都をなせり」とまで測らず誇張されることになつた。

「旅にはあれども」は折角感情の坩壺に溶け込んだ陶醉を一旦に冷却する嫌もあるが、何としても現實に卽した一句で、行幸供奉の旅先ながら、かゝる異風景を見ることに興味をもつのであつた。

この篇、「おし照る」「葦垣」「績麻なす」「おきつ鳥」の枕詞、「眞木柱」「物部の」の準枕詞を用ゐて敷陳これ力めてゐる。莊重典雅な氣分を出す必要からでもあらうが、かゝる短篇としては煩瑣な感が生ずるのを禁じ得ない。

又いふ、長柄の稱は豐崎宮にも味生宮にも冠してゐる。兩宮共に方角こそ南北に違へ、難波の岡陵地にあるからである。ながらの語は長らふの義を以て、連亙した一帶の山岡を呼ぶ名稱らしい。故に近江に長柄山あり、難波にこの長柄の岡があり、その他諸國にこの地稱が多い。

聖武天皇はこの二年十月の行幸後、翌三年十月に藤原宇合を造難波宮事に任じ、更に四年に石川枚夫を造難波宮長官に任じ、宮室から始めて二官八省の堂々たる大規模の建築を竣功された。正倉院文書に、天平勝寶二年七月に、右以二今月廿六日一大郡宮幸行、また續紀、同八年二月の條に、壬子、是日行至二難波宮一御二東南新宮一とあるは、正に味生宮の事である。

序にいふ喜田貞吉氏の『帝都』に、味生を三島郡江口附近としてこの歌を引いて證としたのは、甚しい誤認である。

△難波宮及び味生宮考（雜考——22）參照

反歌二首

あらぬらに　さとはあれども　おほきみの　しきますときは　みやことなりぬ
荒野等丹　里者雖有　大王之　敷座時者　京師跡成宿

○あらぬらに　荒野らにで。「ら」は接尾語。和名抄に、曠野、阿良乃良と見え、單に野らともいふ。

【歌意】この味生の里は、荒野ではあるけれども、天子様の居らつしやる時は、都となることわ。

【評】神とますわが大君には、世に不可能な事はない。この種の想は集中に多い。殊に

大君は神にしませば赤駒のはらばふ田居を都となしつ（巻十九——4260）

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ（同——4261）

の二篇は殆と符節を合はせた如く、何れも帝威の禮讃であるが、この歌は「里はあれども」と理路に著したゞけ、餘蘊が乏しいのは致し方ない。

あまをとめ　たななしをぶね　こきづらし　たびのやどりに　かぢのときこゆ

海未通女　棚無小舟　擾出良之　客乃屋取爾　梶音所聞　930

【類】○あまをとめ　既出（四一頁）。○たななしをぶね　既出（二二四頁）。○かぢ「かぢひきをり」を見よ（五九七頁）。

【歌意】海人少女が棚無し舟を、漕ぎ出すらしい。この旅の宿舎に、あれ梶の音が聞えるわ。

【評】時刻の指定が無いのは缺點である。想ふに味生の原の旅の庵に、朝明の枕を敲て、梶の音を聞いたものであらう。但それだけで舟を棚無し小舟、漕手を海人少女と認定することは、頗る速斷で冒險に近いが、日頃海人少女が棚無し小舟を操るのを見て、深い感興を覺えた經驗から、測らずこの聯想が生つたのである。

味生の原は大體崖地であり、東は低濕の地から入海に接してゐたらしい。巻末の難波宮（味生宮）の歌にも、

盛に海邊の景象が歌はれてある。

車持朝臣千年作歌一首并短歌

排敍の次第によれば上の歌と同時で、難波から住吉に出遊した或日の作であらう。

いさなとり　はまべをきよみ　うちなびき　おふるたまもに　あさなぎに　ちへになみよせ　ゆふ

鯨魚取　濱邊乎清三　打靡　生玉藻爾　朝名寸二　千重浪縁　夕　931

なぎに　いほへなみる　おきつなみ　いやますますに　へつなみの　いやしくしくに　つきに

名寸二　五百重波因　奥津波　彌益升爾　邊津浪之　益敷布爾　月二

けに　ひびにみがほし　いまのみに　あきたらめやも　しらなみの　いゆきめぐれる　すみのえ

異二　日日欲見　今耳二　秋足目八方　四良名美乃　五十往回有　住吉

のはま

能濱

【評】○いさなとり　海又は濱などの枕詞。既出（三八七頁、四一〇頁）。○へつなみのいやしくしくに　邊つ波をのみ擧げたのはいぶかしい。上の朝風夕風の聯對を思へば、こゝも對語を配すべきである。この句の前に古義が、奥つ波いやますく〳〵にと補つたのに從つた。○ちへ——いほへ　何れも多數の轉義。○しくしくに　既出（五

五九頁、一三一五頁）。○つきにけに　朝にけにとも續けていふ。「け」は「けならべて」を見よ（六八二頁）。○ひひにみがほし　「欲」原本に雖とある。「雖見」はミルトモと訓まれるが、下への續きがわるい。略解に從つた。○いまのみに　現在見るのみで。○いゆきめぐれる　「い」は發語。「往」、原本に開とあるによつて、諸本皆イサキメグレルと訓み、咲きは波を花に擬へたものと解してあるが、詞が足らない。故に開を誤として假に往を充てた。元本その他にイソザキメグレルの訓がある。又、「回有」を古義にモトヘルと訓んだのは非。○すみのえのはま　「すみのえ」を見よ（二四〇頁）。この歌記錄上に特徴がある。それは數目の字を盛に充用してゐる事である。△地圖　挿圖第八（二四一頁）を參照。

【歌意】　濱邊が清くて、そこに靡いて生えてゐる藻草に、朝の風に千重に浪が寄せ、夕の風に五百重に波が寄る、その沖の波の彌よ益す〳〵に、岸の波の彌よ頻に、月に何時もに、日々に見たいわ。今見るだけで飽き足らうことかい。白波が往き廻つてゐる、きれいなこの住吉の濱は。

【評】　霞松原を後に打出て見ると、廣々と展開した住吉の濱、そこには崎もない磯もない。只沙濱に千重に五百重に寄せては返る白波ばかりである。乃ち波を中心にこの篇を成した。

　層々反復、徹頭徹尾一語一句も波の上を離れない。如何に作者が波に興味を傾倒し、深く強く諦視して居たかがわからう。然し詩思は甚だ平靜でその熱量を缺いてゐる。又造句に清新の點がない、極めて月並の文句を剪裁して始終してゐる。殊に常に見たいとか見飽かぬとかいふのは一般の遊覽作の套語で、長短篇に拘はらず、これがその主想となつたものが多く、單調も亦甚しい。漢唐詩人のやうに多趣多樣に縱橫無碍に、その詩想を發揮し得ないのは遺憾である。

反歌一首

しらなみの　ちへにきよする　すみのえの　きしのはにふに　にほひてゆかな

白波之　千重來緣流　住吉能　岸乃黃土粉　二寶比天由香名　932

【辭】　○はにふに　埴生に。埴は黃土であるので、「黃土」をハニと訓む。「ふに」に「粉」を充てたのは、音のフヌを轉用したもの。「はにふ」は既出（二四八頁）。○にほひて　衣を匂はしての意。自他が違ふが、かういふ辭樣が當時成立してゐたのだ。下にも安倍豐繼の歌に「住の江の岸の黃土に匂ひて行かむ」とある。尙「匂はさましを」を見よ（二四八頁）。○ゆかな　行かむ。「な」は「家きかな」を見よ（二一頁）。

【歌意】　白波が幾重にも打寄せる、この住吉の岸の黃土に、衣を染めて往かうなう。

【評】　住吉の岸の黃土層のことは紀記時代に所見がない。平安朝以後また觸れたものがない。只この萬葉人のみの口頭語である事は妙だ。尤も平安朝からは染色法が一層進歩して、こんな原始的染法は廢れたせゐもあらう。當時としては只それを見るだけでも、莫大なる興味を惹いたらしく、

めづらしき人を吾家（わへ）にすみの江の岸の埴生を見むよしもがも　（卷七——一一四六）
馬なめてけふわが見つる住の江の岸の埴生をよろづ世に見む　（同上——一一四八）

の如き感想をもつてゐた。さてこの歌、

草まくら旅ゆく君と知らませば岸の埴生に匂はさましを（巻一、清江娘子――69）

馬のあゆみおしてとゞめよ住の江の岸の埴生に匂ひて行かむ（本巻、安倍豐繼――1002）

の同意の作があり、中でもこれは平坦で姿致曲折が乏しいものゝ、白波と黄土は色彩的配合の顯著なるものがあつて、爽かな感じが與へられる。

集中住の江の岸と續けたのが十四首もある。夙く難波吉士氏はこゝを本據として、吉士即ち岸を名告つた。かくも岸に重點が置かれる以上は、その岸に何等かの特徴がなくてはなるまい。抑も住吉の海岸は廣範圍に亘つてゐる。南部は平遠で濱には出見の濱、粉濱があり、浦にはなごの浦（又濱）があり、津には御津、蜾津、榎名津の稱がある。然し北部は粘土層の切崖に海潮が去來してゐたらしい。そこには黄土があつて岸の埴生と騒がれ、崖地は榛の生えた野原があり、時にはその崖を崩して新田を闢き、老松矮松は濱から崖地へかけて叢生し、霰松原あり姫松あり、忘貝忘草は詞人の口頭に上るのであつた。實に岸に興趣の多い處であつたと想はれる。

山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

これも神龜二年十月の難波行幸時の作とおぼしい。とすると歌中の「難波宮」は味生宮である。

あめつちの　とほきがごと　ひつきの　ながきがごと　おしてる　なにはのみやに　わごおほきみ
天地之　遠我如　日月之　長我如　臨照　難波乃宮爾　和期大君　933
くにしらすらし　みけつくに　ひびのみつぎと　あはおの　ぬじまのあまの　わたのそこ　おき
國所知良之　御食都國　日之御調等　淡路乃　野島之海子乃　海　底　奥

ついくりに　あはびだま　さはにかづきで　ふねなめて　つかへまつるし　たふとしみれば
津伊久利二　鰒　珠　左盤爾潜出　船並而　仕奉之　貴見禮者　933

釋　○おしてる　既出（九八五頁）。「臨照」は日月の臨照をいふ。その光は世に押し並べて照る故に、意を以てオシテルと訓む。○みけつくに　御食（御饌）を奉仕する國又は處。「みけ」は神又は君に參らする供御をいふ。「つ」は連辭。古義に御饌調國の義と解したのは迂遠。○ひびのみつぎと　日々の御貢物として。○あはぢの四言の句。○ぬじま　淡路國三原郡沼島。古書に野島又武島と書く。津名郡の野島が崎と紛れ易い。周回二里、村民悉く漁戸。○わたのそこ　既出（四〇〇頁）。○あはびだま　鰒のもつ珠。眞珠のこと。但こゝは單といふに同じい。珠は熟語的文飾である。○かづきで　水に潜つて取出し。○つかへまつるし　「し」は強に鰒辭。契沖訓による。略解訓はツカヘマツルガ。○たふとしみれば　見れば貴しの倒裝。契沖訓による。略解訓はタフトキミレバ。△地圖　卷二卷頭總圖を參照。

【歌意】　天地の永遠なるがやうに、日月の長久なるがやうに、難波宮にわが大君が四方の國をお治めなさるらしい。そこで供御の物を奉仕する國の、日々の御貢物として、淡路の野島（沼島）の海人が、海底の石に附いてゐる鰒を、澤山に潜つて取出し、さてその貢舟を漕ぎ並べて、大君にお仕へ申すのをさ、見ると貴いことわい。

評　初頭より「國知らすらし」までが前段、以下が後段である。その前後段の間に關鍵の語がないので、一篇の總意に連絡を缺くが如き嫌を生じ、爲に略解は本文の訓法を變へ、仕へマツルガ貴キ見レバとして、「國知らすらし」といふへ返してその意を了すべし」と說いた。然し意解の如くソコデ（乃ち）の語を補入すれば、

調を變へずに忽に前後の意が疏通する。

前段は天地日月の悠久を引喩して、極めて荘重に天皇が難波ノ宮に天下を知し召す趣を述べた。これは上の笠金村の作中の「眞木柱太高知りて食國ををさめ給へば」とあるに合致する古代思想である。

後段は筆が一轉して、國民がその熱誠を輸して王事に勤める一例を敍べて、前段に應應を求めた。事は淡路の野島の海人が大御食に仕へ奉る狀景に屬する。人麻呂はその吉野離宮の作に、

遊副川の神も大御食に仕へまつると、上つ瀬に鵜川を立ち、下つ瀬に小網さし渡し、山川も寄りて仕ふる、——。（卷一——38）

と專ら神の攝理を高唱して、臣民奉仕の事實を言外に彷彿せしめ、これは直接に漁民の奉仕狀態を描寫した。

抑も難波宮と海を隔てゝ相對する海島淡路は、その地理的關係から、行幸の際は特に大御食を供する「御食つ國」と定められ、その魚貝を「日々の調」として奉らしめたらしい。その貢進の野島舟が眞楫しじ貫き、威勢よく難波津さして海上を漕ぎ列ねて行く。これが「船並めて仕へまつる」である。目のあたりこの光景に接した作者は、そこに深い感銘をおこし、さていはく「貴し見れば」と。奉公の行爲の貴さは卽ち天威の貴さを反映する。

かく考へると「野島の海人の」より「さはに潛き出」までの鰒採の行事は、作者の推想で實見ではない事になる。野島舟は實際種々の海産物を運んだであらうが、就中鰒はその海幸の尤なる物なので、作者は特更に鰒採の狀況を擇んで敍事的に描出して、野島舟の修飾としたものと思はれる。

鰒は深海の岩礁に附著してゐるので、「沖つくりに」といつた。「鰒珠」は眞珠だから、さはに潛き出せる筈がない。又潛き出ても大御食にはならない。珠は熟語としての文飾である。であるが、それが大君への捧物としてふさはしい感じを齎すので面白い。抑も鰒は盛に食料として昔は嗜好したもので、

東鰒、隱岐鰒、耽羅鰒、薄鰒、長鰒、短鰒、着耳鰒、放耳鰒、都々岐鰒、横鰒、細割鰒、蔭鰒、凡鰒、御取鰒、鳥子鰒、串鰒、醬鰒、蒸鰒、火燒鰒、鮨鰒、甘煮鰒、

などの目が延喜式に見える。

結收の「貴し見れば」は見れば貴しの倒裝で、この43音の組織から成る促調は、長篇の結語として殆ど定則の觀がある。

反歌一首

あさなぎに　かぢのときこゆ　みけつくに　ぬじまのあまの　ふねにしあるらし
朝名寸二　梶音所聞　三食津國　野島乃海子乃　船二四有良信　934

釋 ○かぢのと「と」はオトの上略。「かぢひきをり」を見よ（五九九頁）。○みけつくにぬじま　みけつ國淡路の野島の略。國を狹義に解すれば、直ちに野島に續けてもよい。

【歌意】 朝風の海に櫓の音が聞えるわ。あれは御食つ國たる、野島の海人の舟でさ、あるらしい。

評 早朝難波の海を見渡しての作である。聽覺から視覺に移つて、想像的假定に終つた。前日その日の漁獲を整理して野島を出帆し、海上二十里餘を何丁櫓かで徹宵漕ぎ通すと、丁度朝風の頃に難波に到著する。されば

「野島の海人の舟にしあるらし」はまことに尤な推定である。

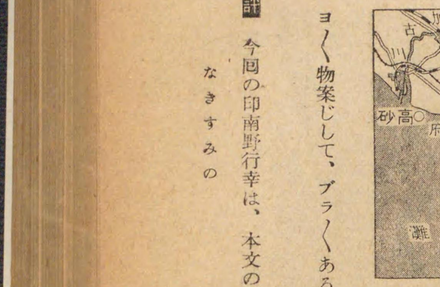
首尾一字のたるみもない、爽かな海氣を破る楫の響、朝風に點々たる舟の動的景致の上に立つて、而も御食つ國の野島舟を想像する作者の襟懐は、如何にも愉快さうである。

三年丙寅秋九月十五日、幸於播磨國印南野一時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

○三年　神龜三年。○九月十五日　この月日は誤があらう。委しくは評文を參照。○幸於播磨國印南野　續紀に、神龜三年九月壬寅（廿八日）裝束司造頓宮司の任命があり、爲レ幸二播磨國印南野一也とある。又冬十月辛酉（十七日）行幸從駕人、播磨國郡司百姓等、供二奉行在所一者、授レ位賜レ祿各有レ差、云々。癸亥（十九日）行還二至難波宮一。○印南野　既出（六六五頁）。△地圖　挿圖183（六六五頁）を參照。

なきすみの　ふなせゆみゆる　あはぢしま　まつほのうらに　あさなぎに　たまもかりつつ　ゆふ
名寸隅乃　船瀨從所見　淡路島　松帆乃浦爾　朝名藝爾　玉藻苅管　暮　935
なぎに　もしほやきつつ　あまをとめ　ありとはきけど　みにゆかむ　よしのなければ　ますらを
菜寸二　藻鹽燒乍　海未通女　有跡者雖聞　見爾將去　餘四能無者　大夫
の　こころはなしに　たわやめの　おもひたわみて　たもとほり　われはぞこふる　ふねかぢをなみ
之　情者梨荷　手弱女乃　念多和美手　徘徊　吾者衣戀流　船梶雄名三

評釋　○なきすみ　播磨國明石郡江井島の地。今の魚住村の東に隣る。魚住は魚來住の中略で、尙ナキスミと讀むべきを、後世ウヲズミと誤讀したのである。古へ明石韓泊間の水驛として築港があつた。今は廢してしまつた。○ふなせ　船泊。船居の義で、船を泊め置く處をいふ。但築港に限つて稱するので船津とは異なる。「瀨」は借字。古義の地名と解したのは誤。○まつほのうら　松帆の浦は淡路國津名郡松尾崎江崎の邊の稱。○もしほやき「もしほ」は海藻の汐水より採る鹽。海藻を掻集め、その上に汐水を汲みかける。さて汐の滲み付いた海藻を燒いて水に入れ、その上澄を釜に煮て鹽とする。故に「藻汐燒く」といふ。○ますらを　既出（四〇頁）。○たわやめの　か弱い女の如く。○おもひたわみて　思ひ撓みて。くよ〳〵案じ續くるをいふ。○たもとほり　「た」は接頭語。「もとほり」は「いはひもとほり」を見よ（五三九頁）。眞淵訓による。○ふねかぢ　船と楫とのこと。舊訓フナカヂは非。△寫眞　挿圖185（六七〇頁）を參照。



近附（隅寸名）島井江（396）

【歌意】　名寸隅の船瀨から見える淡路の松帆の浦で、朝風に藻草を刈り刈り、夕風に藻鹽を燒き〳〵して、海人の少女が居るとは聞くが、それを見に行かう便りがないので、男らしい心も失せて、女のやうにクヨ〳〵物案じして、ブラ〳〵あるき廻はり、自分はさ其方を戀ふることよ、實は船と楫とが無さにさ。

評　今回の印南野行幸は、本文の題詞には九月十五日の幸とあるが、續紀には九月二十八日に頓宮司が任ぜら

れたとあるから、行幸はその以後の事である。又日本紀略には、

神龜三年冬十月辛亥（七日）行幸二播磨國印南野一、甲寅（十日）至二印南野邑美頓宮一、癸亥（十九日）還三至難波宮一。

とある。されば題詞の十五日の行幸は全く誤である。さて續紀と紀略とを併せて考へると、十月七日に奈良御發輦、同十日に印南野の邑美頓宮に御著、それより六日間ほど御遊覽があつて歸路に向はせられ、同十七日に還幸の途中に奉仕者への賞賜があり、同十九日に難波宮に御歸著となる。

頓宮の所在地邑美は明石郡邑美郷（今の金崎附近）で、名寸隅の船瀬の北一里許に當る。然るに印南野行幸といひ印南野邑美頓宮といふ。蓋し印南野は印南郡を中心として加古明石二郡の一部に亘つた汎稱である事が察せられる。

さて船瀬に就いて一言したい。往古船瀬の稱が諸國にあつた。貞觀九年の官符に、

則知海路之有二船瀬一、猶三陸道之有二逆旅一。（類聚三代格）

と見えて、船泊の事であるが、長柄船瀬（住吉神代記）金埼船瀬（續紀）水兒船瀬（同上）大輪田船瀬、和邇船瀬（三代格）など、何れも築港したもので、故に船瀬を造

名寸隅（397）（江井島）

るといつた。造船瀬料田、船瀬功德田、（主稅式）獻二稻船瀬一（續紀）などの語、皆築造の工課を語るものである。又私に船瀬を造り又はその料稻を獻じて賞賜に與つた例が多々、紀及び續紀に出てゐる。祝詞に「船居作る」とある船居は船瀬の原語である。

太唐に遣さむとするに、船居なきによりて、播磨國より船乘して使は遣さむと念ほしめす間に、皇神の命以ちて船居は吾作らむと教へ悟し給ひき。教へ悟し給ひながら、船居作り給へれば、悦びうれしみ、云々。（祝詞、遣唐使時奉幣）

名寸隅の船瀬は、僅に斗出してゐる江井島の小懸崖が、その一部であつたことを、今日でも語つてゐる。素より人工を加へた小灣だから、岩礁が少なく水深の餘りない海と思つてよい。隨つて漁撈には全く不向なので、蜑戸蟹屋の影も乏しいとなると、都人士連のゆかしがる海人の生活には接すべくもない。邑美頓宮から半日の閑を偸んで、わざ〳〵海にあこがれて來た作者は、こゝに大きな失望を感じたであらう。乃ち一轉して、當面の明石海峽の對岸なる、松帆の浦の藻刈鹽燒を云爲するに至つた。

淡路の岩屋松帆邊はその地形からいつても、關西方面での海人の本場であつたらう事は疑もない。現今でも鹽燒こそしないが、漁撈は盛んな土地だ。況やその藻刈鹽燒はおもに婦人の仕事だ。作者が往訪の便のないことを慨いて殘念がるのも、そこに一抹の色彩がある。

抑も行幸供奉の身柄では、松帆までの出遊は不可能な事で、「見に往かむ由」は全く無い。「丈夫の情はなしに、手弱女の念ひたわみて」は勿論誇張で、意對が親貼に過ぎる。「たもとほり――戀ふる」の躊躇低回は、或衝動に驅られた者の自然的動作である。「船梶をなみ」は假にも船瀬である以上は、舟楫が無いとはどうしても考へられぬ。多分はその際淡路行の船便がなかつたことの托言であらう。然し既に「見に行かむ由のなけ

れば」の聲言があるので、この重複感を如何ともし難い。辯護すれば具象的にその理由を反復敍説したものともいへようが、矢張不快である。又「なしに」「なければ」「なみ」と同語の疊出は、甚しい蕪穢ではあるまいか。この篇遊行の作として一機軸を出したもので、遊覽の不能を主題としてゐる。小篇ながら詩情も動いて面白いが、修辭に難點の多いのは遺憾である。

反歌二首

たまもかる　あまをとめども　みにゆかむ　ふねかぢもがな　なみたかくとも

玉藻苅流　海未通女等　見爾將去　船梶毛欲得　浪高友　936

釋 ○たまも　既出（一〇六頁）。○なみたかくとも　初句の上に廻して聞く格。

【歌意】 松帆の浦に藻刈する、海人の少女達を見に往かうよ。どうぞ船や楫がほしいな。よし波が高くともさ。

評 長歌の大意を摘んで、結末に至つて「波高くとも」の轉語を下した。海に波は附物だが、殊に明石海峽は潮流關係から風浪の高い處である。作者はそれを意識してゐるらしい。それでも「見に往かむ」といひ張つてゐる。いかに松帆の浦の海人少女に興味をもつて熱中してゐるかが知れよう。殆ど今の東京人が大島のアンコに憧憬をもつてゐるやうな具合である。

ゆきかへり　みともあかめや　なきすみの　ふなせのはまに　しきるしらなみ

往　回　雖見將飽八　名寸隅乃　船瀨之濱爾　四寸流思良名美　937

釋 ○ゆきかへり　ユキメグリとも訓まれるが、舊訓に從つた。○みとも　前出（一六三五頁）。○あかめや「や」は反動辭。○しきる　頻（シキ）るの意。「しき」の動詞格。「しきなみ」を見よ（五九七頁）。

【歌意】 往つたり來たり何遍見るとも、飽かうことかい。この名寸隅の船瀨の濱に、折返しつゝ寄せる白波はさ。

評 希望が實現不可能ときまつては、現在に滿足するより外はない。卽ち眼を船瀨の白波に轉じた。そして逍遙多時に及んだ。矢張惡い景色ではない。さては「見とも飽かめや」と、極めて平凡な處に落著してしまつたのも據あるまい。

山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

上とおなじ行幸時の作。

やすみしし　わがおほきみの　かむながら　たかしらせる　いなみぬの　おほみのはらの　あら

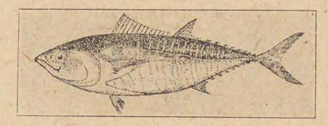
八隅知之　吾大王乃　神　隨　高所知流　稻見野能　大海乃原笑　荒　938

たへの　ふぢえのうらに　しびつると　あまぶねさわぎ　しほやくと　ひとぞさはなる　うらをよ

妙　藤江乃浦爾　鮪釣等　海人船散動　鹽燒等　人曾左波爾有　浦乎吉

みうべもつりはす　はまをよみ　うべもしほやく　ありがよひ　みますもしるし　きよきしら
美宇倍毛釣者爲　濱乎吉美　諾毛鹽燒　蟻往來　御覽母知師　清白
濱（はま）

釋 ○やすみしし　既出（三〇頁）。○たかしらせる　六言の句。「たかしりまして」見をよ（一五三頁）。古義訓による。眞淵訓タカシラスル、略解訓タカシラシヌル。舊訓タカクシラスルは非。○おほみのはら　邑美（オホク）の原。邑美は播磨國明石郡邑美郷。今の金崎清水の附近。印南野は印南郡で郡は異るが、明石郡の平野まで延長して稱したもの。「大海」は邑美の原義か。「笑」は「きしの」の項を見よ（七二九頁）。○あらたへの　藤の枕詞。既出（一八九頁）。○ふぢえのうら　既出（六六三頁）。「江」原本に井とあるは誤。眞淵説に從つた。○しび　鮪。硬鱗類鯖科の魚。眞黑（マグロ）の大なるもの。○うべも　道理でまあ。「うべ」は諸ふ意。○ありがよひ　「ありがよふ」を見よ（七四四頁）。「蟻往來」は戲書。○みますも　眞淵訓によつた。「御覽」は訓み難い。舊訓ミラムはいかゞであるが、古義の訓メサクも僻してゐる。○しるし　證（シルシ）になるをいふ。○きよきしらはま　「しらはま」は白砂の濱の稱。新考訓キヨミシラハマは鑿。△地圖及寫眞挿圖一四七（六六三頁）及び卷二の卷頭總圖參照。



（398）

【歌意】 わが天子樣が神樣であらせられるまゝに、假宮造りして占めて入らせられる、稻見野の邑美の原のその藤江の浦に、鮪を釣るとて海人は立ち騷ぎ、鹽を燒くとて人が澤山出てゐる。浦がまあよさに道理で釣はするわ、濱がよさに道理で鹽を燒くわ。現に入らしつて、天子樣が御覽なさるもその證據さ。いかにもきれいなこの白濱よ。

評 「大王の高知らせる」は頓宮造營の事を斥す。頓宮の所在地邑美の原は邑美郷、藤江の浦は葛江（カヅエ）郷で、郷は互に異なるが、頓宮は浦の西北僅に一里半の近距離にある。で大まかに邑美の原の藤江と續けた。歌人の眼には行政區劃などは、さのみ嚴しくは映じない。

藤江の浦は嘗て人麻呂が、その鱸釣に興味を惹いた場所である。

あら栲の藤江の浦に鱸釣るあまとか見らむ旅ゆくわれを　（卷三——252）

然るをこゝではそれが大物の鮪に變つた。製鹽も亦相當に盛んであつたと見えた。海上では漁船が鮪釣に奮闘し、陸上では製鹽に人達が活躍すると、海陸に亙つて左右に顧眄し、その生き〳〵と緊張した海人の生活狀態に驚異の眼を瞠つた。

入興の餘、筆は遂に藤江の浦の讃美に進行し、鮪釣るのも鹽燒くのも、「浦をよみ」「濱をよみ」の故であると、力强く反復主張してみた。が作者の心にはまだ物足らない。乃ち天皇臨幸の事を援いて絶對の證左とした。藤江の浦はかくして、その清き白濱を天下に誇耀し得た。

「清き白濱」、今の藤江の浦は沙崖が崩壞して露出し、濱も狹い。古へとてもさう大きな浦ではなささうだ。濱はまことに白砂で、淡路島を近く、小豆島を遠く見るだけでも風景がよい。

この篇初頭より「藤江の浦に」までは冒頭だが、假に一段と立てゝ見よう。堂々たる敍筆、事は天威に關し

て雄大な氣象が磅礴してゐる。中間第二段の四聯對、その前聯の敍景を主とした寡對、相俟つてそこに變化橫生し、意詞共に力量が充實してゐる。而も前後聯の襷掛けの手法は、記紀時代からの古調であるが、奈良時代に入つては、只管敍事や說明の進行に急なるが爲、漸くこの種の手法を見る事が稀になつた。蓋し詩思の興奮を缺くことの多い結果かと思ふ。第三段「見ますもしるし」と初頭に呼應して、一篇の重心を「清き白濱」に歸した。

聖武天皇がその邑美頓宮から藤江の浦に御出遊なされた事は、この歌の示す如くである。作者はその際供奉して、この佳作を獲たものであらう。

反歌三首

おきつなみ　へつなみやすみ　いさりすと　ふぢえのうらに　ふねぞとよめる

奥浪　邊波安美　射去爲登　藤江乃浦爾　船曾動流　939

釋 ○へつなみやすみ　「へつなみ」は既出(六五五頁)。「やすみ」は平穩なるをいふ。仙覺訓ヘナミシヅケミ。舊訓ヘナミシヅケミ。○とよめる　略解及び古義訓はサワゲル。

【歌意】 沖の波岸べの波が穩かさに、すなどりするとて、藤江の浦に海人船がさ、ワヤ〳〵してゐる。

評 海上は凪いだ。今こそと出動する漁船の呼聲や楫の音が浦波に響動する。まことに勇ましい光景である。「沖つ波邊つ波」と部分的相對的に表現した漸層は、主眼の語たる「やすみ」に力強い波動を與へ、海人の出動に對する背景を作してゐる。

いなみぬの　あさぢおしなべ　さぬるよの　けながくあれば　いへしししぬばゆ

不欲見野乃　淺茅押靡　左宿夜之　氣長在者　家之小篠生　940

釋 ○いなみぬ　「不欲」を意訓にイナと讀んだ。○あさぢ　「あさぢはら」を見よ(八〇一頁)。○おしなべ　既出(一二頁)。舊訓オシナミ。○さぬる　寢る。「さ」は接頭語。○しぬばゆ　「小篠生」は戲書。

【歌意】 印南野の淺茅を、押靡けて寢る夜が、長く重なるので、鄕里の家がさ、懷かしく思ひ出されるわ。

評 今回の印南野行幸は全部で十二三日の往復に過ぎない。然るに「氣長くあれば」といひ、「家し慕ばゆ」といふ。誇張に過ぎるやうだが、古代人は概して多忙生活でないし、又情味も篤いしするから、かうした感情は早くつよく動き勝であらう。勿論行旅の艱苦は現代人の想像外で、輕皇子宿二于安騎野一時歌にも、

——御雪ふる阿騎の大野に、旗すゝきしのを押なべ、草枕旅やどりせす古へ思ひて。(卷一、人麻呂——45)

とある如く、淺茅押靡べの草枕、それが重なつては、愈よ以てその鄕愁を釀すに十分であらう。

あかしがた　しほひのみちを　あすよりは　したゐましけむ　いへちかづけば

明方　潮干乃道乎　從明日者　下咲異六　家近附者　941

釋 ○あかしがた　明石潟。播磨國明石郡。明石の浦が總稱で、そのうちに港もあり、又潟地もあつた。「方」

は潟の借字。○しほひのみち　潮干の時には通行の出來る處をいふ。海邊にはよく見る現象。○みちを　道にて。「を」の辭、普通の用法とすると、をさまる處がない。古文法の一と見て、ニの意に通ふヲと解しておく。○あすよりは　結句に係る句。○したゑましけむ　下笑ましからむの意。この「けむ」は現在完了の推量詞で、過去推量詞ではない。「したゑむ」は心に笑むこと。「した」は心の中をいふ。訓は契沖のによる。新考は「異」を往の誤としてシタエミユカムと訓んだ。意は明白になるが、改字には一寸躊躇される。○ちかづけば　讀古義にチカヅカバの訓を提出してゐる。

【歌意】明石潟の潮干の道で、内々よろこばしからう、明日からは故郷の家が近づくのでさ。

（399）明石の港

評　明日御還幸ときまつた前日の作である。邑美から明石までは三里許、朝出立すれば滿潮時にならぬ前に潮干の砂路が行かれる。素より本街道ではあるまいが、風景は必ず面白かつたに相違ない。のみならず一足づつに故郷の家に近づく歡喜をさへ加へる。「氣長くあれば家し慕ばゆ」と既に呻吟してゐた作者は、飛び立つ思で、明日の旅程の樂しさの二重奏を綿々密々にその心に描いた。

過ニ辛荷島一時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌

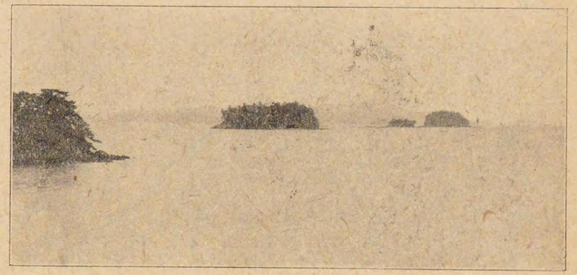
○過辛荷島時　辛荷島は播磨國揖保郡室津の港口の西方に連つてゐる地。辛荷、中辛荷、沖辛荷の三箇の島嶼を稱する。播磨風土記に、韓荷島、韓人破レ船所レ漂之物、漂二著於此島一、故云二韓荷島一と見え、土人カラミと呼ぶはその訛。この歌は聖武天皇の播磨行幸供奉の時の作ではあるまい。淡路から一散に辛荷島へと航行してゐる尙また邑美頓宮御滯留の日子から考へると、天皇は恐らく室津邊まで御出遊の遑があらせられぬと思ふ。

あぢさはふ　いもがめかれて　しきたへの　まくらもまかず　かにはまき　つくれるふねに
味澤相　妹目不數見而　數細乃　枕毛不卷　櫻皮纏　作流舟二　942
まかぢぬき　わがこぎくれば　あはぢの　ぬしまも　すぎ　いなみづま　からにのしまの　しま
眞梶貫　吾榜來者　淡路乃　野島毛過　伊奈美嬬　辛荷乃島之　島
のまゆ　わぎへをみれば　あをやまの　そこともみえず　しらくもも　ちへになりきぬ　こぎ
際從　吾宅乎見者　青山乃　曾許十方不見　白雲毛　千重爾成來沼　許伎
たむる　うらのことごとと　ゆきかくる　しまのさきざき　くまもおかず　おもひぞわがくる
多武流　浦乃　盡往　隱島乃　埼埼　隅毛不置　憶曾吾　來

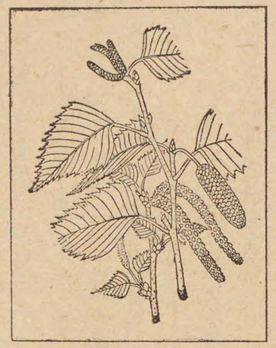
たびのけながみ
客乃氣長彌

【釋】○あぢさはふ　目に係る枕詞。既出(五一六頁)。○めかれて「めかれず」を見よ(七三八頁)。「不數見」を意訓にカレと讀む。(宣長說)「數」を衍字とすればミズテと訓む。○しきたへの　枕の枕詞。既出(二五五頁)。「數」はシキと訓まれるが、敷ならばなほよい。○まくらもまかず　枕も執らず。「まく」を見よ(三〇〇頁)。○かには　樺櫻(カニハザクラ、カバザクラ)。古名ハハカ、今名は白樺。殼斗の喬木、葉は桑に似て尖頭及び鋸齒を居し互生す、初夏淡綠の花をつけ、果實は十月頃成熟する。樹皮は柔軟靱强なるを以て、物を纏きとゝのふるに用ゐる。和名抄木具類に、玉篇云樺木皮名、可以爲炬者也、和名加波、又云加仁波、今櫻皮有之とある。○かにはまきつくれるふね　樺の皮を纏いて作つた船。(1)板の繼ひ繼ひを離れぬ爲に樺皮にて綴ぢ付ける船なるべし(古義所引嚴水說)。(2)舳を飾の爲に樺皮にて卷きたるならむ

島荷辛と津室　(400)


(リヨ山鴨津室)　島荷辛　(401)

(略解說)。(3)船底に卷きて腐蝕を防ぎしなるべし(新考說)。○まかぢ　既出(八四六頁)。○ぬじま　この野島は沼島(前出、一六六四頁)でも、野島が崎(六五九頁)。でも地理がかなふ。○いなみづま　この語義は「いなびづま」を見よ(一一〇一頁)。それに從へば、辛荷島は印南郡とは間に飾磨の一郡を隔てた楫保郡に屬するから、印南都麻辛荷の島とは續けていひ難い。然し實際には種々の轉用がある。即ち航海者は印南の海(今の播磨灘)を本として、印南都麻は印南の海に瀕する沿岸の總稱にも用ゐたとすれば解決がつく。新考はこの句の下に脫句あるかと疑つたが無用であらう。○しまのまゆ　「やまのまゆ」を見よ(八五頁)。○わぎへ　契沖訓による。○こぎたむる　漕ぎめぐる「こぎたみ」(卷三)とも見え、麻行上二段活用。但四段にも活用の例、集中に「沖つ島漕ぎたむ舟は」(卷三)「武庫の浦を漕ぎたむ小舟」(卷三)など見える。○ゆきかくる舟の往き隱るの意。○しまのさきざき　島の先々。古事記(上)に「打ち見る島のさき〴〵」、集中に「付き賜はむ島の埼前依り賜はむ磯の埼前」(本卷)「八十島の崎邪岐」(卷十三)その他磯の崎々の語も數多見える。○くまもおかず　「くまもおちず」に同じい。同項を見よ(一一〇頁)。「隅」は隈の通用。○おもひぞわがくる　我が思ひぞくるの轉倒。○たびのけながみ　旅中の日子が長さにの意。「け」は來經の約。△地圖　第二冊の卷頭總圖を參照。


樺白　(402)

【歌意】思妻の見る目を離れて、その枕もせず、櫻皮を纏いて造つた船に、左右の楫を懸け貫き、自分が漕いで來ると、淡路の野島も通り過ぎ、印南都麻の辛荷の島のあひから、自分の故鄕の家を見ると、遠くに靡く青山

のその何處とも見えず、白雲も幾重にも重なつて來た。漕ぎめぐる浦の何れも〳〵に、船の漕ぎ隱れる島々の出崎出崎に、殘る隈なく妻のことを憶ひ續けてさ自分は來たよ、旅の日數の久しさによつてさ。

評 開口一番、妹が目の離れ、枕も卷かぬをいふ。信に正直な自白で、夫婦間の愛を高唱するに、古人は何の遠慮ももたず、頗る開けすけなものであつた。後世武人的洗禮を經た時代から、この種の公言を憚り、強ひて瘦我慢を張るやうになつた。

「櫻皮纏き造れる船」から本題に入つて、その航海苦を敍した。古代の船が皆樺を纏いたかは疑問である。恐らく遠海航路の船に限つて、堅牢の上にも堅牢なれと、樺を以てその急處々々を纏いたものか。正倉院の投壺の箭には樺が卷いてあり、今昔物語に樺卷きたる弓がある。古へは盛にこの物を使用したらしい。

難波の浦から淡路の野島までは略筆した。さて野島から印南の海を漕ぎ進んで、室津の港口を僅に距る辛荷島まで船は來た。

故鄕の天を想望することは、旅人の悲しい又樂しい日課である。地、中、沖の三島嶼から成る辛荷島、作者はこの島の際を透して吾宅（ワギヘ）を回顧した。が海上は遙に播攝境の山から淡路の島山が、青垣なして瀨戸內海の東偏を局り、その視界を遮斷してゐる。卽ち「青山のそことも見えず」である。天を仰げば「白雲も千重に」重なつて、徒らに茫漠たるばかりである。畢竟幾度廻顧しても、首の骨こそ痛くなれ、酬いる物は何もない。以上がこの篇の中腹を構成する敍事である。

昔の航海は常に海岸線近くに聯繫をたもちつゝ行くので、此處彼處の浦傳ひ、磯崎島崎の往きめぐりであつた。されば「漕ぎたむる——」「往きめぐる——」の一聯は、航海全程といふほどの意を具象的に表現した辭句となる。

あはれ萬斛の旅愁はこの海水を傾けても洗ふべくもない。まさに「隈もおかず憶ひぞわがくる」である。奈良京から播磨の國府までの公程は、下三日上五日の規定（和名抄）だから、この航海とても長くて一週間か十日には過ぎまい。それを「旅のけ長み」は聊か大仰らしいが、當時としては矢張大旅行で、假令どんな享樂があつても、「一夜を明かす程だにも旅寢となれば悲しきに」（太平記）と嗟歎した古人の氣持は、現代人の心からは殆ど理解し難い處で、古人の情味の篤さと、一本氣な正直さとに、つく〴〵感動させられる。

結收はかくして冒頭に回顧しつゝ敍情を以て終つた。一寸天武天皇の吉野の御製（卷一）の末尾に似てゐる。「漕ぎくれば」「見れば」の同辭法の重複は矢張白璧の微瑕であらう。「わが漕ぎくれば」を漕ぎくるなべにとでも改めたらば、或は無難であつたらうに。

この歌は赤人西下の時の作である。その西下の事由は判明しない。卷三に伊豫溫泉（道後）での懷古の作が出てゐる。或はおなじ折の詠か。

反歌三首

たまもかる　からにのしまに　しまみする　うにしもあれや　いへもはざらむ
玉藻苅　辛荷島爾　島囘爲流　水烏二四毛有哉　家不念有六　943

釋 ○しまみする　島めぐりする。「いそみ」を見よ（八五一頁）。○う　鵜。鸕鷀。既出（八三七頁）。「水烏」は

その羽色から陸の鳥に對へた造語。集中に贈二水島越前判官大伴宿禰池主一歌（卷十九）とも見え、爾雅の注に鷧鷗水鳥也と見えた。○あれや　この「あれ」は命令格。「や」は呼格の辭。アレバヤの意ではない。

【歌意】あの辛荷島に、島あるきしてゐる鵜でもさ、自分があればよいわさ。そしたらなまじ、家など思ふ苦勞もなからう。

評　著想奇拔。「家思はざらむ」は家思ひの念に懊惱してゐる人の數の聲で、無心に磯あさりする鵜の島の幸福を羨み、寧ろこの身が卽鵜であらうことを希望するに至つた。さればその一旦奇拔と見えたものも、實は小心の餘に出た矯語に過ぎない。情に脆い人間の弱さが如實に暴露されて悲しい。

しまがくり　わがこぎくれば　ともしかも　やまとへのぼる　まくまぬのふね
島　隱　吾榜來者　乏　毳　倭　邊　上　眞熊野之船　944

標　○しまがくり　島崎の陰に入るをいふ。「かくり」は四段活用の古言。略解訓による。舊訓シマガクレ。○ともしかも　この「ともし」は羨ましの意。「ともしきろかも」（二一三頁）「ともしも」（二一七頁）を參照。尙「こごしかも」を見よ（七八〇頁）。○やまと　既出（一二頁、二〇頁、一七二頁）。○まくまぬのふね　「まくまぬ」の「ま」は美稱。「くまぬ」は熊野形の船の稱と假定する。その樣式は判然しない。神代紀（下）、熊野諸手船の疏に、熊野船名、また伊與風土記に、昔野間郡有二一船一、名曰二熊野一、後化爲石、また同逸文（釋紀所引）に、野間郡熊野峯、所名二熊野一由、昔時熊野止云船設レ此など見え、造船の樣式上から付けた名と考へられる。

この下にも家持の伊勢行幸供奉の歌に「御食つ國志摩の海人ならし眞熊野の小舟に乘りて沖へ漕ぐ見ゆ」とある。但神代紀の諸手船の熊野は、出雲風土記によれば意宇郡の地名で、そこに素盞嗚命の靈が鎭座されてある。さてはクマヌは出雲族の用るた韓語で、語意はさし當つて解釋されてないが、その船は或は朝鮮式の船かも知れない。諸手は漕手の二人以上あるのだから、相當の大きさと速力とを持つた船らしい。舊訓ミクマヌ、今は略解訓による。

【歌意】島陰に往き隱れ〳〵して、自分が漕いでくると、羨ましいことよなあ、故郷倭の方へのぼつて行く、あの眞熊野船はさ。

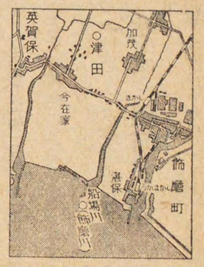
評　作者は折柄西下の途にあつた。船は島隱りする度に故郷倭に遠ざかり、離愁は愈よ益す深く長じてゆく。この際反對の東の方向に針路を取る船を發見したとしたら、とても羨望の念に堪へぬであらう。況やそれが長航海に耐へる眞熊野船なので、更に一歩を進めて、その船をわが懷かしの「倭へのぼる」ものと認定し、力強い懷鄕の情を寓せた。

旅にして物こほしきに山したのあけのそほ船沖に漕ぐ見ゆ（卷三、黑人——270）

とその感想の性質を同じうするものである。

かぜふけば　なみかたたむと　さもらひに　つたのほそえに　うらがくりをり
風吹者　浪可將立跡　伺候爾　都多乃細江爾　浦　隱　居　945

標　○さもらひに　伺ひの爲に。尙「さもらへど」を見よ（四九四頁）。○つたのほそえ　津田の細江。播磨國飾



津田附近（403）

磨郡。今の津田村これに當り、津田村に隣る飾磨町の内に細江町の稱がある。○うらがくりをり「居」原本に往とあるは誤。元本その他によつた。

【歌意】風が吹くので、海上には波が荒く立たうかと、その模様見に、津田の細江に、浦隠れしてをるわ。

評 舟機幼稚な時代とて、動もすれば神經を尖らせて、風まもり波まもり、島隠り浦隠り、海上をまるで忍びあるきのやうな狀態で往來したものだ。「浦隠り」とはいつても、津田の細江は本當の港灣ではない。が折柄雲行がわるく風立つて來たので、これは危險と、臨時に手近のこの細江に避難したのである。この種の作はとかく單なる報告に流れ勝なのを、これは古代人の航海心理と感情とが如實に躍動してゐる。

津田の細江は辛荷島より遙東方であるから、道順が逆になり、過辛荷島歌の反歌としては適切でないが、古人は大まかだから、途中の作をも反歌中に攝したのであらう。

以上三首は赤人作中の異彩。他の諸作とその風格を殊にして、或は奇峭或は悽婉或は蒼涼、他人の容易に企及し難い佳處好處に富んでゐる。

過敏馬浦時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌

○敏馬浦　既出。「みぬめ」を見よ（六五九頁）。

みけむかふ　あはぢのしまに　ただむかふ　みぬめのうらの　おきへには　ふかみるとり　うらわには　なのりそかる　ふかみるの　みまくほしけど　なのりその　おのがなをしみ　まづかひ回庭　名告藻苅　深見流乃　見巻欲跡　莫告藻之　己名惜三　間使も　やらずてわれは　いけりともなし

裳　不遣而吾者　生友奈重二

釋 ○みけむかふ　既出（五一六頁）。こゝは御食に供ふる粟といふを淡路にいひかけた枕詞。○ただむかふ　直ちに對する。「ひなのくにべにただむかふ」を見よ（一一〇〇頁）。○みぬめ　「三犬女」は戯書に近い。○うらわ　佐變動詞に接續する場合の「浦回」は必ずウラミと訓む。○かる　略解訓によつた。舊訓カリ。○ふかみるの　みるの音を疊んで「見まく」に續けた序。「ふかみる」は既出（四〇〇頁）。○みまく　我妹子を見まく。○ほしけど　この語態は「とほけども」を參照（九〇二頁）。○なのりその　名告るなといふ如く。「おのが名惜しみ」に係る序。「なのりそ」は既出（八四〇頁）。○おのがなをしみ　自分の評判に關はる惜しさに。○まづかひ　相手との間の使。○まづかひも　間使さへも。○いけりともなし　既出（五八二頁）。「重二」は四の算數的戯書。並二また二二と同趣。△地圖　第二冊卷頭總圖を參照。

【歌意】淡路島に眞ともに對つてゐる敏馬の浦の、沖合では深海松を採り、浦邊では莫告藻を刈る、その深海松のミルといふやうに倭にゐる妻を見たいが、莫告藻の告るなといふやうに自分の名が惜しさに、文通の使さへ

も遣らないので、自分は生きてゐる氣もしない。

評 前半は詰まる處、眼前の取材によつた「見まく」「おのが名惜しみ」に對する修飾文字で、一篇の主意はその後半にある。然し景に依つて情を興し情に依つて景を懐ふ。情景交互の綯ひ交ぜが相照映して、一段の風趣を生ずることを忘れてはならぬ。「おのが名惜み間使も遣らず」は負惜みだが、そこが男の切ない處さ。

中間、深海松、莫告藻の交錯した禊付けは例の古調である。

反歌一首

すまのあまの　しほやきぎぬの　なれなばか、　ひとびもきみを　わすれておもはむ

爲間乃海人之　鹽燒衣乃　奈禮名者香　一日母君乎　忘而將念　947

釋 ○すま　既出（九二二頁）。○しほやきぎぬ　既出（九二二頁）。○しほやきぎぬの　鹽燒衣の如く。海人の鹽燒衣は大抵著馴らした古著なので、「馴れ」と續けた。初二句は序詞。○なれなばか　「なれなば」は馴染んだなら。「か」は疑辭。○ひとびも　一日なりとも。片時もといふに同じい。○わすれておもはむ　念ひ忘れむの古格。「わすれてもへや」を參照。（二四六頁）。△地圖及寫眞　揷圖 276（九二一頁）277（九二二頁）參照。

【歌意】 須磨の海人の鹽燒衣は、著馴れたものであるが、そのやうに狎れ馴染んだ上なら、假令一日でも貴女を、思ひ忘れる事もありませうかしら。

評 處がまだ馴染まぬうちに別れたので、思ひ忘れる時もないの餘意がある。表現が逆說的だから、一寸要領が握みにくいので、三句を略解及び古義は、近く居て馴れなばと解し、新考はもし雜隔に馴れなばと解したが、何れも斜視である。

作者は婚後間もなく旅に出たものと想像される。「馴れなばか——忘れて思はむ」はほんの物の喩で、本來は馴染むがまゝに愛は濃厚になるものだが、今のさし當つた離愁に感ずる纏綿の情緒を、力強く反映させる爲の善巧方便である。

右作歌年月未詳也。但以類故載於此次。

右の歌は年月が不明だ。但同じ旅行類の作だからこの順に載せたとの意。「右」の語は過二敏馬浦一の作にのみ係けたものか、更に遡つて過二辛荷島一の作にまで及ぶものかは判明しない。

四年丁卯春正月、勅二諸王諸臣子等一、散二禁於授刀寮一時、作歌一首并短歌、

○四年　神龜四年。○勅諸王云々　王達や臣達に勅命が下つて、授刀寮に禁足せしめられた時に詠んだ歌との意。○散禁　大寶の獄令に、杖罪以下の罪は散禁す、但巾を脱するに及ばずと見え、義解に謂下不レ關二木柵一唯禁中出入上とあつて、禁足に當る。散は放まなること。○授刀寮　續紀に、慶雲四年七月丙辰始置二授刀舍人寮一と見え、兵仗を帶し禁中を警衞する。督一人從四位上、佐一人正五位上、大尉一人從六位上、少尉一人正七位上、以下大志二人少志二人あり、舍人は四百人を限り、醫師兵衞衞士の目が見える。大官はその資人とし

て授刀舍人を賜はる。後中衛府の支配を受け、天平神護元年二月近衛府に改められた。

諸王諸臣子が散禁された事情は左註に委しい。

まくずはふ　かすがのやまは　うちなびく　はるさりゆくと　やまのへに　かすみたなびき　たかま
眞葛延　春日之山者　打靡　春去往跡　山上丹　霞田名引　高圓
とに　うぐひすなきぬ　もののふの　やそとものをは　かりがねの　きつぐこのごろ　かくつ
爾　鶯鳴沼　物部乃　八十友能壯者　折木四哭之　來繼比日　如此
ぎて　つねにありせば　ともなめて　あそばむものを　うまなめて　ゆかましさとを　まちかてに
續　常丹有脊者　友名目而　遊物尾　馬名目而　往益里乎　待難丹
わがせしはるを　かけまくも　あやにかしこく　いはまくも　ゆゆしくありと　あらかじめ　かねて
吾爲春乎　決卷毛　綾爾恐　言卷毛　湯湯敷有跡　豫　兼而
しりせば　ちどりなく　そのさほがはに　いそにおふる　すがのねとりて　しぬふまで　はらひて
知者　千鳥鳴　其佐保川丹　石二生　菅根取而　之努布草　解除而
ましを　ゆくみづに　みそぎてましを　すめろぎの　みことかしこみ　ももしきの　おほみやびと
益乎　往水丹　潔而益乎　天皇之　御命恐　百礒城之　大宮人
の　たまほこの　みちにもいでず　こふるこのごろ
之　玉桙之　道毛不出　戀比日

釋　○まくずはふ　山に係る序詞。葛は山野に蔓ふ物なのでいふ。「ま」は美稱。「くず」は既出（九四六頁）。○かすがのやま　既出（八五八頁）。○うちなびく　春の枕詞。既出（六七七頁）。○はるさりゆくと　春になつてゆくと。「往」原本に住とあるは誤。元本神本等によつて改めた。○たかまと　「たかまとやま」を見よ（六一六頁）。○もののふのやそとものを「やそとものを」を見よ（一〇三七頁）。「壯」は若盛りの男子をいふ。故にヲと訓む。○かりがねの　雁は秋冷に乘じてつぎ〳〵來るものなので、「來繼ぐ」に係る序とした。こゝは時季が正月即ち春だから、まことに雁の來繼ぐとしては當らない。梅花歌（卷五）の序はおなじ正月に「空歸故雁」と作つてある位だ。「かりがね」は雁と同意に用ゐた。本義は雁が音で雁の聲をいふ。「折木四哭」は戲書。契沖がこれをカリガネと訓んだのはよいが、その解說は想像である。「折木四」はまた切木四（卷十）とあり。梅園日記（北靜廬著）に、

木　五　(404)

和名抄雜藝部に、兼名苑云樗蒲一名九采內典云樗蒲、又陸詞曰、樗音軒、和、樗子樗蒲采名也とある。折木四は卽樗蒲子の事にて、それは小木を薄く削り兩邊を尖らしめて、形杏仁を削ぎたる如し。その半面は白く、半面は黑く塗りて、白き方二に雉を畫き、黑き方二に犢を畫き、これを投じて其の采色によりて勝負をなす。西土（支那）にてはこれを四木といひ、又五子の采にてするを五木といへり。折又は切の字を加へたるは長木ならぬをいふ。かゝれば折木四は樗蒲子の事にて、加利の假字としたる也。云々。（卷三）

又、狩谷棭齋の箋註倭名抄、樗蒲の註に、

喜多村氏節信曰、樗蒲用二四子一、云々。以レ之反復互換、則九變而止。故又名二九宋一。

節信に折木考のある事は、その著嬉遊笑覽中にも明記してあり、正辭氏は梅園が節信の說を竊んだものとしてゐる。

○きつぐこのごろ　續いて來るこの頃。官人達の來集まるをいふ。「比日」原本に皆とあるは誤。宣長及び略解說によつて改めた。但その訓キツギコノゴロは非。○かくつぎて　原本に「石此續」とある。宣長及び略解の「石」を如の誤として、訓カクツギテとあるに從つた。○つねにありせば　何時もであるならば。この「つね」は平生の意。○ゆかましさとを「さと」は春日の里。この「まし」は第四變化連體格。　○まちかてにわがせしはるを　わが待ち敢へず思ひし春をの意。「春を」はこの下の「戀ふる」に係る。尙「えかてにすとふ」を見よ（三一九頁）。訓は契沖のによる。○かけまくも　既出（五三〇頁）。「決」は挂の意。字鏡に、觿決也、弓加介とあるカケである。缺の誤とするにも及ぶまい。○あやにかしこく　略解及び古義訓のカシコシは非。○ゆゆし　既出（五三〇頁）。○ちどりなく　佐保川に係る序詞。「ちどり」は既出（六八七頁）。○そのさほがはに　その佐保川にて。「さほがは」は既出（二七三頁）。○すがのね「やますげ」を見よ（七三六頁）。○しぬふまで　萎へるまで。「しぬふ」は「心もしぬに」のしぬの動詞形で波行四段活の古語か。「眞木の葉のしなふ」（卷三）のしなふと相通の語と思はれる。「草」は二手の二字の誤寫であらう。古義は原文のまゝで、春野を慕ぶ思ひ種の意と解したのは當らぬ。次の「被へてましを」は禍を拂ふにて、思ひ種を拂ふのではない。新考に、この句は枕詞ならでは意通ぜずとあるも拘つてゐる。○はらひ　祓除。罪咎を拂ひ淸むること。「解除」も同意。○みそぎ既出（九三六頁）。○みことかしこみ「みこと」（七三二頁）及び「かしこし」（五三〇頁）を見よ。○おほみやび

との「宮」原本に官とあるは誤。元本その他による。△地圖及寫眞　挿圖170（六一七頁）169（六一四頁）85（二七三頁）を參照。

【歌意】　春日の山は春になつてくると、山邊に霞が靡き、高圓山に鶯が鳴くわ、數多の官人達は寄りに寄つてくるこの頃、何時もの事なら、友達を引連れて遊ばうものを、そして馬を乘り並べて行かう春日の里であるものを、その待ち敢へず焦がれた春を、ゆくりなく勅を蒙つて、かけて思はうにも寄しく恐れ多く、口にいはうにも憚ありと、前以て知らうなら、千鳥鳴くその佐保川で、石間に生えてゐる山菅の根付きを取つて、そのしなしなになるまで罪を祓はうものを、逝く水に潔修いで磯を濺がうものを、悔しくも何もせずして、勅命を恐み畏れて、大宮人達が外出もせず立て籠つて、徒らに餘所の春を戀ふるこの節であることよ。

【評】　この篇は豫備知識として、まづ左註を讀んで、その大體の事情を知悉しておく必要がある。

時は神龜四年の正月、春のしるしの霞幕は春日山に曳かれ、お隣の高圓山には鶯が新聲を奏でてゐる。祝ひ月の事とて、王子方や官人達が續々參朝や參陣やで繰り込んで、頗る賑やかだ。

忽に侍從や授刀寮の人達の間で、打毬の催しが成り立つて、打揃つて春日野へ出掛けたのであつた。侍從はこの頃出身したばかりの若者が多いし、その他も相當血氣盛りの連中の事とて、お役目も忘れて見物の彌次馬まで飛び出したらしい。處が悪い事は出來ぬ。初春だといふに生憎の雷雨だ。その爲打毬の遊が潰れた位は何でもない。いとも大變な事件が出來してしまつた。

抑も天變地異は非常時の一つで、迷信深い古へは特に恐懼したものであつた。雷鳴の際には侍從の臣は玉體

に近侍し奉り、武官は弓箭を帶して禁裏に侍衞する。令に明文こそないがこれが不文律であつた。平安期では雷鳴三度に及べば近衞の大將はじめ出陣して南殿に候し、さて襲芳舍に宿衞するので、襲芳舍を雷鳴の陣と稱したほどだ。

珍しい雷雨で、主上は獨宸襟を惱ましてあらせられたのに、皆は春日野で濡佛、宮中に「侍從及び侍衞の臣なし」といふ誰りない失體を現じた。勅命忽に降下して、職務曠廢の廉により、その連中を授刀寮に禁足。

「いやも、こんな掛けまくもいはまくも畏い忌々しい禍つ日を前知したなら、早く佐保川に出て、岸の山菅を取つて、思ひ切りそのクタ〳〵になるまで、河水を晒いで潔修して祓つて置けばよかつたに」と、今更悔んでも後の祭だ。

川原に打出て祓除潔身、罪咎の穢を水に流して、遂に海から根の國へと順々に送り棄てる行事は、わが太古からの習俗で、大祓の詞（祝詞式出）の具さに示す如くである。

愈よ禁足されてみると、日が經つに隨つて意地わるく、樣々な想念が頻に湧く。第一春といふ好もしい行樂時季、例年なら朋友三五輩袂を聯ね、白金の目貫の太刀を下げ佩いて、街頭への進出だ。或は新柳の枝を鞭に代へ轡を並べての新春の遊賞だ。次の反歌に見える如く、佐保の內の梅柳、春日高圓の山野や奈良山佐紀山の春日郊行、水上池（佐紀池）佐保川の舟遊など、尙澤山の行樂地もあつたらう。それを何ぞや、今は拘禁の身で、假にも大宮人たる者が、尺前一步の道も日月の光を憚つて踏ます、待ち受けた希望の多い春を、空しく授刀寮の築土の陰から繼しがつて、不本意の日數を送る。實に心外なと慨歎した。然しその慨歎は根本に培はれてある享樂的氣分の反映であることが看破される。

本事件は驕り切つた若者達の失敗であるが、面白いのは奈良人の心理も大して後世人と變らない事だ。近眼者は奈良時代は萬事が丈夫振で、剛健質實、勤勉素朴、誠意に充ち滿ちてるるかのやうに幻想してるる。令文の規程や續紀の法令や記事やを裏返して考察すると、矢張り御多分に洩れぬ同じ人間同じ世の中で、あらゆる醜怪な罪惡は橫行してるたのであつた。尤も國體觀念や敬神思想や氏族のもつ自尊精神や社會の傳統的慣習やに、往古からの堅實な思想が、半面に力强く流れてるた事も確かだ。それが奈良人の特徵とでもいへよう。

「眞葛はふ」より「鶯鳴きぬ」までの冒頭の一段は、この篇の全背景を構成してるる。以下「わがせし春を」までが第二段の前節、以下「解除ぎてましを」までがその後節である。前節は「常にありせば」の假設的辭柄のもとに行樂の希望を布敍し、「待ちかてにわがせし春を」の句を關鍵として、第三段への跨續を求めた。後節は「かねて知りせば」の假設的辭柄のもとに、罪穢祓除の過怠を述說し、前後兩節「まし」の語を大膽に疊用して、その散禁無聊中の閑想に耽つた。「おほきみの」以下は第三段で、一轉して散禁の現在狀態を敍べて、前二段に反撥せしめた。「大宮人の」の一句は實に冷語骨に徹する思がある。但第二段前節の敍法に稍明晰を缺く憾もあるが、それも聞き樣による事である。

王子諸臣子達の授刀寮の散禁、一寸注意の惹かれる題目だが、詠作の主想が春遊不可能の遺憾さにのみ置かれて、散禁そのものを輕く扱つた爲、極めて凡常な感想で終始してしまつた。それを逆にしたら定めて特色のある面白い作を見たことであらう。

反歌一首

うめやなぎ

うめやなぎ　すぐらくをしみ　さほのうちに　あそびしことを　みやもとどろに
梅柳過良久惜　佐保乃内爾　遊事乎　宮動々爾　949

【釋】○すぐらくをしみ　過ぐることを惜しみ。○さほのうち　佐保郷の内。「さほ」を見よ（七三八頁）。○みやもとどろに　宮内も轟くほどに。この下、いひ騷ぐの語が略かれてある。△地圖　挿圖170（六一七頁）を參照。

【歌意】梅の盛りや柳の新緑の時過ぎることを勿體ながり、嘗ての春佐保の内で遊んだことを、宮内も轟くほどに、禁足の皆々がいひ立てたわい。

【釋】佐保は奈良京の北郊で地域は狹いが、梅柳の春の景物に富み、又秋の風趣にも饒かであつた。

我が門にもる田をみれば佐保の内のあき萩薄おもほゆるかも（卷十――2221）

禁足連はその曾遊を憶ひ出して、實にあの時は面白かつたが、かうしてゐる間にもその梅も散り柳も伸び過ぎはしまいかと苦勞にして、盛に騷ぎ立てたといふ。「宮もとどろに」は素より大いなる誇張である。

長歌の評中に、樂天氣分がその底に低迷してゐるといつた。玆にはそれが公々然と不謹愼と思はれる程に、表面的に打つて出てゐる。その暢氣さ加減には實に驚かされる。古義の說の

佐保の内へ出で遊びし事を、宮中とよみていひ騷がれつゝ、散禁の罰にあひてをるがいぶせし、

はまるで見當違ひで、散禁の因は長歌及び左註に見える如く、春日野の出遊で、佐保の遊には與らない。隨つて「宮もとどろに」は他人がお節介にさう騷ぐのではない、當人達が春を惜んで騷ぐのである。

結句、その誇張と竭後の辭樣とによつて、頗る含蓄味を饒からしめた。

右神龜四年正月、數王子及諸臣子等、集於春日野、而作打毬之樂。其日忽天陰、雨雷電。此時宮中無侍從及侍衞。勅行刑罰、皆散禁於授刀寮、而妄不得出道路。于時悒憤即作斯歌。作者未詳。

毬　打　(405)

神龜四年正月、諸王子及び諸臣達が春日野に集まつて打毬の遊をした、その日急に空が曇つて雨が零り雷電があつた。この時宮中には、侍從の文官も侍衞の武官も居ない、そこで勅命があつて刑罰の處斷があり、遊に往つた輩を皆授刀寮に禁足し、妄に外出を許されなかつた、時に憂鬱して即ちこの歌を作つたとの意。○作者未詳　事が事、歌が歌だから、始から作者は不明にしてあつたものらしい。○打毬　毬杖をもつて毬を打つ遊戲。和名抄に、打毬、唐韻云、毬丸毛打者也。劉向別錄云、打毬昔黃帝所造、本因兵勢而爲之、云々。師說云萬利宇知。紀には打毬を蹴鞠と混同した。こゝの打毬之樂は打毬の遊樂の意で、雅樂の打毬樂ではあるまい。

五年戊辰、幸于難波宮時、作歌四首

○五年戊辰幸于難波宮　神龜五年難波行幸のこと、續紀に所見がない。紀は誤漏が多いから、この題詞の如き

事實はあつたと見てよからう。但歌は難波行幸とは全く無關係なる相聞歌である。

抑もこの卷は雜歌を採錄するが本旨だから、相聞歌のあるべき筈がない。想ふに或人が、この四首を記した短籍（附箋）を卷三あたりの譬喩歌か相聞歌かの部に挿んで置いたのが、誤つて此處に紛れ込んだのを、そのまま後の筆者が本文に書き入れたものらしい。又いふ、この四首を挽人として考へると、「五年云々」の題詞は直ちに下の「膳王歌一首」（カシハデノ）とあるに係るものと見てよい。

おほきみの　さかひたまふと　やまもりす　もるとふやまに　いらずはやまじ

大王之　界賜跡　山守居　守云山爾　不入者不止　950

釋　○さかひたまふと　界をなさるとて。「界ひ」は佐行四段活に古へは用るた。○やまもり　既出（九〇八頁）。○もるとふ　モルチフの訓もよい。○やまに　山にもの意と見る。

【歌意】　假令天子樣が界を立て給ふとて、山番を置いて守るといふ山にも、界を犯して這入らずにはおくまい。——まして親の守る位の女を手に入れずにおくものか。

評　寄托の言であることは明かだが、文字上から見ると、事天威に關聯して甚だ不穩である。極端の誇張を恣して、却て破綻を生じた。よつて意釋はその意を緩和して解して置いた。作者の本意とても恐らくその邊であつたのだらう。

みわたせば　ちかきものから　いそがくり　かがよふたまを　とらずはやまじ

見渡者　近物可良　石隱　加我欲布珠乎　不取不已　951

釋　○ちかきものから　近くにあるもの故に。○いそ　磯。石處の義。○かがよふたま　耀く珠。

【歌意】　見渡すと、ごく手近にあるものを、その磯隱れに耀く珠を、手に取らずにはおくまい。——とても近くに住むものを、その箱入娘を、終には手に入れずにはおくまい。

評　磯隱れに耀ふ珠は鰒珠即ち眞珠である。眞珠ほど珠玉類の中で女性的の感じをもつ物はない。隨つて婦人に擬へるにふさはしい。而も今日よりもその產額が少くて、非常な高貴品であつた時代としたら、その譬喩は最大限度の敬慕を拂つたものといへよう。「磯隱りかがよふ」といつても、眞珠は貝中の珠で、剝き出しに光つては居ない位は作者も知つてるようが、深閨中の美人を彷彿させるには、かういふより外はなからう。結句も類句が卷七に二首あるが、この際至當の下語である。但初句の「見渡せば」は浮泛で面白くない。この語は「見渡せば明石の浦にともす火の」（卷三）の如く用るて、始めて可なるものである。

からごろも　きならのさとの　きみまつに　たまをしつけむ　よきひともがも

韓衣　服楢乃里之　君待爾　玉乎師付牟　好人欲得　952

釋　○からごろも　韓衣。(1)朝鮮の衣、(2)朝鮮式の衣、(3)「から」を美稱として、單に衣のことゝする。こゝは(3)の意。○きならのさと　衣の著馴るの馴るを奈良にいひ懸けた。「から衣著」までは奈良に係る序詞。○

ならのさと　奈良京の一部にこの稱あるか、未考。上にも「奈良路なる島の木立も」と見えた。○きみまつに　君待つにより。待つに松をいひ懸けた。「君」原本に島とある。宣長いふ、下にも「吾宿の君まつの樹に」と詠めれば。こゝも島は君の誤と。○たまをしつけむ　玉を著けむ。「し」は強辭。○よきひと　優れた人。卷一には淑人を訓んである。こゝでは物の辨へある人をいふ。新考は「人」を玉の誤とした。簡明であるが、わざと改める程の必要もない。

【歌意】衣は著馴らす、その馴るといふ名の奈良の里のお方を待つによつて、その待つといふ名の松の樹に、玉をさ飾り付けう處の、譯のわかつた人も欲しいなあ。

評　待たれる人は京人で、殊にそれが壻の君であるとしたら、超特別の歡迎方法を考へねばならぬ。隨分宿に玉敷く手もあるが（本卷、及び卷十二、卷十八、卷十九に所見）、こゝには新手を出して、庭の松の樹に玉を飾つたらとの名案、然し深閨中の婦人とすると、それは心の內で思ふだけで、獨やきもきして、只もう氣轉の利いたよき人の出現を待望した。

初二句の辭樣は、卷三「をとめ等が袖ふる山の」の評中に詳說した。

「きなら」「君まつ」のいひ懸け、こんな細瑣な技巧は集中に多分に疊見する。これに枕詞や序詞の有する類似の技巧を加へて見たなら、殆どその頃に堪へぬであらう。傳統は爭へないものだから、平安朝の技巧的修辭を論ずる前に、まづこの集の同じ方面を具に回顧する必要があらう。

さをしかの、なくなるやまを　こえゆかむ　ひだにやきみに　はたあはざらむ

竿牡鹿之　鳴奈流山乎　越將去　日谷八君　當不相將有　953

評　○さをしか　牡鹿。「さ」は美稱。「竿」は借字。尙「かなかむやまぞ」を見よ（二八七頁）。○ひだにや　「や」は反動辭。○きみに　新考はキミハと訓んだが不自然である。○はたあはざらむ　「はたや」を見よ（二五八頁）。

【歌意】平時はとにかく、牡鹿の鳴いてゐる山を、越えて行かうこの時なりとも、貴女にさし當つて、逢はずにあらうことかいな。

評　鹿の鳴くのは秋で、それは妻戀の爲である。その秋山を獨旅して行かうことを想像すると、男は鹿以上に妻戀ひの念に打たれて溜らなくなり、出立前に是非逢はうと思つたが、生憎や會合の機會がない。焦燥胸に迫つて、時もあらうに逢はずに別れ行くことか、いや行かれることではないと、男泣に泣いてゐる。

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今宵もわが獨寢む（卷一―五四）

とその意趣風格が類似して、やゝ一籌を輸するが、而も聲響から生ずる凄酸味は同調である。

右、笠朝臣金村之歌集中出也。或云車持朝臣千年作之。

金村歌集中にこの四首があつたのなら、金村作として差支へないやうだが、すべて左註に擧げた某歌集といふものは甚だしどけない上に、第三首の如きは婦人の作らしいから、「右」の字は「さをしか」の一首にのみ係からころも　さをしかの

けて見るべきか。或人の車持千年作の説にも、同じ理由が共通する。「集」原本にない。補つた。

膳王歌一首

○膳王　膳部王、また膳夫王と書く。膳王は部の字或は脱か。既出（九八〇頁）。上の「五年戊辰幸二難波宮一時作歌四首」の題詞は、この條の始に置くべきものと思ふ。但この神龜五年の行幸は續紀には見えない。

あしたには　うなびにあさりし　ゆふされば　やまとへ　こゆる　かりしともしも

朝　波　海邊爾安左里爲　暮　去　者　倭　部　越　鴈　四　乏　母　954

釋　**○**うなび　海邊の轉。山び、河び、岡び、濱びの續きと違つて、ウミの尾韻からビに續くので、ウナと轉じた。△地圖　第一册卷頭總圖參照。

【歌意】　朝方にはこの海邊に求食し、夕方になると、故郷倭へ山越えてゆく雁がさ、羨ましいなあ。

評　難波行幸の御供人としての膳部王を考へる。折々は人戀しさに故郷倭（奈良）へ歸りたいが、その自由は一切利かない。近くて遠い憾を抱いて、悄然として蘆邊の雁の行動を伺ふと、朝には難波の海に求食り、夕べには生駒連山を飛び越えて行く。山のあちらは即ち懐かしの倭である。はかない生物の雁も、圖らず人間羨望の的となるに至つて、旅情の凄慘、人をして酸鼻に禁へざらしめるものがある。

初二句と三四句との排對、地理的に雄大な光景を想はしめ、屑々たる技巧に囚はれぬ點は推賞に値する。

右、作歌之年月不審也。但以歌類便載此次。

この左註は、歌を難波宮行幸時の題詞下の作とすれば、「但云々」は全然不用の文字となる。

太宰少貳石川朝臣足人歌一首

○太宰少貳　既出（七九三頁）。**○**石川朝臣足人「石川足人朝臣」を見よ（一一六二頁）。以下また宰府の詠作が連載されてある。

さすだけの　おほみやびとが　いへとすむ　さほのやまをば　おもふやもきみ

刺竹之　大宮人乃　家跡住　佐保能山乎者　思哉毛君　955

釋　**○**さすだけの　君、皇子、大宮に係る枕詞。また舍人に冠するは大宮の舍人といふを略いたもの。刺し竹の轉。始より刺す竹の意ならばタの音は濁る筈なるを、紀をはじめ古書皆濁音の陀、太などの字を充てゝあるから、複合名詞の刺し竹を原語とする。大神宮儀式帳に五百枝刺竹田乃國ともある。(1)若竹の枝刺し葉刺し榮え行く意にて、君、大宮、皇子に續けていふか、「さす」は草木の生ひ殖りて生榮えあるをいふ（守部説）。(2)狹虚竹の黍を君にいひかけ、さて皇子とも大宮とも續く（古義説）。(3)立つ竹の轉（古説）。三説のうち(1)が勝つてゐる。**○**いへとすむ　家として住む。**○**さほのやま　既出（一〇〇八頁）。**○**おもふやも　「や」は疑辭。「も」は歎辭。△地圖及寫眞　挿圖170（六一七頁）87（二七三頁）を參照。

【歌意】大宮人の貴方が、家として住まれた佐保の山をば、思ひ出しになりますかえ、貴方はよ。

評 大宮人は大伴旅人卿を斥した。旅人は門閥の名家で、この時從三位中納言兼太宰帥である以上は、堂々たる大宮人である。また奈良に於けるその佐保山の家は、父安麻呂卿以來の傳承で、音に聞えた名邸宅である。乃ちこの佐保山を拉へ來つて、今や鎭西の方伯となつて君は榮えて居られるが、時には故京戀し家戀しの念がお生(オコ)りでせうと、少貳さん足人は帥殿の急處を突いてみたものだ。「佐保の山をば思ふ」は歸家を念ふの暗喩である。

こゝに一寸經緯がある。上の「五年幸于難波宮」の題詞の年代をこゝに係ければ、神龜五年の作と見られる。旅人の筑紫在住はこの時既に足掛け四年に及んでゐる。作者も卷四にこの年遷任上京の事が出てゐるから、旅人以上に長年在住して居たと見てよい。すると元々自分が持て餘してゐる懷土望鄕の念から、同情的にこの質問を發したものと考へられる。更に今一層立入つて考へると、自分の抱いてゐる羈愁を、體裁よく旅人の口から吐かせようと試みた狡獪手段ともいへよう。

藤なみの花はさかりになりにけり奈良の京(ミヤコ)をおもほすや君（卷三、大伴四繩――330）

と殆ど同調の作である。よつてその評語（七九七頁）を參照されたく、又卷五「雲に飛ぶ藥はむよは」の條の評語をも參考（一四八九頁）。

帥(かみ)大伴卿(のまへつぎみの)和歌(こたふる)一首

大宰帥の旅人卿の返歌との意。○帥　既出（七九八頁）。○大伴卿　旅人の傳は既出（七三頁）。

やすみしし　わがおほきみの　をすくには　やまともここも　おなじとぞおもふ

八隅知之　吾大王乃　御食國者　日本毛此間毛　同登曾念　956

釋 ○をすくには　新考に、食國なればといはでは辭足らずとあるは、迂に近い。「をすくに」は既出（五三三頁）。「御」は敬意を以て添へた。○やまともここも　故鄕の倭もこゝの筑紫も。

【歌意】天子樣の御統治なされる日本國は、倭でも筑紫の此處でも、同じ事だとさ私は思ひます。――別に佐保の家の事も思ひません。

評 九寸五分で横腹に突つ懸つて來たのを、大段平でカツキと受け止めた貌である。足人は私人の立場から一場の情語を弄した。旅人は公人の立場から、詩の小雅北山篇の「普天之下、莫(シ)非(ルハ)王土(ニ)」の意を主張して反擊した。實は表面的の理窟を楯とした强がりの瘦我慢だから、その心中の葛籐に至つては、却て凄愴甚しきものがあらう。決して樂天的放語ではない。

懸歌が「刺竹の大宮人」と堂々と來たので「八隅ししわが大王」と應酬した。この邊の呼吸に息も吐かれぬ面白味がある。

冬十一月、太宰官人(のつかさびと)等、奉(ら)拜(りをろがみか)香椎廟(しひの)訖(ををへて)退歸(まかる)之時、馬(を)駐(とどめ)于香椎浦(のに)、各述(べておもひを)懷作歌

神龜五年冬十一月に、太宰府の役人達が香椎の廟の參詣が濟んで歸る時に、香椎の浦に馬を駐めて、それ〴〵心のうちを詠んだ歌との意。○太宰　太宰府を見よ（七九三頁）。○香椎廟　筑前國糟屋郡香椎村にある。香椎廟宮と稱し、今官幣大社に列する。神功皇后を祀る。或は仲哀天皇を祀るとす。「香椎」はまた橿日、樫日と

さすだけの　やすみしし

も書く。和名抄に加須比とあるは平安期の訛稱である。「廟」は廟の古文で靈屋をいふ。この社に限り神社といはずして廟といふは、制蕃の神として特に神靈を奉祀された爲か。社は古くよりあつたらしいが、本社古記に、養老七年造營、神龜元年に成就の記事がある。○香椎浦　香椎廟の西に接した博多灣の一部の稱。△地圖挿圖217（七四四頁）を參照。

帥大伴卿歌一首

○大伴卿　旅人卿のこと。

いざこども　かしひのかたに　しろたへの　そでさへぬれて　あさなつみてむ
去來兒等　香椎乃滷爾　白妙之　袖左倍所沾而　朝菜採手六　957

【鮮】○いざこども　既出。「いざ」及び「こども」を見よ（二三五頁）。○かしひのかた　香椎潟。香椎の浦は博多灣の奥部に屬し、遠淺で潟地を成してゐた。○かたに　潟にての意。「滷」は鹵水の合字。鹵は鹽土。鹽土の水に從ふは卽ち潟である。○しろたへの　衣及び袖などの枕詞。既出（一一八頁）。○そでさへ　嘗裙は素より袖までも。○あさな　朝食の料の菜。菜はこゝでは海藻を稱した。○ぬれて　既出（一五〇二頁）。

【歌意】さあお前達よ、私も一緒にこの香椎潟で、裾から袖までもビショ〳〵になつて、朝菜を摘まうぞ。

【評】香椎廟は韓地制禦の神であり、太宰府は邊防の職であるから、神人不可分の關係に置かれてある。で帥卿を始め府の官人達は一同打揃つて賽詣した。宰府から香椎までは五里強、馬での遠乘なら朝詣に間に合はぬこともないが、多分前夜を一泊したものらしい。

香椎參詣に必ず伴ふものは香椎潟の遊賞だ。宰府の平野から出て來た人達の眼を悦ばしめるに足る風光であつた。參詣さへ濟めばもう用なし、あとは一時的解放の自由行動だ。

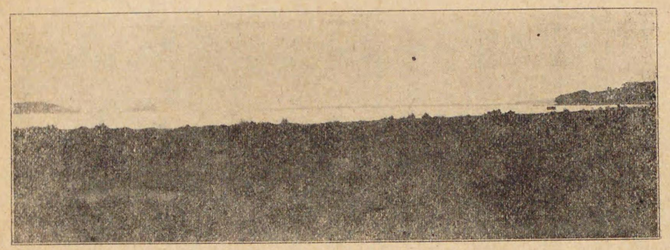
帥卿は從者達に對つて「いざ子ども」と呼び懸け、香椎潟で一緒に朝菜摘をしようぞと、いかにも打解け切つたお詞だ。「袖さへ沾れて」は朝菜摘の狀態の形容として適賞である。この一句あるが爲に、朝菜摘が衣袂の沾れをも厭はぬ程興味深いものと受け取られ、隨つて「摘みてむ」に力強い示唆を與へる。

「摘みてむ」は希望で、その實行に移らぬ間に有餘不盡の味ひがある。宰府の長官しかも御老體の帥卿が、本當に從者達と水なぶりをしてしまつたのでは埒はなくなる。

闕を撤して衆と偕に樂しむ溫雅な氣持、暢んびりした大樣な態度、流石に帥卿旅人の風格が想見される。

大貳小野老朝臣歌一首

○大貳　「太宰少貳」及び「太宰府」を見よ（七九三頁）。○小野老　既



香椎潟（406）

出（七九三頁）。老はこの時にはまだ少貳に任じたばかり。こゝに大貳とあるは、その極官を以て擧げたものだ。

ときつかぜ　ふくべくなりぬ　かしひがた　しほひのうらに　たまもかりてな

時風應吹成奴香椎潟潮干汐爾玉藻苅而名　958

【校】○ときつかぜ　時に當つて吹く風。こゝはさし潮の時に吹く風をいつた。○しほひのうら「汐」は水の廻り流るゝ内面をいふ。よつて浦に充てた。○かりてな　既出（三六七頁）。

【歌意】さし潮時の風が、生りさうになつた。香椎潟の潮干の浦で、はやく海藻を刈らうよ。

【評】海潮滿干の差が著しい地方では潟地も忽ち海だ。香椎宮參拜を終へて浦邊に打出た頃は、大方晝の退潮の頂上で、一しきり遊ぶと、もう時つ風が吹き立つてさし潮時になる。そこで今の間遊べるだけ遊ばうといふ事を玉藻刈に托言した。

時つ風吹かまく知らず阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな（卷七——1157）

ゆふされば潮滿ち來なむ住の江の淺香の浦に玉藻刈りてな（卷二、弓削皇子——124）

は同想同型の作。殊に前首は一心同體、何れを影とも形とも辨知し難い。

豐前守宇奴首男人歌一首

○宇奴首男人　傳未詳。宇奴は氏　首は姓。政事要略（廿二）に、舊記云、養老四年大隅日向兩國隼人發レ亂、勅以二豐前守宇奴首男人一爲二將軍一、祈二八幡大神一伐レ之、多殺二隼人一大勝レ之、於是爲二放生會一報二神恩一とある。姓氏錄に宇奴首、百濟國君男、彌奈曾富意彌之後也と。但續紀を檢すると、養老四年二月に太宰府より隼人反亂の奏上があり、三月に正四位下大伴旅人が征隼人持節大將軍、從五位下笠御室、同巨勢眞人が副將軍に任ぜられたと見えて、宇奴男人の將軍たる事がない。要略に、養老四年に豐前守とあるによれば、この神龜五年までは九年間になる。その間國守であつたとしては法外の長期である。恐らく守は介の誤であらう。隼人反亂當時は豐前介（六位）であつたとすれば、位階が卑いから將軍たる筈も殆どあるまい。要略の記事は誤つてゐる。

ゆきかへり　つねにわがみし　かしひがた　あすゆのちには　みむよしもなし

往還常爾我見之香椎滷從明日後爾見緣母奈思　959

【歌意】豐前の國府から宰府へ往復の度に、何時も自分が見たことであつたこの香椎潟、明日から後には、二度と見ようすべもないわ。

【評】香椎潟を再訪し難い遺憾の表明、間接にその風光の面白さが反映する。

養老四年の隼人征伐の際、當時豐前介だつた男人は大將軍旅人の部將として働いた男だ。旅人が帥として再び筑紫に來てから又被管の關係を生じたのだから、公務以外に深い交情があつたと見てよい。

九州及び二島は皆宰府の被管だ。豐前守たる作者も隨時宰府に參向して、帥卿の膝下に拜跪の禮を怠らなかつたらう。香椎潟はその序に訪問した馴染み深い土地で、まことに「ゆき返り常にわが見し」であつた。然るに「明日ののち」なぜ見む由もないのか。

男人は當時豐前守の秩が滿ちて、歸京の途に上る際であつたと考へられる。で帥卿に暇乞かた〴〵宰府に參

向したらしい。帥卿はこれを好機會に、少貳小野朝臣をはじめ作者等を同伴して、香椎に出動に及んだ。されば男人はこれが香椎の見納めなのであつた。

「常にわが見し」「見む由もなし」の相反的應接、率直と正直さとはあるが、餘り親貼に過ぎるかと思ふ。

帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首

旅人卿が宰府から、遙に芳野離宮を戀ひ思うて詠んだ歌との意。

はやひとの　せとのいはほも　あゆはしる　よしぬのたきに　なほしかずけり
隼人乃　湍門乃磐母　年魚走　芳野之瀧爾　尚不及家里　960

釋 ○はやひとの　既出（六五七頁）。○せと　薩摩の迫門の略。「さつまのせと」を見よ（六五七頁）。○いはほも　巖でさへも。「磐」は盤とある本もある。二字は通用。○よしぬのたき　「たぎのみやこ」を見よ（一四八頁）。○なほ　やはりの意。○しかずけり　既出（八二四頁）。△地圖及寫眞　挿圖 177, 178（六五六、六五七頁）。50（一五二頁）を參照。

【歌意】 いかに見事な薩摩の迫門の巖だつても、故郷倭の、鮎が走る吉野の瀧には、矢張かなはぬわい。

評 薩摩の迫門の岩壁岩礁の存在は、實に雄大奇峭を窮めたもので、とても規模の小さな吉野の瀧の比ではない。これが公論である。

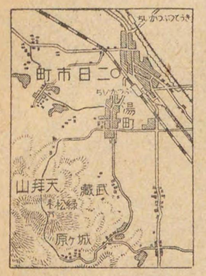
作者は心裏にそれを肯定しつゝも、「尚及かずけり」と斷言した。これは決してお國自慢の橫車を押したのではない。その實眞劍深刻な國慕の念がハンデキヤップとなつて、吉野の瀧の價値が倍加されたからである。平然として迫門の巖を蹴落し得るほど、作者の胸中には國慕びの念が鉢切れさうになつてゐる。それが悲しい。「鮎走る」の形容はその特徴を擧げて、事實上からも吉野の瀧により多く價値づけようとの小努力である。すべて大きな聲の揚言ではなくて、悄然首を垂れて口の內につゞしつた趣の歌である。楚調凄然として窮りない感愴を內に藏し、表現は全く技巧外に超越して、一唱三歎の妙味がある。可笑しいのは古義に、

薩摩は太宰の所部の國なれば、香椎廟より歸らるゝ序に往きて見られしなるべし。

とあるが、香椎から薩摩の迫門は百里も隔つてゐる。序などに往ける處ではない。この歌は上の香椎行とは全然關係をもたぬ別時の作である。

帥大伴卿宿次田溫泉聞鶴喧作歌一首

旅人卿が次田の溫泉に泊つて、鶴の鳴く聲を聞いて詠んだ歌との意。○次田溫泉　筑前國御笠郡次田鄕の湯。（今筑紫郡二日市町武藏にあり、武藏溫泉といふ）。竹取物語、空穗物語、古今集等に、筑紫の湯とあるはこゝの事。○鶴喧「喧」はかまびすしの意で形容詞であるが、こゝは名詞とした。△地圖　挿圖 217（七四四頁）を參照。



次田の湯　(407)
（武藏溫泉）

武藏（次田）溫泉（天拜山ヨリ）（408）

ゆのはらに　なくあしたづは　わがごとく　いも
湯原爾　鳴蘆多頭者　如吾妹　961
にこふれや　ときわかずなく
爾戀哉　時不定鳴

釋　○ゆのはら　湯のある廣野。○あしたづ「あしたづの」を見よ（一〇〇二頁）。「頭」をヅと讀むは吳音。○こふれや　戀ふればや。○わかず「不定」を意訓に讀む。

【歌意】　次田の湯の原に鳴く鶴は、自分が吾妹子を戀ふるやうに、妻戀ふるせゐかして、何時といふ事なしに鳴くわ。

評　次田の湯は太宰府の南郊にあり、天拜山下の平原で、まさに湯の原である。而も鶴も下り立つ洳沮地であつたらうことは、疑もない地勢である。

本年の暮春、旅人卿はその愛妻大伴郎女を喪はれた。（卷五、一三九七頁參照）。鶴の渡來は早くても十月であるし、上に「冬十一月云々」の題詞ある香椎行があるから、それから推せば、次田の湯治はまづ十一月十二月の交と見られる。郎女の逝後漸く半歲餘に過ぎない。

溫泉場の雰圍氣は孤獨感をいやが上にも唆るもの。況や老いて伉儷を喪うた彼れである。追慕の暗涙は時に衣袂を濕すに堪へぬものがあつたらう。この時に當つて不斷の鶴唳を前面の湯の原に聞く。鶴も鳴き、我れも泣く。「なく」が兩者の連鎖となつて、「わが如く妹に戀ふれや」と、自身の情懷を鶴の上に寄托した。蓋し詞人の慣手段である。流石の醉客旅人も茲に至つては、酒の氣が全然醒めてゐる。「なく」の重複の如きは更に耳に障らない。

打渡す竹田の原に鳴く鶴の間なく時なしわが戀ふらくは（卷四——760）

は妹君坂上郎女の作で同調に屬するが、此れは語々勁健、彼れは句々流麗、おのづから男女の色相を殊にしてゐる。尤も郎女のは遙に後出である。

天平二年庚午、勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌一首

天平二年勅命で駿馬を探し求める使大伴道足を筑紫に遣はされた時の歌との意。歌の作者は左註によれば葛井廣成である。○擢駿馬使　擢駿馬はコマエラビと訓む。この使は臨時に派遣される。「駿」は和名抄に、駿馬之美稱。漢語抄、土岐宇馬、日本紀私記、須久禮太留宇萬とある。○大伴道足　續紀に、慶雲元年正月從五位下、和銅元年三月從五位上讃岐守、同五年五月正五位下、同六年八月彈正尹となり、養老四年正月正五位上、同十月民部大輔となり、同七年從四位下、天平元年二月權參議となり、同三月正四位下、同九月兼右大辨となり、同三年八月諸司の擧に依つて擢んでられて參議となり兼官故の如く、同十一月南海道鎭撫使となる。天平十三

年に薨逝。

おくやまの　いはにこけむし　かしこくも　とひたまふかも　おもひあへなくに
奥山之　盤爾蘿生　恐　毛問賜鴨　念不堪國　962

【釋】○おくやま　既出(七三六頁)。○いはにこけむし　「こけむし」は「こけむす」を見よ(六一二頁)。初二句は「かしこく」に係る序詞。深山の岩に苔の生えたのは恐ろしく見えるのでいふ。○おもひあへなくに　歌を思ひつき得ぬのに。歌を考へることを歌思ひといふ。

【歌意】奥山の岩に苔が生え、それが畏く見えるやうに畏くも、歌はどうかとお尋ねなさることよ、私には思ひ付きかねますのにさ。

【評】一口に輿車といふが、奈良時代の乘物は輿の外は馬であつた。車は乘物として支那では馬車牛車羊車の類があり、わが邦では平安期に至つて牛車を用ゐるやうになつたが、その以前には車を用ゐなかつた。蓋し道路が不備で車行に適せぬせゐでもあつたらう。力車は用ゐたが。

で馬が頗る幅を利かせ、紀には諸臣の騎馬の行粧を叡覽された記事が再三掲載された。擢駿馬使を立てられる事も、それらの必要上からも起つたと見られる。然し筑紫に馬を求めることは異例であらう。馬は大抵日本中部以東の山國を産地としてゐる。但國守の職掌中には厩牧の事が規定されてゐたから、九州でもそれ〴〵その飼育には力めてゐたものであらう。

奉和藤太政住野之作
正五位下中宮少輔葛井廣成
物外囂塵遠。山中幽隱親。笛浦棲二丹鳳一。琴淵躍二錦鱗一。月後楓聲落。風前松響陳。開レ仁對二山路一。獵レ智賞二河津一。
月夜坐河濱　雲飛低二玉柯一。月上動二金波一。落照曹王苑。流光織女河。

勅使道足は帥卿の一族で、當時權參議で在京大伴氏の代表者であつた。かた〴〵歡迎の宴を帥の官邸で開き、官吏達を會同した。その中に葛井連廣成は勅使隨行の驛使で、下向して來た男であつた。乃ちこの男を捉まへて、須レ作二歌詞一と責め立てたものだ。これには譯がある。廣成は養老三年に大外記で遣新羅使となつた程の漢學者で、(天平十五年に新羅使攝待に筑紫に下つた事もある)又詩作にも達成してゐる文雅の士である。されば國風の歌は彼れの畑にあるまいとの豫想から、そこに興味をもつたものだらう。

女牛に腹突かれたとはこの事、眞逆と思つたのが、聲に應じての「畏くも問ひ給ふかも思ひあへなくに」は、正にその實況に即した屬吐で、而も彼我を相對的に扱つた流活の妙は、時に取つて頗る面白い。主人帥卿、尊者道足を始め、一同啞然として驚歎したことであらう。

但上句は全部、古い譬喩歌に、

奥山のいはに蘿蒸しかしこみと思ふこゝろをいかにかもせむ　(卷七——1334)

とあるを一寸拜借して融通したらしい。この來歷を知る者は、更に廣成の當意即妙の頓才に敬服したことであつたらう。尙卷七の本歌の評語を參照。

右、勅使大伴道足宿禰饗二于帥家一。此日會二集衆諸一。相二誘驛使葛井連廣成一、言レ須レ作二歌詞一。登時廣成應レ聲即吟二此歌一。

擢駿馬の勅使大伴道足を帥卿旅人の家で饗應した。この日諸人を寄せ集めた、驛使である葛井廣成をその席に誘うて、歌を詠みなさいと慫めた、その時廣成がその聲のもとに、すぐ樣この歌を朗吟したとの意。

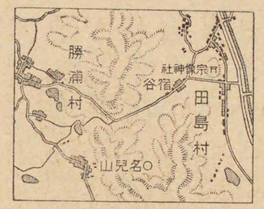
○驛使　既出（一八四頁）。○葛井連廣成　本姓白猪史。續紀に、養老三年閏七月大外記從六位下で遣新羅使となり、同四年五月葛井連の氏姓を賜はる、天平三年正月正六位上から外從五位下、同十五年三月新羅の使來朝に就いて筑前に派遣、供給檢校のことを掌り、同六月備後守、同七月從五位下、同二十年二月從五位上、同八月天皇その宅に行幸留宿、廣成及びその室犬養宿禰八重に正五位上を授けられ、勝寶元年八月中務少輔となる。下に天平八年十二月、歌儛所の人達がその家に宴した事が出てゐる。音樂にも通じてゐたと見える。武智麻呂傳には文雅の士として擧げてある。卷四卷五卷六に筑後の守葛井大成の名が見える。廣成の兄弟か。

冬十一月、大伴坂上郎女發二帥家一、上道、超二筑前國宗像郡名兒山一之時作歌一首

天平二年冬十一月、大伴郎女が兄帥卿族人の家を出立して、上京の途にのぼつて、筑前國宗像郡の名兒山を越える時に詠んだ歌との意。○大伴坂上郎女　既出（八六七頁）。○名兒山　宗像郡荒自郷（今の宮地村在月）。勝浦村より田島村へ越える小山。有名なる宗像神社より西南に當り、今ナチゴ山といふ。筑前續風土記に、

昔は勝浦より此處（名兒山）を過ぎ、田島より垂水越をして、内浦を通り蘆屋へ行くを大道としたり。

とある。



近附山兒名　(409)

おほなむぢ　すくなびこなの　かみこそは　なづけそめけめ　なのみを　なごやまとおひて　わが
大汝　小彦名能　神社者　名著始鶏目　名耳乎　名兒山跡負而　吾　963
こひの　ちへのひとへも　なぐさめなくに
戀之　千重之一重裳　奈具佐米七國

【參考】○おほなむぢ　既出（八三二頁）。○すくなびこな　既出（八三二頁）。○かみこそ　「神社」を充てたのは、當時神社の氏もあるから、別に戲書ではなからう。○なづけそめけめ　この山に名兒の名を附け初めたことであつたらう。この句の下に、然るにの語を挿入して聞く。○なのみを　「おひて」に係る。○なごやまとおひて　和の義に取る。○ちへのひとへも　既出（五六五頁）。○なぐさめなくに　「米」原本に未とあるは誤。元本その他によつた。正辭は未の誤として、未にメの音ありと論じたが、迂遠である。

【歌意】大汝少彦名の二神こそは、この山に心の和むといふ名兒の名を付けそめられたことであつたらう。然るに

名　兒　山　(410)　(中央)

おくやまの　おほなむぢ

この山は、そんな結構な名ばかりを負ひ持つて、私の戀心の千分の一も、一向に慰めはせぬのにさ。

評　紀記に據れば、大汝少彦名の二神は相携へて國土を經營し、又稼穡の業を教へられたといふ。隨つて經營功成る毎に、その山川國土に命名されたと想像することも、作者の自由であらう。

「なご」は海邊に於いては風波の平穩を象徴した名稱として、可なり廣區域に亘つて用ゐられてある。然し山の名には珍しい。作者はその自家の境遇から「なご」の名義に一不審を打ち、名のみあつてその實なしと喝破して、暗に名付け親たる大少二神に反問し怨訴してゐる。いかにも女らしい情緒の發露である。

「吾戀」の對象は何か。これに(1)都を戀ふ(2)兄族人を戀ふ(3)夫を戀ふの三つの考方がある。(1)は一般的でふさはず、(2)は兄の許を別れてまだ一日路位に過ぎぬとなると、(3)を取上げて見るより外はあるまい。

郎女が藤原麻呂卿を夫として迎へたのは、前夫宿奈麻呂の逝後暫くしての事であつた。二人の間に女の子までも擧げた程であるが、何かの事情から關係が疎遠になり、郎女は意を決して宰府の兄族人卿の許に走つた。それも一時的興奮の餘で、居常戀々の情に耐へぬものとすれば、愈よ歸京の途に上つては火に油を濺いだやうな形で、その「吾戀」はまことに「千重」なるものがあつたらう。

郎女は名兒のなだら坂を往きながら、山の名に緣して、こんな事を思ひ續けた。途上の口占として、小詩形ながらもかく完璧に仕上げた、その手腕には敬服する。

名草山事にしありけりわが戀の千重の一重もなぐさめなくに　（卷七——一二一三）

は、長短の差こそあれ、この歌と著想も詞形も同じだ。後先何れか。

同、坂上郎女海路見濱貝作歌一首

郎女が海邊の路で濱邊にある貝を見て詠んだ歌との意。これも上京の途上の事である。

わがせこに　こふればくるし　いとまあらば　ひろひてゆかむ　こひわすれがひ
吾背子爾　戀者苦暇　有者　拾而將去　戀忘貝　964

辭　○こふれば　舊訓コフルハ。○ひろひて　古義訓ヒリヒテは古に泥み過ぎた。「拾」原本に捨とあるは誤。元本その他によつた。○こひわすれがひ　戀忘るに忘貝をかけた。○わすれがひ　既出（二四六頁）。

【歌意】　吾背子に戀すれば苦しいことわ。暇があるなら、濱邊で拾つて往かうよ、戀を忘れるといふ名の忘貝をさ。

評　今は征旅の途次、眼前咫尺の地にも逍遙の餘暇がない。「暇あらば」は暇のない反言である。

「戀わすれ貝」の辭樣は、小手先の小技巧で、集中この外四首あり、別に「戀わすれ草」と詠んだのが一首ある。そのうち卷十五の歌は天平八年遣新羅使一行の人の作である。萬葉人も漸うこんな小技巧を悦ぶやうになつて來たことに注意を要する。中にも、

いとまあらば拾ひに行かむ住の江の岸に寄るとふ戀わすれ貝　（卷七——一二四）

はこの歌と全く同規で、形影相伴ふ觀がある。但「戀ふれば」といひ、又「戀わすれ貝」とあり、その他修辭の點に於いて此れは彼れに劣る。

冬十二月、太宰帥大伴卿上京之時、娘子作歌

天平二年冬十二月、旅人卿が上京の時、兒島娘子が詠んだ歌との意。○兒島娘子　左註に遊行女婦とあり、その傳未詳。

凡有者　左毛右毛將爲乎　恐　跡　振痛袖乎　忍而有香聞　965

おほならば　かもかもせむを　かしこみと　ふりたきそでを　しぬびてあるかも

【釋】○おほならば　大凡ならば。尋常ならば。○かもかもせむを　斯も如此もせむをの略。契沖訓による。舊訓サモトモセムヲ。○かしこみと　元本、類聚本の訓による。舊訓カシコシト。○ふりたきそで　卷一「茜さす紫野ゆき」の歌の評語（九四頁）を參照。○しぬびて　この「しぬび」は忍耐の意。

【歌意】大抵ならば、あゝもかうもしませうものを、貴方樣の御身分柄恐れ入つた事として、今のお別に對し、振りたい袖を、振らずに我慢してをりますことかいな。

【評】裝束を脱いで、遊行婦兒島を相手に盃を擧げてゐる時は、その醉泣に手を燒かせる徒の老人に過ぎない。いざとなつて笏を執れば從三位太宰帥大伴旅人卿だ。今や卿は多年の塵懷こゝに啓けて、新大納言としての都還り、晴の征途に上る門出であつた。大少貳や守を始め、府廳國衙の官人は厩走の末に至るまで、その甘棠の德を慕つて、我も〳〵と盛な見送りだ。

水城は府の正西約二十町許の處にある。その關門を出ればもう宰府の人でない。多くの人達は心ゆく限その袖を打振つて、我も〳〵とその惜別の情意を表するのであつた。時にその人達の後ろに、じつと齒を喰ひしばつて涙を呑んでゐる女が一人あつた。それが兒島なのである。

「遊び者の推參は世の常に候ふ」と、不斷は帥殿の官宅に出入して、特別な眷顧を蒙つてゐたとはいへ、矢張險の人である以上は、人目に露はれての袖振も恐こい。すれば出來ぬことはないが、卿の御身分の爲にさし控へて忍ぶのであつた。「振りたき袖を忍びてある」その態度の愼ましさ、及び情理の葛藤から生ずる苦惱が醞釀する悲傷は、頗る同情に値する。「おほならばかもかもせむを」は一旦思索を經ての語だから、情熱の力の隨つて弱いのは止むを得まい。

草まくら旅ゆく君を人目おほみ袖振らずして數多くやしも　（卷十二——3148）

もこの同調である。

大宰帥大伴卿被レ任二大納言一臨レ入レ京之時、府官人等餞二卿筑前國蘆城驛家一歌四首

といふ題詞が卷四にある。それは出發前の餞宴である。

倭道者　雲隱　有雖　然余振袖乎　無禮登母布奈　966

やまとぢは　くもがくれたり　しかれども　わがふるそでを　なめしともふな

【釋】○やまとぢは　既出（一一六五頁）。○しかれども　「ふる袖」に係る。○なめし　無禮。蔑すの形容詞格。

【歌意】貴方の旅立つた倭の方の路は、雲に隱れてゐる。それでも構はず、私の戀しさに振る袖を、失禮なと思

つて下さるな。

評　帥卿訣別後の情景である。

行々又行々、帥卿の影は遠離つてしまつた。その辿られた倭路を望めば、只愁雲が漠々と横たはるのみである。無論見送り人達は疾くの昔に退散して、何時までも自分一人がぼんやりとそこに佇立してゐる。もう誰れに氣兼ねもない、元來が情意表示の爲の袖振も、もうかうなつては對手の居る居ないは問題でなくなる、只抑へ怺えた自己の滿足が買へればよいのである。

これは誰れも居ぬ處で振る袖である。それにさへ帥卿のお咎めを恐れて、「なめしと念ふな」の懇願は、飽くまでも自覺に富んだしほらしい謙虚な心根から出た詞で、實際貰ひ泣がされる。

日蔭者は何時の世でもつらい。殊に門閥が喧ましく、階級制度の嚴乎たる古代の社會狀態を知悉すると、この作の哀婉さが深刻に受け取られて、更に悲痛なものとならう。その誠實さは名家大家の驕婦悍婦よりも遙に尊い遊行婦兒島である。

右、太宰帥大伴卿、兼任大納言一、向レ京上道。此日馬駐二水城一、顧二望府家一。于時送卿府吏之中、有二遊行女婦一、其字曰二兒島一也。於是娘子傷二此易一レ別、嘆二彼難一レ會、拭レ涕自吟二振袖之歌一。

旅人卿が大納言に召し出され、京へと出發した、この日馬を水城に駐め、從來住んでゐた宰府の家を振返つて名殘を惜んだ、その時卿を送る宰府の役人の間に、遊行婦でその名を兒島といふのが混つて居た、この兒島娘子が人間の別れ易く會ひ難いことを悲傷して、涕を拭ひつゝ、以上の袖振の二首の歌を吟つたとの意。○兼任　後任のきまるまで、一時的に太宰帥のまゝで大納言に任じたのだから、兼任と書いた。遷任の誤とする説は非。任大納言は天平二年十月一日。○此日　天平二年十二月某日。○水城　下の「ますらをと」の歌の條を見よ。○府家　宰府の帥の住宅。○遊行女婦　ウカレメ。アソビメ。遊女。卷一「草枕旅ゆく君と」の歌の評語中、遊女の條を參照（二五〇頁）。

大納言大伴卿和歌二首

やまとぢの　きびのこじまを　すぎてゆかば　つくしのこじま　おもほえむかも

日本道乃　吉備乃兒島乎　過而行者　筑紫乃子島　所念香裳　967

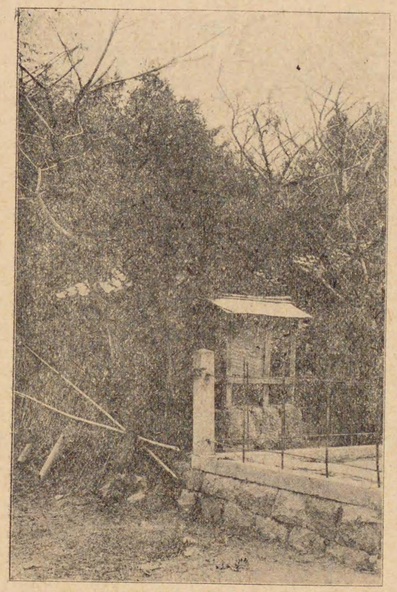
釋　○きびのこじま　「きび」は古へ吉備國といひ、三備及び美作を總稱した。「こじま」は備前國兒島郡兒島、古事記（上）に、生二吉備兒島一、亦名謂二建日方別一と見えて、備前國南部の大島。○つくしのこじま　遊行婦の兒島をさす。「子」は兒に通用。

【歌意】　倭街道の吉備の兒島を、通り過ぎて行かうなら、定めし筑紫の兒島、卽ちお前のことが、思ひ出されようかいなあ、同じ名なので。

評　上の兒島の贈歌を旅人卿は途上で入手したものであらう。これは「倭路は雲隱れたり」の作に唱和したもの

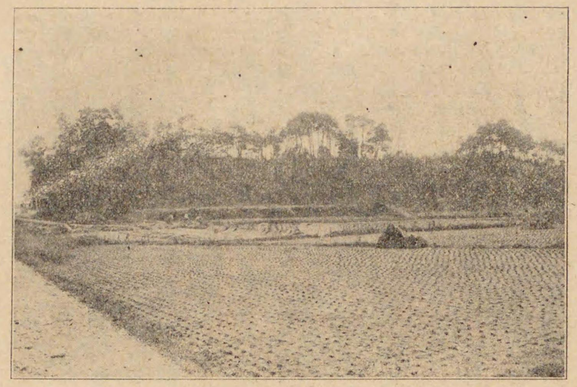
の如くである。吉備の兒島は海路の要津、筑紫の兒島は人中の名姝、相對的の同稱呼でこそあれ、この人と物との間には、從來何の交渉も更にもたなかつた。偶ま作者の纏綿たる離情が楔子となつて、端なくそこに聯繫が生じた。嘱目のもの悉く感傷を催すは旅客の慣ひ、況やこの兒島にあつてかの兒島を懐ふは當然の歸結。極めて平易な口吉ではあるが、輕い戯謔と率直なる眞情とが綯ひ交ぜになつて生動してゐる。

ますらをと　おもへるわれや　みづぐきの　なみだのごはむ
大夫跡　念在吾哉　水莖之　水城之上尓　泣將拭　968



水城關門址　(411)

釋　○ますらを　既出(四〇頁)。○われや「や」は疑辭。○みづぐきの　水城に係る枕詞。ミヅキの類音を疊用した。「みづぐき」は瑞瑞しき莖の意。宣長はいふ、莖といへば木の事にも草の事にもなれり、木の神を久々能知といふにて心得べし、水城と續けたるは、瑞瑞しき莖の瑞木と重ねたるなりと。但瑞木とまではいかゞ。○みづき



水城　(412)

のうへ　水城のほとり。水城は水を湛へた城の意。筑紫郡水城村にある。天智天皇の御代に始めて築造されたもので、天智天皇紀に、三年云々、又於二筑紫一築二大堤一貯レ水、名曰二水城一と見え、又續紀に、天平神護元年二月辛丑云々、太宰少貳從五位下采女朝臣淨庭爲下修二理水城一專知官上と見えた。水城村の國道に當る左傍即ち古への水城東關門にある、水城大堤の碑文によるに、

東堤長さ百七十六間三尺、西堤三百八十四間三尺、最も高き處五間五尺、盤根最も廣き處十九間餘、中央缺堤の所九十六間、東西に關門あり、こゝは即ち東關門の址にして片礎をなす。西は吉松隧道の地なり。

とある。太宰府址からは道が平坦だから、東關門址が遙に望まれる。△地圖　357(一三九八頁)を參照。

【歌意】　ますらをだと自任してゐる自分がさ、この水城のほとりで、お前に別れ兼ねて、女々しく涙を拭はうことかえ。

【評】大伴氏は古來武弁の家で、ますらを中のますらをである。旅人卿も既に再三その武功を樹てゝゐる。「ますらをと思へる」は決して口頭の漫語でない。かく自覺しながらも一倡女兒島との別には、戀々として水城のうへに泣かざるを得ない。英雄も尚兒女の情あるに至つて、親しさも尊さも湧いてくる。旅人卿の作にはすべて矯飾の氣がない。彼れは開放的で正直である。

著想は自己批判に墮する嫌もあるが、自分ながら高まる情趣をもて餘して途方に暮れた、その愚痴が有難い。都府樓を遠景にした水城の關門下に、宰府國衙の官人達が綺羅星の如く左右に居流れた間に、老帥旅人と若い遊行婦兒島との唱和の情景を描いてみると、亦一場の好悲劇を構成する。

「水城のうへ」を、上の左註に馬駐二水城一、顧二望府家一とあるによつて、水城の堤防上とする或説の如きはおよそ愚論である。願望はたゞ願望で、あながち高い場處を必としない。元來が府と關門との間は昔でも野原で、眺望が利いたと思はれる。さればやむごとなき御老體を堤の上まで追ひ上げるにも及ぶまい。

三年辛未、大納言大伴卿在二寧樂家一思二故郷一作歌

神龜三年大納言旅人卿が寧樂の家で、故郷を戀うて詠んだ歌との意。○寧樂家　奈良の佐保の宅をさす。○故郷　(1)飛鳥の故京をさす(古義)。(2)平群の神南備山附近の大伴氏の故居をさす(六人部是香――龍田考)。但神南備と岩瀬杜及び奈良思岡の三者の關係は兩説とも不完である。これに對する私考は、卷八「神名火の磐瀬の杜の時鳥」の條で述べよう。こゝの故郷は必ず飛鳥の神南備を斥したものと思ふ。

しましくも　ゆきてみてしが　かむなびの　ふちはもあせて　せにかなるらむ

須臾去而見牡鹿　神名火乃　淵者毛淺而　瀨二香成良武　969

【釋】○しましくも　京本書入シバラクモ。○かむなびのふち　神南備山下の淵。この神奈備山は飛鳥の雷岳の一稱である。「かみをか」(四四七頁)及び「雷岳」(六三五頁)を參照。○ふちはもあせて　「淵者」の下毛を脱したものとする。舊訓はフチハアサビテとあるが、アサブといふ語の存在はおぼつかない。古義訓アセニテも苦しい。△地圖及寫眞　挿圖105(三三四頁)114(五二三頁)を參照。

【歌意】一寸の間でも往つて見たいな、多分故郷の神南備の淵はまあ淺く變つて、瀨になるであらうかしら。

【評】旅人卿は宰府時代に、頻に飛鳥藤原の故京、吉野の勝を回想してその羈愁を寓せた。(卷三所見)。今年の正月からは再び奈良京の人となり、「ほと〳〵に奈良の京を見ずかなりなむ」の歎息も雲散霧消して、その佐保の第に納まつたが、殊に當時は知太政官事の外大臣なしで、大納言二名が政務を執つてゐた時代だから、樞機多端で、懐かしの故郷飛鳥も徒らに夢想するより外はなかつたらしい。

飛鳥人の遊覽地は飛鳥川が中心であつた。神南備の淵は神南備(雷)の岡脚を繞つて流れる飛鳥川の淵で、河床の岩が小斷崖を成して、上下に淵が出來、その末は復平淺に歸してゐる。山には杉があり、梅があり、山吹が咲き、時鳥が鳴き、川には霧が立ち、蛙が鳴き、千鳥が鳴く。

老人は過去の回想が永い。少壯時に馴染んだ場處は、凡山凡水でも深い執著がある。まして相當の景趣に富んだ神南備の淵をやだ。

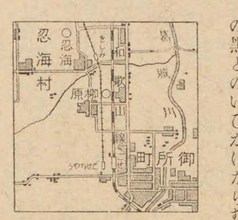
然し飛鳥は故京となつてから玆に三十三年、その荒廢は察するに餘りある。のみならず更に「往きて見てしが」の往訪の念に、拍車を懸けるものがある。それは飛鳥川が地勢上淵瀬の變化が甚しいことで、乃ち「淵はもあせて瀬にかなるらむ」の想像を描くに至つた。而もナリヌラムと普通にいふべき處を、「なるらむ」の現在敍法で、その變化の現實性を示したのは際利い手ぎはである。

改めて更にこの作を見直すと、その眞意は、おのが見ぬ間に飛鳥舊京はいかに變化したかといふにある。それでは抽象的で薩張り面白くないので、その代表的勝地神南備の淵のうへに、一切を寄託した。かくて現實味が強調され、公人の不自由さから愈よ燃え盛る故郷偲の情に、「しましくも往きて見てしが」の希望が切實を極めてくる。

族人卿はかくいひながら、その年の七月に薨逝した。恐らく神南備の淵も訪ふに及ばなかつたらう。氣の毒な事である。又次の歌に連繫させて考へると、この歌は族人病中の作とも見る事が出來る。

さしずみの　くるすのをぬの　はぎがはな　ちらむときにし　ゆきてたむけむ
指進乃　栗柄乃小野之　芽　花　將落時爾之　行而手向六　970

釋 ○さしずみの　栗柄に係る枕詞。刺墨の黑といふを栗にいひかけたもの。刺墨は黥のこと。「指進」は借字。「進」をスミと訓む例が古書にないと古義はいふが、スヽミのスミとなるは音韻上の約束である。前人の說は(1)指墨のくるゝを懸けたるにて、くるゝは墨斗のくるめきをいふならむ（眞淵說）、(2)「指」は摺の誤にて摺墨の黑とのいひかけならむ（橘常樹說）。(3)「乃」は六か武かの誤にてサシスヽムと訓み、スヽムはスサムにて、毬の刺荒む栗と續けたるか（古義說）。(4)卷廿に「むらたまの樞るに釘さし」とあれば、「推進」は村玉の誤寫にて、群玉の轉めく意にて栗にいひ續けたるか（古義一說）。以上のうちでは(1)が優つてゐる。○くるすのをぬ　和名抄に大和國忍海郡栗柄とある。（今南葛城郡忍海村柳原）。又記の雄略天皇御製の「ひき田の若栗柄原」は泊瀨。○はぎがはな「芽」原本に茅とあるは誤。○ちらむ「落」を眞淵は唉の誤として、サカムと訓んだ。○たむけむ「はま松がえの手向草」を見よ（一三九頁）。



（海忍）野栖栗（413）

【歌意】 栗柄野の萩の花の散らう頃にさ、往つてお祭をしよう。

評 栗柄は飛鳥からは一里ばかりの西に當るから、尚故郷といひ得る範圍内であらう。但作者と栗柄野との關係がわからない。「手向けむ」とある以上は、そこに祭られる何者かがなくては協はぬ。大伴氏の祖先又は父母、又は愛妻大伴郎女の墳墓でも、そこにあつたのか。

野に萩の花を聯想する事は當然だが、「散らむ時にし往きて」は妙な注文を付けたものだ。通例なら盛りの時を覗つて往く筈である。この事情を解決するには一つの鍵がある。

それは作者の病中といふ事である。丁度それが萩の花の唉く頃なので、卿の資人金明軍も、

かくのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも（卷三——455）

と病中萩の花の消息を問はれた事を歌つてゐる。秋とはいへ暑い盛りの七月、とても老病の身を起して、栗柄

野に嶺藻の禮を執ることは不可能だ。まあ相當時候もよくならうこの萩の花の散る頃は、自分の病氣も癒らうから思ひ立つてと、卿は樂しい豫望を描いてみたものだ。これを見ても卿はまだ死ぬつもりはなかつたのである。然るにその月の廿五日に、遂に溘焉として隔世の人となつた。

再案、作者の父安麻呂は和銅七年五月に奈良の佐保の第で薨じた。奈良京草創の際とて、從來の慣習のまゝに遠く忍海の栗栖邊へ歸葬したものか。今天平三年は恰も二十年目で、必ず祭典を修すべき祥月のその五月に當つたもの、、生憎病氣の爲、孝子の情を申べる事が出來ぬ焦燥から、かく豫約して、聊か自慰の言としたのではあるまいか。

これは只試にいふのみ。尙前說の如く見ておくが穩かであらう。

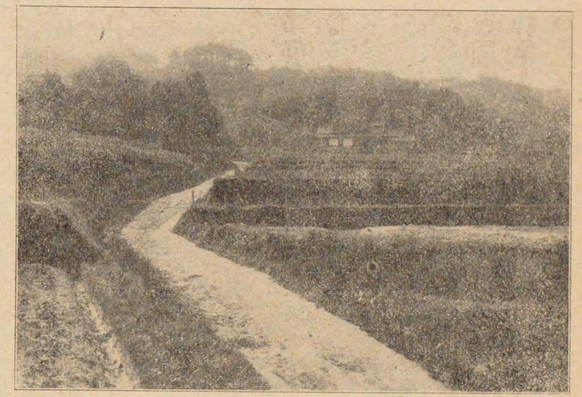
四年壬申、藤原宇合卿遣二西海道一節度使之時、高橋連蟲麻呂作歌一首并短歌

天平四年に藤原宇合卿が西海道の節度使として派遣された時、高橋蟲麻呂が詠んだ歌との意。○宇合卿　傳既出(二五六頁)。○西海道節度使　既出(一三四頁)。○高橋連蟲麻呂　傳未詳。卷三富士山歌(なまよみの)の左註に「高橋連蟲麻呂歌集集出」の語がある。集中常陸下總攝津における作が見え、又大伴旅人と交際があつた。

しらくもの　たつたのやまの　つゆじもに　いろづくときに　うちこえて　たびゆくきみは　いつべを　あかちつかはし　やまひこの　こたへむきはみ　たにぐくの　さわたるきはみ　くにがたを　部乎　班遣之　山彦之　將應極　谷潛乃　狹渡極　國方乎　めしたまひて　ふゆごもり　はるさりゆかば　とぶとりの　はやきまさね　たつたぢの　をかべ　見之賜而　冬木成　春去行者　飛鳥乃　早御來　龍田道之　岳邊　ほへやま　いゆきさくみ　あたまもる　つくしにいたり　やまのそき　ののそきみよと　ともの　のみちに　につつじの　にほはむときの　さくらはな　ひらかむときに　やまたづの　むかへまるで　百隔山　伊去割見　賊守筑紫爾至　山乃曾伎　野之衣寸見世常　伴乃路爾　丹管士乃　將薰時能　櫻花　將開時爾　山多頭能　迎參出　む　きみがきまさば

六　公之來益者

檜　○しらくもの　白雲の發つをいひ係けた、立田山の枕詞。○たつたやま　既出(二八四頁)。○つゆじも　既出(三八八頁)。○いほへやま　五百重山。「隔」は借字。○いゆきさくみ　六言の句。「い」は接頭語。「さくみ」は「いはねさくみて」を見よ(五六七頁)。○あたまもる　冦守る。筑紫には太宰府を置いて邊防を掌り、水城を築き防人をする爲て非常に備へた。卷二十、追痛二防人悲一別之心一歌(家持)に「不知火筑紫の國はあた守るおさへの城ぞと」と見え、宣化天皇紀の詔に、夫筑紫國者遐々之所二朝届一、去來之所二關門一、天武天皇紀の栗隈王の對言に、筑紫國者元戎二邊賊之難一也とある。○つくし　既出(七四二頁)。○やまのそき　「そくへ」を見よ(九三四頁)。○みよと　古義訓メセトは非。○ともの　屬僚をいふ。「とも」は朋輩又は集團の義。「べ」はその部屬者の稱。○あかち　わかつ(分)の古言。古義は、神代紀の廢棄槽の訓秘波鷄都を證としてカを濁るべしと主張したが、



立田の岡の邊の路　(414)

波鵜津はハナツ(放)の意で別語である。且清濁は時代により又慣習によつて異なる。この時代に班田をアガチタと讀むからとて、他の場合をまで同一に律する事は出來ない。舊訓ワカチ。○やまひこ　山彦。山神、山靈の稱。又反響を山靈の應ふるものとして、谺(木靈)を稱する。山響の約とする說は本末顚倒。○たにぐくのさわたる　前出(一四二〇頁)。○くにがた　國形。國の狀況。節度使の職制に地形を案ずることはない。この形は象又狀の意であらう。○めしたまひて　六言の句。宇合卿が見給ひて「めしたまへば」を見よ(二〇六頁)。○ふゆごもり。既出(七八頁)。○はるさりゆけば「はるさりくれば」を見よ(七九頁)。○とぶとりの「早く」に係る序。○はやくきまさね　早くお歸りなされい。略解訓による。「御來」を意訓にかく讀む。古義訓は「御」を卸の誤としてハヤカヘリコネ。○たつたぢのをかべのみち　立田山の峠の道をいふ。「たつたぢ」は立田にある道。

○につつじ　「に」は丹土の色をいふ。赤色。「つつじ」は「いはつつじ」を見よ(四九五頁)。「管士」は借字。○にほはむときの　匂はう時で。「ときの」の詞態は集中の長歌、又は祝詞などに例が多い。○やまたづの「むかへ」の枕詞。既出(三〇六頁)。○きまさば　元本その他の訓による。舊訓キマセバは非。△地圖及寫眞　挿圖329(一一九六頁。90(二八五頁)を參照。

【歌意】 立田山が露霜に色づく頃しも、打越えて旅立たれる貴方は、澤山の山を踏みならして、來寇の敵を守る筑紫に往かれ、そして山の奥野の末をもよく視察せいと、部下の者共を分けて派遣し、谺の應へよう果、蝦蟇の行き渡る果まで、地方の狀態を調査なされて、來春にでもなつたら、早くお歸りなさい。丁度その頃は都入の立田路の岡沿ひの道に、赤い躑躅の匂はう時で、櫻の花が咲くであらう時に、私はお迎に參上致しませう。貴方がお歸りならば。

評 節度使は唐制では諸道に置かれた武官で、各その幕府を樹て、道下を鎭撫し、これを藩鎭と稱した。わが邦のはさほど強力なものではなく、軍團の整理、武事の講習、輜重の充實などの爲め、臨時派遣の高級官吏に過ぎない。

節度使設置は宇合の任ぜられた天平四年が、その最初の試であつた。續紀に、

天平四年八月丁亥(十七日)、正三位藤原朝臣房前爲二東海東山二道節度使一、從三位多治比眞人縣守爲二山陰道節度使一、從三位藤原朝臣宇合爲二西海道節度使一、云々。(卷十一)

と見えた。辭令は八月に降つたが、出發準備や何やで、秋もはや末頃になつて漸う發足した。時はこれ一年の好季節、朝に奈良の帝都を辭して、「白雲の立田の山の露霜に色づく時」に、打越えて旅行くのであつた。山紅葉は一行の旅裝に映じて花やかに、その銀鞍に白馬を打たせた、當年卅九歲の節度使宇合卿の得意の面影が彷

彿する。途中の旅況を「五百重山い往きさくみて」の二句に約めたのは、省筆その宜しきに適つてゐる。

さて筑紫の任處に到著、管内諸國の隅々まで、下僚の判官主典等を分遣して、軍事の整理に著手せしめる。九州二島は本來太宰府の統治する處、多少目的に相違はあるとしても、一面から見れば、節度使の仕事は帥の權限を犯し勝であつたらう。幸にこの前年に帥大伴旅人卿が中央政府に復歸してから、當時は藤原武智麻呂の遙任であつた。そのうへ武智麻呂は宇合の長兄だから文句はない。仕事は遣りよい。

茲に下僚等の復命事をはり、西海一圓の國狀は整頓され始末がつく。つけばその歸還が問題になる。行人に向つてまづ歸期を問ふのは、送別の際の常情である。然るに作者はその程度に滿足せず、今一層突き進んで、此方からその時期に注文を付けていはく「春さりゆかば——早歸り來ね」と。秋から春までは略半年になるが、節度使の仕事は多端で、さうは早く歸れさうもない。ないを承知で無理な要望をする處に、勝へ難い惜別の情味が躍動する。

奈良京から西國への出入は、立田越を以て本道とした。希望が實現して果して宇合が春の歸京となるなら、立田路は勿論櫻鄽躅の花盛りだ。乃ちその好風景を幻想にのぼせて、今度はその春の好季節に「迎へまるでむ」と、懇情の限を傾倒した。

立田山を舞臺として、秋の紅葉に送つたからは、春の櫻鄽躅に又出迎へしようといふ、太だ風雅三昧の言辭のやうで、その實涯りない離恨を湛へてゐる。送別の作として、一種の新樣を裁出したこの作者の手腕には敬服する。また

「山のそき野のそき見よと、伴の部をあかち遣はし」

「山彦のこたへむ極み、谷蟆のさわたる極み、國形をめし賜ひて」

は自他兩樣の行敍が自然對を成してゐて面白い。

反歌一首

ちよろづの　いくさなりとも　ことあげせず　とりてきぬべき　をとこどおもふ

千萬乃　軍奈利友　言擧不爲　取而可來　男常曾念　972

釋 ○いくさ「みいくさ」を見よ（五三三頁）。○ことあげ　言葉に出さず。いひ立てず。卷十三に「蜻島倭の國は神柄と言擧せぬ國然れども吾は言擧す」、神代紀に、遂到二出雲國一乃興言曰、云々。又高言ともある。○とりて　殺して。捕へての意ではない。宣長いふ、記の景行天皇の條に、西方有二熊襲建一、是不レ伏无二禮人一等、故取二其人一等二而遣、また取二伊服岐山之神一幸行矣など、殺すをトルといふ例なりと。○をとこ　古義訓による。契沖訓ヲノコ。

【歌意】 千萬人の軍勢であるとても、物をもいはず、安す〳〵取殺して來さうな男とさ、貴方を私は思ひます。

評 宇合は藤原家の三郎、比較的雄武の材の持主とは思はれるが、百萬の大軍も物もいはずに皆殺しにしてくべき英雄とは、少し諛言に過ぎはしまいか。これでは宇合の方が慙死してしまひさうだ。別に戰場に出陣するでもない節度使に贈る詞としては、又不似合であらう。宇合はその西海行に就いて左の感慨を洩らしてゐる。

奉二西海道節度使一之作

往歲東山役、今年西海行、行人一生裏、幾度倦二邊兵一。（懷風藻）

「東山役」は嘗て神龜二年に蝦夷征伐に出陣したことを斥した。僅一度の出征とこの兵馬統管の出張ぐらゐで、「倦邊兵」は餘り勇氣がなさ過ぎる。支那詩人の口吻を眞似て反戰的の言辭を弄したとも見られるが、奈良時代の上流人士は漸く太平に狃れて、武邊の事を疎んずるやうになつて來たことも、考慮のうちに置くべきであらう。

當人はかく邊兵に倦んでゐるのに、「――とりて來ぬべき男とぞ思ふ」は、聊か滑稽だ。强ひて助けて、激勵の詞として聞くが一番ふさはしからう。聖武天皇もこの意味から、節度使を送る御製に「ますらをのとも」と仰せられた。

然しそんな實際問題から離れて、歌のみを見ると、頗る豪快で氣持がいゝ。或は孟子（公孫丑章）の「雖二千萬人一我往焉」の意を、鹽梅よく點化したのではあるまいか。

右、檢二補任文一、八月十七日任二東山山陰西海節度使一。

續紀の文（評申引用）によると、東海の二字が落ちてゐる。補任文は續紀の補任の條をさしたもの。

天皇賜二酒節度使等一御歌一首并短歌

聖武天皇が酒を節度使等に下されるに就いての御製との意。宇合卿等の節度使として派遣せられた時の事。

をすくにの　とほのみかどに　いましらが　かくまかりなば　たひらけく　われはあそばむ
食國　遠乃御朝庭爾　汝等之　如是退去者　平　久吾者將遊
たうだきて　われはいまさむ　すめらわが　うづのみてもち　かきなでぞ　ねぎたまひ
手抱而　我者將御在　天皇朕　宇頭乃御手以　掻撫曾　禰宜賜
うちなでぞ　ねぎたまふ　かへりこむひ　あひのまむきぞ　このとよみきは
打撫曾　禰宜賜　將還來日　相飲酒曾　此豐酒者

釋　○をすくにの　朕が食國の略。○とほのみかど　既出（七四四頁）。○いましらが　童本の訓による。元本その他の訓はナムヂラガ。○まかりなば　京を本にして地方にゆくを退るといふ。眞淵訓による。○たうだきて　手を拱いて。「た」は手、「うだき」は抱の古言。抱の字イダク、ウダク、ムダクと訓む。靈異記に、抱、于田伎と見えた。古義に、卷十四の「かき武太伎」とあるは、東人の訛語なるべしと。但訓のテウダキテはいかゞ。手の字語の上にある時は多くタと讀む。○すめらわが　契沖訓による。○うづのみて　珍の御手。「うづ」は貴重の意。諸祝詞に、宇頭乃幣帛の語がある。○かきなで――うちなで　「かき」「うち」は接頭語。○ねぎ　犒ふこと。○かへりこむひ　六言の句。略解訓カヘラムヒ。○あひのまむきぞ　「き」は酒。略解訓による。舊訓アヒノマムサケゾ。○とよみき　「とよ」は美稱。「み」は敬稱。

【歌意】　朕が統治する國の遠の朝廷に、お前達がかうして往つてくれたなら、暢ん氣で朕は遊ばう、手を拱いて朕は暮さう。で天皇の朕がこの珍の御手を以て、御前達を撫で〳〵して勞らひ申すわ。お前達が任務を果して

還り來う時、再び一緒に飲まう酒であるぞえ、このよい酒は。

評　天皇は新任の節度使三人を朝に召されて、送別の賜盃があつた。遣唐使の場合と同一の扱で、その使命の重大性が看取される。

令には明かに地方軍事の機構は規定されてあるが、令の制定發布された大寶三年からこの時まで、二十七の星霜を重ねた間に、可成り民心が廢頽し紀綱が紊亂してきたらしい。土著の豪族が漸く跋扈し、人民が疲弊し、國守の威令が十分に行はれないとなつては、更に有力なる望族の高級官吏を派遣し、その手によつて積弊を釐革し、發令當時の精神を復興徹底させるより外はない。

節度使三人、藤原氏では淡海公（不比等）の息四人のうち、房前宇合の二人までがその選に入り、それに多治比氏の縣守を加へた。藤原氏は當時出頭第一の名家、多治比氏は近江朝以來の右族、官は縣守（六十五歳）が從三位中納言、房前（五十二歳）が正三位參議、宇合（三十九歳）が從三位參議であつた。舍人親王（知太政官事）藤原武智麻呂（大納言）二人を除けば、この人達が內閣の中軸を形造つてゐた當時だから、單にこの一點から觀察しても、叡慮が那邊にあるかが拜察されよう。

さればその出發に際しても、特別に優渥な勅詞を賜うたのである。いはく、お前達が赴任する以上は、もはや何の顧慮する處はない、氣樂に遊び兩手を拱いてゐようと、一切の責任をこの人達の雙肩にかづけられた。そこに帝王としての御態度がある。

更に仰せられたお詞が頗る意義深いものである。天皇朕が珍の御手もち、掻撫でぞ勞ぎ給ひ、打撫でぞ勞ぎ給ひ」と、御親ら御自身の上に御動作の上に、敬語をお使ひなされてゐる。天下廣しと雖も、古往今來いかなる主宰者でも、かうした敬語法を用ゐた例を聞かない。これわが國柄の他邦と殊絶してゐる所以で、陛下御自身も祖宗の天位を御繼承なされたものだから、公の立場にある御自身をお眺めなさる時は、かうもいはれるのである。大殿祭（祝詞）の詞にも、「すめらわが珍の御子」の語が見える。太古から傳承し來つた、日本獨特のあやに畏い建國精神が、明白に認められる。

さて大御手を伸べて愛撫しその勞を犒はれると仰せられた。節度使達が遠隔の地に惱風沐雨、王命を體して有終の美を成さうと努力すべき、その勞苦に對する同情仁慈の思召は、「掻撫で」「打撫で」の漸層、「勞ぎ給ひ」の反復によつて、著く強調され、印象深く燒き付けられる。

次に轉一轉して、當面の光景に立返り、お前達が歸洛復命の日、相會して更めてこの豐御酒は再び酌むであらうと、更に將來の歡會を豫約された。君臣一體水魚の如き思召で、藹々たる和氣のうちに、涯ない溫情を垂れ給ふに至つて、その恐れ多さに感激の涙を、節度使達もさぞ揮つたことであつたらう。

口號的小詩篇のうちに、尨大なる內容を包藏し、一擡一縱活殺自在を極めた聖製で、懇戚並び行はれた趣が拜察される。天皇この時三十二歳の御壯年に渡らせられながら、かくの如く帝王の器度を備へられたことは、畏しと申すにも餘ある。

後段「掻き撫でぞ」「打ち撫でぞ」の重疊反復、その音數が特に異樣で、5、5、5の對句を成し、更にそれを6、7の音數で承けた破調で、短句長句互に相逐ふの手法は、面白い節奏を演出してゐる。

反歌一首

をすくにの

ますらをの　ゆくとふみちぞ　おほろかに　おもひてゆくな　ますらをのとも

丈夫之　去跡云道曾　凡可爾　念而行勿　丈夫之伴　974

釋 ○ゆくとふ　ユクチフの訓もある。○おほろかに　大凡にといふに同じい。おほらかにはこの轉語であらう。「おほに」を見よ（五九三頁）。

【歌意】 丈夫たる者が往くといふ、この度の道であるぞ。いゝ加減に思つて往くなよ、丈夫の輩よ。

評 節度使の職は丈夫にして初めて勤まる大任、それも油斷があつては成果を得難い。汝等は丈夫であるが故にその任にあるが、よくそこは注意してゆけと、論理的に噛んで含めるやうに、責任の重大性を指示せられた。「おほろかに思ひて行くな」が主眼である。

一氣高く盤旋して語々逸拔豪健、おのづから尋常歌人の口吻でない。御製はこの外に、

空みつ大和の國は神からしたふとかるらしこの舞見れば　（續紀、天平十五年夏五月の條）

あまつ神みまの命の取り持ちてこの豐御酒をいみ奉る
八隅ししわご大君は平らけく長くいまして豐御酒まつる

など、何れも堂々たる雄風四邊を拂ひ、おのづから帝王の御屬吐である。

右御歌者、或云、太上天皇御製也。

○太上天皇　元正天皇を申す。御歌の風格から申せば、無論本文の如く聖武天皇の御製であらう。

中納言安倍廣庭卿歌一首

○安倍廣庭　傳既出（七四〇頁）。○中納言　既出（七四〇頁）。

かくしつつ　あらくをよみぞ　たまきはる　みじかきいのちを　ながくほりする

如是爲管　在久乎好叙　靈　剋短　命　乎　長欲爲流　975

釋 ○あらくをよみ　あることがまあよさにと。「あらく」はあるの延言。○たまきはる　命の枕詞。既出（三六頁）。

【歌意】 かうしつつある事がまあよさにさ、人間の短い命を、長くありたいと望むわい。

評 「かくしつつ」は何を斥したか判然しない。當面の事相がその說明を與へぬ限り、この歌の感興の握みやうがない。がとにかく現世の人慾に飽滿すると、次に不老長生を希ふが人情の常である。

但聖天子の御代に逢うた喜を表したのだらうといふのが、古人の說である。

五年癸酉、超二草香山一時、神社忌寸老麻呂作歌二首

天平五年に、草香山を超える時、神社老麻呂が詠んだ歌との意。○草香山　生駒山を河内にていふ稱。生駒山の西麓に今日下村がある。神武天皇紀に、「遡流而上、徑至二河内國草香邑青雲白肩津一」とある。孔舍衞坂は生駒山北路の峠。草香の直越（暗峠）、はその南路の峠、草香江はその低地の入江であつた。尙「いこま山」を見よ（一八二九頁）。○神社忌寸老麻呂　傳未詳。神社は氏。孝德天皇紀に神社福草、續紀に神社忌寸河内の名があ

る。神社はカミコソと訓む。天武天皇紀に社戸を古曾倍と訓み、神名帳(式)に近江國淺井郡に上許曾神社がある。社をコソと訓むは乞の意で、神社は人の乞ひ祈む故である。古義に社は杜の字ならむとあるは、却て不穿鑿である。○忌寸　は姓。△地圖　挿圖 91（二八六頁）を參照。

なにはがた　しほひのなごり　よくみてむ　いへなるいもが　まちとはむため
難波方　潮干乃奈凝　委曲見　在家妹之　待將問　多米　976

【釋】○なにはがた　既出（一一三八頁）。「方」は借字。○なごり　既出（一一三八頁）。尙この語義に就いては諸說續出して煩しい。○よくみてむ　古義訓による。「委曲」はヨクと訓む。卷十「君が姿を曲不見而」の曲も同じい。△地圖　挿圖 97（二三七頁）參照。

【歌意】難波潟の潮干の餘波を、とくと見ようわ、家にゐる妻が自分の歸を待ち受けて、難波の景色を、尋ね問ふであらう爲にさ。

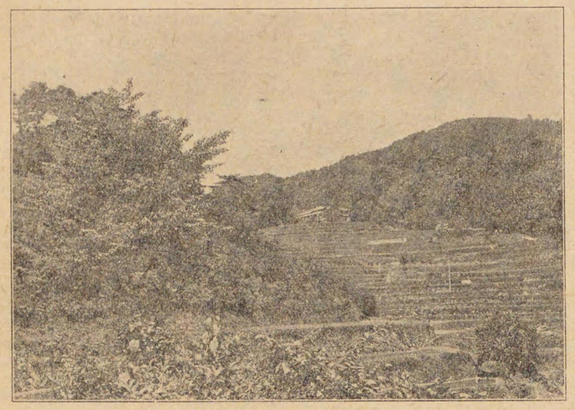
【評】難波潟の景色は平安期になつても「心あらむ人に見せばや」(能因)と歌はれた程よかつた。それが潮干となると又面目が變つて、鹵斥と水との交錯は、所在に洲濱模樣を現じ、鷺鶴は白を飛ばして蘆叢に下り、棚無舟は黑を點じて泥沙に膠し、漁網日に光つて近く盛舍の軒に懸かり、貝掘る子は遠く白洲に霞んでゐる。すべて和やかな好風光は、「潮干のなごり飽くまでに」(卷四)と、大伴宿奈麻呂も難波で歌つてゐる。「よく見てむ」は作者が既にこの風景に陶醉してゐることが看取される。されば家妻にもせめて語つて聞かせたくもなるので、その情意が「妹が待ち問はむ爲」と、本末を顚倒して表現された。蓋し夫に對して外出中の出來事を問ふのは、留守居する妻の常情で、

玉津島よく見ていませ青によし平城なる人の待ち問はばいかに（卷七——1215）

も只自他の立場が相違したまでゞ、この歌とその落想を同じうし、その濃厚なる人情味が嬉しい。

ただこえの　このみちにして　おしてるや
直超乃　此徑爾師豆　押照哉　977
なにはのうみと　なづけけらしも
難波乃海跡　名附家良思裳

【釋】○ただこえのこのみち　草香の直越の路。生駒山の暗峠の道をいふ。直越は一直線に越えるの意。古事記にも日下直超道の稱が見える。宣長いふ、大和の平群より伊駒山の內南の方を超えて河內國に至り、若江郡を經て難波に下る道にして、今暗峠といふ。日下村はこの道よりは北方なれども、古へはこのあたりをも日下といへりけむと。○おし



(415)　日下の直越（暗峠）

てるや「おしてる」は難波の枕詞。既出（九八五頁）。「や」は間投の歎辭。

【歌意】外ならぬ日下のこの直越の路でもつて、古人が押照る難波の海と、名を付けたことであつたらうなあ。

評　生駒山を越えるに、直越路を河内方へおりると、忽ち眼界が豁然として開け、一望鏡の如く照り渡つた難波の海の全景が雙眸のもとに收まり、始めて「押照る」の語が虚稱でないことを發見し、そこで古人も多分、この路でもつて難波の海を押照ると形容し始めたらしいの一案を創造した。いかにも強くその押照る光景が作者の眼底に燒き付いたことであつたらう。

上の歌は峠から見おろした趣でないから難波潟附近の作、これは峠路での作である。同じ道中での吟詠なので、一つ題下に攝したが、順序は前後してゐる。

山上臣憶良沈痾之時歌一首

○沈痾之時　卷五に憶良の沈痾自哀文がある。又老身重病經レ年辛苦云々の歌が七首あり、その左註に「天平五年六月丙甲朔三日戊戌作」とある。この歌はその以後の作である。○憶良　傳既出（二三四頁）。

をとこやも　むなしかるべき　よろづよに　かたりつぐべき　なはたてずして

士也母　空應有　萬代爾　語續可　名者不立之而　978

釋　○をとこやも　「や」は反動辭。「も」は歎辭。攷及び古義の訓による。舊訓ヲノコ。○むなしかる　何も爲出でぬをいふ。死するの意ではない。○なは　名をばの意。○たてずして　古葉神本の訓による。舊訓タヽズシテは非。

【歌意】男兒たる者が、ボンヤリとあるべき事かい。萬世の後まで語り傳へるほどの名をば、世に樹てないでさ。

評　過去の回顧は死に近い病間に於いて殊に甚しからう。この世に印して來た足跡をつぶさに檢討し、その功過を清算してみると、或者は後悔し、或者は殘念がり、或者は十も一もなく、或者は零でもあらう。宗教はそこに刹那の滿足を敎へ、更に永遠の正覺に導く。

沈痾自哀文によると、憶良は正直者で、日夜神佛を深く崇敬したとある。彼れは信行二つは正しく守つたらうが、覺地には到達し得なかつた。自哀文は畢竟昧者の愚痴である。然しそれでこそ、憶良の僞らざる人間性が、炳乎として著く我等の眼に映じて面白いのである。

卷五所載の諸作は憶良の全人格を表現し露出してゐる。漢學者で文章家で歌人で、憂國慨世の志に篤く、道德觀念に富み、神佛の信仰家で、子煩惱家で、勤懇な地方官で、起居不自由な病人で、老來なほ仕進の志があつた。これがその大概である。

處がこの一吟に逢著して、その意外に驚いた。抑も彼れの何處にかゝる雄志を包藏して居たのか。左註によると、藤原八束（房前の三男、當時十九歲）が河邊東人をその病氣見舞の代理として遣つた時に、涕を拭うてこの歌を口吟したとある。

嗚呼彼れも亦一箇の有髯男兒であつた。志は大いに才もあつたが、仕進に必要な門閥がなく、且一生世故の

桎梏に繋累されて頽齡に及んでしまつた。不本意千萬である。嘗て筑紫にゐて、帥旅人卿が歸京の際、「奈良の都にめさげ給はね」とその推輓を乞うたが、間もなく卿の薨去にあひ、自らも筑前守の任果てゝ歸京はしたものゝ、賴む樹蔭に雨が洩つた。乃ち卿の知人藤原房前の子八束等の學問の師で、纔に餘命を過して居たらしい。實に失意の境遇にあつた。

この歌や氣魄雄偉にして而も悲壯、信に懦夫をして起たしむる概がある。失意と瀕死の病苦との板挟みに喘ぎながら、壯來の雄志なほ消磨し盡きず、一道の豪氣四邊を壓倒してゐる。憶良はかく歌つてその年に卒した。享年七十有四(?)。

憶良は漢學者の建前として大いに濟世の志を抱き、功名富貴手に唾して取るべしと思つたこともあらう。功利は儒教の本旨ではないが、支那人本來の思想は功利主義で固まつてゐた。されば

功成名立而利附焉。（史記、范雎傳）

功名有下著二於當世一者上。（同、張耆傳）

垂二功名於竹帛一。（後漢書、鄧禹傳）

立レ身行レ道揚二名於後世一以顯二父母一孝之終也。（孝經、開宗明義章）

功成名遂身退天之道。（老子、第九章）

など見えてゐる。西晉以來その反動思想が勃興して來たが、多くは不成功者の矯語か、或は成功者の人前を糊塗する煙幕に過ぎない。されば憶良がその學問上から薰染されて、功名に對して特に強い執著をもつに至つた事は、當然であらうと思ふ。

卷十九、家持の慕レ振二勇士之名一歌に、

（上略）ますらをや空しかるべき、梓弓末振り起し、投矢もち千尋射わたし、劍太刀腰にとり佩き、足引の八つ峯踏み越え、さしまくる情さやらず、後の世の語り繼ぐべく名を立つべしも。（―4165）

ますらをは名をし立つべし後の世の聞く繼ぐ人も語り繼ぐかね（――4166）

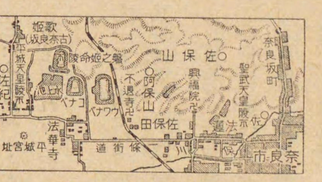
と見え、その左註に「右二首、追二和山上憶良臣作歌一」とある。文武その揆を殊にするが、功名を懷ふことは一つである。如何にこの歌が當時の人士に深い感銘を與へたかが窺はれよう。

憶良よ、君はその生前に於いて失望し又歎息した。而もそれは無用の焦燥に過ぎなかつた。君は事志と違ふといふかは知らぬが、君がわが萬葉歌人として占めた地位は實に最高至上のもので、その大名は萬世のもとに語り繼がれる。乞ふ安んじて瞑せよである。

右一首、山上憶良臣沈痾之時、藤原朝臣八束、使二河邊朝臣東人一、令レ問二所レ疾之狀一。於是、憶良臣報語既畢、有レ頃、拭レ涙悲嘆口吟此歌一。

憶良の病中に、藤原八束が自分の代理として、河邊東人を遣つて病氣見舞をさせた、そこで憶良がその返事の口狀を述べ了つて、暫時して涙を拭きつゝ咲いて、この歌を口ずさんだとの意。○有頃　「頃」原本に須とあるは誤。○藤原朝臣八束　既出（九〇四頁）。○河邊朝臣東人　續紀に、神護景雲元年正月從六位上より從五位下、寶龜元年十月石見守とある。

大伴坂上郎女與姪家持從佐保還歸西宅歌一首



近附保佐　(416)

坂上郎女が甥の家持が佐保の家から西の宅に歸る時に遣つた歌との意。○姪　玉篇に昆弟子之稱と見え、男女に通じて用ゐる。又區別していふと甥はヲヒ、姪はメヒ。○西宅　佐保の本邸から西方に當る大伴家の別宅。○坂上郎女　既出（八六七頁）。○家持　既出（九〇〇頁）。

わがせこが　けるきぬうすし　さほかぜは　いたくなふきそ　いへに
吾背子我　著　衣　薄　佐保風者　疾　莫　吹　及家　979
いたるまで
左　右

釋　○ける　著たるの古言。「けせる」を見よ（一一一〇頁）。○さほかぜ　佐保の地に吹く風。「あすか風」を見よ。（二〇一頁）。○さほ　既出（七三頁）。

【歌意】　あの人が著てゐる衣が薄いわ。こゝの佐保風は餘り強く吹くなよ、大事なあの人が、その西の宅に往き著くまでは。

評　兄旅人卿逝後は、郎女がその娘大孃達と共に佐保の本邸（今の興福院附近か）に起居し、旅人卿の息家持は却てその西宅に住んでゐた。西宅も尚佐保の内であることは、地名を別に冠してないのでも想定される。宮城の東方四五坊の地に當る處は今も佐保の稱がある。その邊に大伴氏の西宅があり、宮仕の都合か何かで家持は移居してゐたのであらう。西宅との距離は約十町位かと想像される。

衣の薄きをいひ、風の寒きをいふ、時季は必ず暮秋から冬である。佐保の岡陵下の風は勿論大したものではあるまいが、枯林を振ふ長風は、やはり人の衣袂の薄きを覺えしめるに十分だ。歌には時刻が點出してないが、まづ夕暮頃から夜分へかけての事であらう、さもなくば朝だ。もし朝とすれば、郎女の娘坂上大孃と家持との關係が想及され、或はその後朝に、母郎女が娘の代作して贈つたものと見られぬこともない。然し今は題詞のままに素直に受け取つておく。

郎女は家持の辭しゆく後影を見送り、その無心なる風に向つて、「いたくな吹きそ」と挌目がちな命令、「家に至るまで」と最小限度の要求をした。多少でも可愛い甥子に辛い目をさせまいの濃到親切なる情味は、すべての理路に超越してゐる。「ける衣薄し」の印象がこの情味の由つておこる根本で、かうした細瓔な點に氣の付くのは流石に婦人である。家持はいゝ叔母さんを持つたものだ。然しその大孃との關係に至つては、又こはい叔母さんでもあつたらしい。

安倍朝臣蟲麻呂月歌一首

○安倍朝臣蟲麻呂　既出（一二八五頁）。

あまごもり　みかさのやまを　たかみかも　つきのいでこぬ　よはくだちつつ
雨　隱　三笠乃山乎　高御香裳　月乃不出來　夜者更降管
わがせこが　あまごもり

釋 ○あまごもり　「みかさ」に係る枕詞。雨に隠る笠と續く。○みかさのやま　「みかさやま」を見よ（六二一頁）。○たかみかも　既出（一七二頁）。○よはくだちつつ　夜の更けゆくをいふ。卷十九に「夜くだち」ともある。「くだち」は前出（一四八八頁）。「更降」は更の闇くる意。舊訓フケニツツは非。△地圖及寫眞　挿圖170（六一七頁）169（六一五頁）參照。

【歌意】 三笠の山が高いせるかまあ、月が一向出て來ないわ。夜は更けに更けてさ。

評 遲く出る月を待遠に思つて、「山高みかも」の一不審を投げた。月待つ歌に「雨ごもり」の枕詞は聯想上妙でない。又構想は次の坂上郎女の歌も、間人大浦の初月歌（卷三）も、沙彌女王の歌（卷九）も皆同じである。暗合か踏襲かは知らぬが、かう類想の多いことも、その優絶した作でないことを證する。但大浦の歌「棕橋の山を高みか」（七二三頁）には、多少の姿致とそれに就いての注脚がある。參照されたい。

大伴坂上郎女月歌三首

かりたかの　たかまとやまを　たかみかも　いでくるつきの　おそくてるらむ

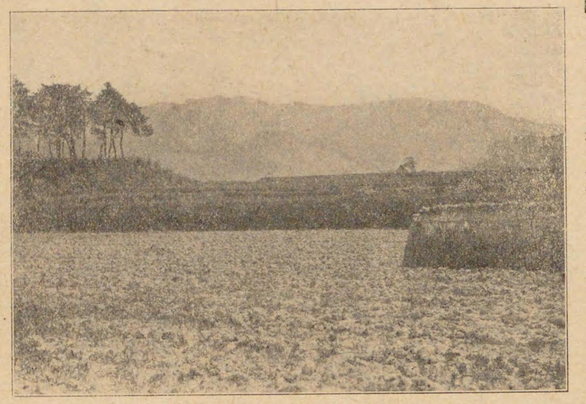
獵高乃　高圓山乎　高彌鴨　出來月乃　遲將光　981

釋 ○かりたかの　「獵高」は地名。高圓山西麓の臺地の稱。獵高の野といふ。卷七に「借高の野邊さへ清く照る月夜かも」とある。こゝは高圓山に係る序詞の如くに用ゐた。○たかまとやま　既出（六一六頁）。○いでくる　古義訓イデコムは非。△地圖及寫眞　挿圖170（六一七頁）169（六一四頁）參照。

【歌意】 獵高の高圓山の高いせるかまあ、出て來る月が、かうも遲くさすのであらう。

評 これも月を待つ意である。評は上の歌の條に盡きてゐる。蟲麻呂と郎女とは、卷四「戀ひ〳〵てあひたるものを」の歌の左註によると、頗る親昵の關係であつたさうだが、何もおなじやうな歌まで詠むにも及ぶまいに。然しこの歌は別に高の語を三疊した小技巧がある。

尙「古郷の飛鳥はあれど」（一七四四頁）及び「ますらをが高圓山にせめたれば」（一八〇〇頁）の條下を參照。



獵高の野（後景ハ高圓山）　(417)

ぬばたまの　よぎりのたちて　おほほしく　烏玉乃　夜霧立而　不清　982

てれるつくよの　みればかなしさ　照有月夜乃　見者悲沙

釋 ○ぬばたまの　夜の枕詞。既出（三〇四頁）。○おほほしく　既出（四八五頁）。「不清」を意訓にかく訓む。不明（卷十）をも訓んである。○みればかなしさ　「月夜の」は「見れば」を隔て、「悲しさ」に續く。この「さ」を古義に、高さ廣さの名詞格なると同じやうに解したのは誤。誤字説も多少あるが採らぬ。○かなし

(1)悲し、(2)面白い、(3)愛するの三意がある。この歌では(1)の意。「まかなしみ」を參照(一一三七頁)。

【歌意】夜霧が立つて、ぼんやりと照つてゐる月夜が、見ると、ほんに悲しいことさ。

評　月はその光色の關係から、悲哀の感じを催し勝ちのもの、まして時が蒼茫たる夜の靜寂であり、而も或は悲涼或は凄其なる聯想を伴ふところの煙霧に包まれて朦朧たる光景に對しては、一段の哀愁を加へざるを得まい。さればこの歌は當然な感想を當然に述べたまでで、何の奇もない。が月に悲しと道破したことは、歌ではこれが抑もであらう。詩には例が多い。

「かなしさ」を面白しの意としても通ずるが、上の「おほほしく」が憂欝の意をもつから、悲しの意とする方が自然でふさはしい。

やまのはの　ささらえをとこ　あまのはら　とわたるひかり　みらくしよしも

山葉左左良榎壯子天原戸度光見良久之好藻　983

訓　○やまのは　山の端。「葉」は借字。○ささらえをとこ　細ら愛男。月の異名。「ささ」は物の細やかなるをいひ、「ら」は接尾語。「え」は美しく愛しきをいふ。記(上)に「あなにやし愛袁登古を」とある。尚「ささらの小野」を見よ(九三六頁)。○あまのはら　既出(四二二頁)。○あまのはらとわたる　二説ある。(1)天の岩屋戸の前を渡る(古義)。(2)天の川門を渡る(新考)である。按ずるに(1)はやゝ牽強の感がある。(2)は更に迂遠で、古今集(秋)に「秋風に聲をほ(帆)にあげてくる舟は天の門渡る雁にぞありける」とあるが、それは天の川門と解すべき前提があり。又同集(雜)「わが上に露ぞおくなる天の川門渡る舟の擢の雫か」は明かに天の川と斷つてある。案ずるに「戸」を佐の誤として、サワタルとすれば意は頗る明瞭だと思ふ。○よしも　「よし」は宜しで、結構の意。「も」は歎辭。

【歌意】山の端から出るさゝらえ男(月)が、大空を經わたる光を見ることがさ、嬉しいな。

評　すべて崇高な感じを出すに骨折つてゐる。「天の原さ渡る光」といひ、又月に「さゝらえ男」の異名を用ゐた。この半人半神の活喩も適實で面白い。往時美貌を形容するに、光る、耀くの語がある。「さ渡る光」の光は「ささらえ男」の美しい影である。隨つて山の端から天の原を經渡るまで、見ても見飽かぬので、「見らくよしも」が旨く落著する。さもなければこの結句は、平凡な報告に終つてしまふ。

右一首歌、或云、月別名曰佐散良衣壯子也。緣此辭作此歌。

或人がいふには、月の異名を「サゝラエヲトコ」といふので、その辭を使つてこの歌は詠んだのだとの意。

豐前國娘子月歌一首　娘子字曰大宅、姓氏未詳也。

○豐前國娘子　註に名を大宅といふと見え、卷四に豐前國娘子大宅女歌とある。同人であらう。傳既出(一三一三頁)。

くもがくり　ゆくへをなみと　わがこふる　つきをやきみも　みまくほりする

雲　隱　去方乎無跡　吾　戀　月哉君毛　欲見爲流　984

【釋】○ゆくへをなみと　行方がまあわからなさによつて。「と」の辭輕く聞く。○きみも　「毛」原本に之とある。これはキミガと訓まれるが、一首の意が分明を缺く。新考に毛の誤と見たのは甚だよい。

【歌意】雲に隱れてその行方がわからなさに、私が戀うてゐる月を、あの方も同じやうに、見たくお思ひかしら。

【評】郎を懷うて月に對する時、端なく月の雲隱れにあひ、懇にこの際における郎君の擧措と心情とを想像し思惟してみた。一輪の月は兩地の情を繫ぐ、銷魂の極である。但表現がやゝ散漫。

湯原王月歌二首

あめにます　つくよみをとこ　まひはせむ　こよひのながさ　いほよつぎこそ

天爾座　月讀壯子　幣者將爲　今夜乃長者　五百夜繼許曾　985

【釋】○あめにます　天上に座す。○つくよみをとこ　月夜見男。月の異名。また月人男ともいふ。「つくよ」は月のこと。「み」はビ（靈）の轉語で尊稱。記（上）に、次洗二左御目一時、所レ成神名月讀命、神代紀に、次に生二月神一。一書に月弓尊、月夜見尊、月讀尊とある。「讀」は借字。○まひ　前出（一六〇一頁）。○いほよ　「いほ」は五百の意であるが、多數の義とする。○つぎこそ　續けてくれい。「こそ」は願望辭。

【歌意】天上に居らつしやる月讀男よ、お禮物を差上げませう。どうぞ今夜の長さは、五百夜の長さに續けて下さい。

【評】單なる天象語の月とのみでは「まひはせむ」が親密でないので、月讀男の人格的名稱を用ゐた。若ければ道ゆき知らじまひはせむ下部の使負ひてとほらせ（卷五、山上憶良——905）も似た著想である。すべて神祭の幣物は神意を慰め奉るにある。代償の應報を餘り強要すると、交換行爲に似た結果になるが、歌ではその代償が物質的でないから、却て興味三昧の快語となる。主としては明月の夜を長かれと要求したもので、稍浮誇に流れた氣味はないでもない。

あすのよひ照らむ月夜は片寄りにこよひに寄りて夜長からなむ（卷七——1072）はこの亞流である。

はしきやし　まぢかきさとの　きみこむと　おほのびにかも　つきのてりたる

愛也思　不遠里乃　君來跡　大能備爾鴨　月之照有　986

【釋】○はしきやし　既出（五一八頁）。この句「君」に係る。○まぢかき　「不遠」を意訓に讀む。○きみこむと　君來むとて。略解訓による。宣長はこの三四句に誤字說を提出したが、皆當らぬ。○おほのび　大野邊。「び」は「はまび」を見よ（一〇〇一頁）。尙「はるののに」を參照（一四八二頁）。○てりたる　舊訓テラセル。

【歌意】遠くもない處に居る、愛する貴方が來うといふので、この大野の邊に、月が照つたことかまあ。

評　王はその邸宅續きの野原に、皎々と照つた明月に對し、ま近き里の親友を憶ひ、その來遊を希ふのであつた。然し王の狹獪なる、自身をその圈外に置いて、すべてを月と親友との交涉に寄託し、月は意有つて君が來路を照してゐると報告した。この報告に接した親友は、來ねば月に辜負する浪風流の譏を負ふ、否でも應でも出て來ねばならぬとなる。面白い陷穽だ。巧語言と評しておかう。

藤原八束朝臣月歌一首

○藤原八束朝臣　傳既出（九〇四頁）。

まちかてに　わがするつきは　いもがきる　みかさのやまに　こもりたりけり
待難爾　余爲月者　妹之著　三笠山爾　隱而有來　987

釋　○まちかてにわがする　わが待ちかてにするの顚倒。○いもがきる　「みかさ」に係る序詞。「きる」を古義訓にケルとあるは非。尙「けせる」を見よ（一一一〇頁）。○みかさのやま　「みかさやま」を見よ（六二一頁）。

【歌意】　私が待ちかねてゐる月は、あの三笠山に、何時までも、かけ籠つてゐることよ。

評　上代の婦人も、笠を冠つて歩いたと見える。さて「妹が著る」の修飾も、この歌の平淺を蔽ふに足らない。

市原王宴禱父安貴王歌一首

市原王が宴を開いて父の安貴王の壽を祝はれた歌との意。○市原王　傳既出（九二〇頁）。○安貴王　傳既出（七四七頁）。△挿圖　275（九二〇頁）を參照。

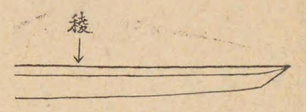
はるぐさは　のちはうつろふ　いはほなす　ときはにいませ　たふときわがきみ
春草者　後波落易　巖　成　常磐爾座　貴吾君　988

釋　○はるぐさは　契沖いふ、「草」は花の誤かと。○うつろふ　「落易」　は略解にかく訓んだのか比較的よい。易は音エキ、變るの意を採る。舊訓カレヤスシ、契沖及び古義訓チリヤスシ。○いはほなす　「巖」原本に嚴とあるは誤。西本その他によつた。○ときは　「ときはなす」を見よ（七五〇頁）。

【歌意】　春草は美しくめでたいが、後には枯れ衰へる。それよりも巖のやうに、常磐にあらつしやいませよ、わが父君は。

評　「弱草の夫」と呼び、「春草のいや珍しきわが大君」と愛ではやすのが常習的の時代だ。されば一旦は春草の瑞々しさを以て父君に擬へて、奉壽の語とすべく思つたが、待て暫しよく思へば「後は移ろふ」で、秋になれば忽ち凋萎するのであつた。そこで極めて凡常で舊套には墮するものゝ、完全に常磐である巖石を引いて、父君の萬歲を切願した。孝子の心情がそこに脈動する。春草との對照が腐を化して新とした。時は恰も若草の萌え盛る遲春の頃であつたらう。

湯原王打酒歌一首



太刀の稜　(418)

○打酒　酒を行ふをいふ。即ち酒宴である。打はその事をなす意で、打飯打漁とも熟する。「打」を宣長は祈の誤とし、古義所引の嚴水說は、折の誤にて酒を釀す意としたが、何れも非。サカホガヒは酒壽ギの延言。酒を進むるに壽ぐをいふ。

やきだちの　かどうちはなち　ますらをが　ほぐとよみきに　われゑひに
燒刀之　加度打放　大夫之　禱豐御酒爾　吾醉爾　989
けり
家里

【釋】○やきだちの　既出（一二六二頁）。○かどうちはなち　刀を拔いて鎬を露はすをいふか。「かど」は刀の稜で、ムネ（背）通りの稜線の稱。この句「ほぐ」に係る。舊訓ウチハナツは三句の「ますらを」に係るので、意がたじろぐ。宣長訓による。○ほぐ　眞淵訓による。類本等の訓ノム、西本等の訓ネグ。「禱」原本に擣とあるは誤。

【歌意】丈夫が太刀の稜を拔き放つて言壽ぐ、その結構なお酒に、私は醉つてしまうたわい。

【評】酒壽ひは古へ廣い意味では興宴の稱となつてゐた。されば漢語の「打酒」の字面を充てもしたのである。抑も酒の釀造はむづかしいもので、その成否は神業と考へられ、精進潔齋、酒神にその丹誠を抽でたものである。造酒司で祀る神六座、そのうち四座は竈神で、酒を釀すに竈を祀り、又井を祀る。隨つて釀した酒甕の口を始めて切る時、その釀成の功をこれらの神々に感謝する爲の信仰的儀禮、或は咒術の類の行爲があつたと考へられる。

吉野の國主ども――吉野の白檮上に横臼を作りて、その横臼に大御酒を釀みて、その大御酒を獻る時に、口鼓を擊ち伎をなして歌ひけらく。（記中、應神天皇の條）

と見え、玆には「燒太刀の稜うち放ち――壽ぐ」とある。殊に劍太刀は神靈の憑る器で、不淨の邪氣を拂ふ功力あるものと信ぜられてゐた。さてかく壽ぎ終へた後、その酒を酌み交して宴するのであつた。

この「ますらを」は酒造の當事者か、或は宴席の主事者であらう。それらが太刀拔き放つて祝言したこの豐御酒と讃め稱へ、杯を擧げて赤土の秀に聞し召した湯原王は、その歡に禁へぬ餘り、この一作を物した。

應神天皇は百濟人須々許理の釀した大御酒にうらげて、

須々許理が釀みし御酒に、われ醉ひにけり。事なぐし笑ぐしに、われ醉ひにけり。（記中）

とお歌ひ遊ばされた。著想はその踏襲のやうであるが、これは更に空を斬る劍氣が横逸して、胸中の洒落と相俟つて、いとも豪快の調を成した。高品の人、その風格もおのづから高邁である。この外王の作は戀歌を除いては、總體に調子が高い。竹園中の作家である。

紀朝臣鹿人跡見茂岡松樹歌一首

○跡見「跡見庄」を見よ（一三三二頁）。この跡見を大和礒城郡の外山村に當てる說は取らぬ。○茂岡　樹木の茂つた岡のこと。○紀朝臣鹿人　續紀に、天平十九年九月正六位上から外從五位下、同十二月主殿頭、同十二年十

一月外從五位上、同十三年八月大炊頭とある。△地圖及寫眞　挿圖 350（一三三四頁）351（一三三五頁）を參照。

しげをかに　かむさびたちて　さかえたる　ちよまつのきの　としのしらなく
茂岡神佐備立而榮有千代松樹乃歳之不知久　990

釋 ○かむさび「かむさびせすと」を見よ（一五三頁）。○ちよまつのき　千代待つに松をいひかけた。○しらなく　既出（四四五頁）。

【歌意】 この茂岡に物舊りて生ひ立つて、そして榮えてゐる、千年を待つといふ名の松が、幾年經たかもわからぬことよ。

評 纖弱な調で甚だ面白くない。「千代まつの木」の洒落もその當時には出榮えもしたらうが、鼻に著いて感心しない。

同鹿人至泊瀬河邊作歌

○泊瀬河「はつせのかは」を見よ（二七二頁）。

いははしり　たぎちながるる　はつせがは　たゆることなく　またもきてみむ
石走多藝千流留泊瀬河絶事無亦毛來而將見　991

初瀬川上游　(419)

釋 ○いははしり――はつせがは　上句は序詞。京本訓による。類本神本などの訓はイシハシリ。△地圖　挿圖 61（一七六頁）を參照。

【歌意】 岩床を走つて、たぎつて流れる初瀬川のやうに、絶える事なしに、何遍もこの川の景色を來て見よう。

評 今の初瀬川はさういゝ景色ではない。初瀬町附近に至つて稍見られる。然し「流るゝ水尾の瀬を早み」（卷七）といひ、又

泊瀬川しら木綿花に落ちたぎつ瀬をさやけみと見に來し我れを（卷七――1107）

などあるので見ると、昔は水量も多く相當な激湍も澤山あつたらしい。この下句に就いては、卷一、人麻呂の幸吉野宮之時の第一歌の反歌の評語（一五一頁）を參照されたい。

大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首

坂上郎女が元興寺の里を詠んだ歌との意。○元興寺之里　奈良の新元興寺所在の里をいふ。新元興寺の舊地域は奈良京の左京四條五條の間、六七坊を占め、その南限は今の京終より紀寺に亘る。今の花園町はその燈油の料の椿を栽培した花園の一部といふ。この寺もと高市郡の飛鳥にあつて飛鳥寺と呼ばれた。蘇我馬子の創建。類聚三代格に、元興寺、此寺者、佛法元興之場、聖教最初之地也。去和銅三年帝都遷二平城一之日、諸寺隨移、件寺獨留、更造二新寺一備二其不一レ移間一、所謂本元興寺是也と見え、甚だその文意が誤解し易いが、奈良京には新元興寺が出來たので飛鳥京のを本元興寺といふの意である。○續紀に、靈龜二年五月辛卯、始徙二建元興寺于左京六條四坊一と見え、又その二年後、養老二年八月の條に、甲寅移二法興寺於新京一とある。これに就いて日本紀通釋及び東大紀要の平城考には、飛鳥の本寺は法興元興飛鳥など、一寺數稱あつたものとして、元興寺が更に六條四坊から四條六坊に移された意味に解した。△地圖　挿圖380（一五一一頁）を參照。

ふるさとの　あすかはあれど　あをによし　ならのあすかを　みらくしよしも
古郷之　飛鳥者雖有　青丹吉　平城之明日香乎　見樂思好裳　992

【釋】○ふるさとのあすか　故京の飛鳥。高市郡の飛鳥郷をいふ。○あをによし　奈良の枕詞。既出（八三頁）。○ならのあすか　新元興寺所在の里をいふ。もと元興寺に飛鳥寺の稱があつたので、奈良の新地にもその稱を移した。○よしも「好」原本に奴とあるは誤。類本その他によつた。

【歌意】舊い京の飛鳥は悽かしくもあるが、又この平城の飛鳥を見ることがさ、而白いな。

【評】作者が「古郷の飛鳥」を絶對の懐かしい對象としたことは、その兄君族人が「神無備の淵はもあせて瀬にかなるらむ」（本卷）と懐舊の情に浸つた如く、少壯時を飛鳥の淨見原の古京に送つたからである。

さて「平城の飛鳥」は元興寺の一稱を應用した作者の造語とすれば、そこに機智がほの見える。歌は對照が餘り緊密に過ぎて餘蘊に乏しいが、これも亦一節あるものと見られる。

作者が元興寺の里に興味をもつたのは、寺が作者の寓してゐた高圓山下の宅に近い爲と考へる。下に聖武天皇の高圓山の御獵の時、里中に走り入つた鼯鼠を獻る時、作者が歌を詠んだのも、元興寺邊に住んでゐた證で、上に「猪高の高圓山を高みかも」とある作者の歌も、その傍證とするに足りる。

同坂上郎女初月歌一首

○初月　既出（七二二頁）。但初月の意は傍で、これは相聞の歌である。

つきたちて　ただみかづきの　まよねかき　けながくこひし　きみにあへるかも
月立而　直三日月之　眉根掻　氣長戀之　君爾相有鴨　993

【釋】○ただみかづき　すぐの三日目の月の如き。初二句は「まよね」に係る序詞。○まよね　既出（一一八〇頁）。

【歌意】月が立つてからすぐ三日目の月のやうな眉の、かゆさを掻き、お蔭で長らく戀してゐた、貴方に逢うたことよ。

評　初二句、序中に序のある例は他にもあるが、これは粗笨で面白くない。婦人の眉を新月に擬することは漢詩にも多い。眉根を掻くことは例の俗信である。この事卷四「いとまなく人のまよねを徒らに掻かしめつつも」の條參照（一一八〇頁）。

大伴宿禰家持初月歌一首

ふりさけて　みかづきみれば　ひとめみし　ひとのまよびき　おもほゆるかも

振仰而　若月見者　一目見之　人之眉引　所念可聞　994

釋　○ふりさけて「ふりさけみれば」を見よ（四二二頁）。○みかづき「若月」を意訓によむ。○まよびき　前出（一四三四頁）。

【歌意】　振仰いで三日月を見ると、嘗て一目見た、美人の眉引が、思ひ出されることよ。

評　眉を初月に喩へることは漢詩に、

映見蛾眉月（何子郎、玉臺新詠）　雙蛾擬二初月一（范靖婦、同上）

眉間月出（遊仙窟）　眉如二月欲一レ消（同上）

など既に先例があり、唐代に至つては愈よ多い。かういふ聯想は凡常の事だから、和漢偶合としてもよからう。「一目見し兒」に戀をもつことは、よくある例で、

み空ゆく月の光にただ一目あひみし人の夢にし見ゆる（卷四、扉娘子——710）

はた薄ぼには咲き出ぬ戀をわがする、かぎろひのただ一目のみ見し人故に（卷十——2311）

一目見し人に戀ふらく天ぎらし降りくる雪の消ぬべく思ほゆ（卷十一——2340）

あし引の山鳥の尾の一峯越え一目見し兒に戀ふべきものか（卷十一——2694）

花ぐはし芳菅ごしにただ一目あひみし子ゆゑ千たび嘆きつ（卷十一——2565）

かくしてぞ人は死ぬとふ藤なみのただ一目のみ見し人ゆゑに（卷十二——3075）

など盛に歌はれてある。但目の見方に各色の相違があり、情に多少の淺深がある。中にこの歌は、三日月に依つて纔にその眉引を追憶する程度の、戀としては極めて淡いはかないものであるが、對手はまづ相當の美形ではあつたらう。

序にいふ、よく美人の描寫に面わをいひ眉引をいふが、日程に物をいふ眼の美に就いて言及したものが、殆どないのは不思議である。

大伴坂上郎女宴親族歌一首

かくしつつ　あそびのみこそ　くさきすら　はるはさきつつ　あきはちりゆく

如是爲乍　遊飲與　草木尚　春者生管　秋者落去　995

釋　○のみこそ　この「こそ」は乞の意で、願望辭。○さきつつ　この「つつ」は輕い意で、てといふに近い。「生」を古義に「女郎花生澤邊の」（卷七）「七重花さく八重花生跡」（卷十六）の例を以て、サクと訓むべしとある。舊訓モエツツ、略解訓オヒツツ。○ちりゆく　略解訓カレユク。古義訓チリヌルは非。

【歌意】お互に盛りのうち、かうしつゝ樂しく遊び飲みしてゐたい。あんな草木ですら春は花が咲いて、秋は散つてゆくわ。まして人間は明日をも知れぬからね。

評　旅人卿なき後の大伴氏は、政治的勢力こそ稍下火の狀態になつたが、依然たる古來の名族、その門葉は頗る廣く榮えてゐた。當主家持はまだ十四五歳の弱年、隨つて叔母さんの郎女が萬事家の采配を揮つてゐたらしく、卷三にも、坂上郎女宴二親族一之時吟歌の題詞がある。郎女は折々懇親會を催して、一家の結合を固くしたものらしい。

宴會に酒と歌舞は附物だ。それが卽ち遊び飲むである。歡樂極分哀情多（漢武帝）で、一門の老若が歡を盡す間に、郎女は一寸繁華の裏を覗いた。榮枯盛衰は草木の非情なるすら遁れぬ、人生獨晏如たる筈がない、されば お互に榮昌の現在に於いて、飽くまで享樂を追求したいと、その感想を披瀝して、興宴の火に油を濺いだ。

人生無二根蔕一、飄二如陌上塵一、分前逐レ風轉、此已非二常身一、落地爲二兄弟一、何必骨肉親、得レ歡當作レ樂、斗酒聚二比隣一
云々。（雜詩、陶潛）

衰榮無二定在一、彼此更共レ之、――寒暑有レ代謝一、人道每如レ茲、達人解二其會一、逝將不二復疑一、忽與二一觴酒一、日夕歡相持。
（飮酒、陶潛）

の思想と共通點が存する。郎女が是等の文獻を見ないと斷言は出來ぬが、かういふ傾向の感想はさのみ特異性のあるものではないから、恐らく偶合であらう。

夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世如レ夢、爲レ歡幾何、古人秉レ燭遊、良有レ以也。（春夜宴桃李園序、李白）

も郎女の作と殆ど同時代で、その先後を決し難い。

郎女はその頃四十餘歳の分別盛りの老媼であつた。素より佛教信者の事でもあり、無常變易の哲理にその關心をもつのも當然であらう。然し當時の佛教は現世利益を强調してゐたから、淨土教盛行の後世とは違つて、欣求淨土の所願は餘り熱烈なものでなく、却てかくの如く凡人主義に近いものに轉用されたのが、歌として又面白いのである。

六年甲戌、海犬養宿禰岡麻呂應レ詔作歌一首

○六年　天平六年。○應詔作歌　仰言によつて詠んだとの意。「作」原本にない。眞淵説によつて補つた。○海犬養宿禰岡麻呂　傳未詳。海犬養は氏。姓氏錄に海神綿積命之後也とある。

みたみわれ　いけるしるしあり　あめつちの　さかゆるときに　あへらくおもへば
御民吾　生有驗　在天地之　榮時爾　相樂念者　996

【釋】○みたみわれ「みたみ」は人民のこと。既出（一九二頁）。○しるし　かひ（詮）といふに近い。前出の同項を參照（一六六二頁）。○あへらく　あへるの延言。

【歌意】大君の御民たる私は、この世に生きてゐる甲斐があります、かやうに天も地も榮えるめでたい時に、逢つたことを思ひますと。

岡麻呂は如何なる身分の人で、如何なる動機で應詔の歌を詠んだものか、一向その事情が判明しない。想ふに岡麻呂は在官者ではないが、何かの功績又は或技藝堪能の士か、さては珍しい長壽者かで、特に召し出されて破格の恩命に浴した人ではあるまいか。されど六位以下の敍任は國史に記載しない例なので、その事蹟が湮滅したのであらう。平安朝に及んで、仁明天皇の御時、尾張濱主（外從五位下）が百十三歳の老年で清涼殿前に召され、長壽樂を奏して、

翁とてわびやはをらむ草も木も榮ゆる時に出でて舞ひてむ

の歌を獻つたことが史（續日本後紀）に見える。岡麻呂も何かこれに似寄つた事情のもとに召し出され、而も歌詠むと聞し召されて歌獻らしめられたものか。

「みたみ」を弘く日本臣民の意と解するのは、現代人の勝手な見方である。この語には階級意識が隨伴してゐた。卷一、藤原宮役民之歌に「そを取ると騒く御民も」とあるも同じで、本來無位無祿の百姓以下を呼び、又その自稱する語である。されば岡麻呂は尋常なる百姓でもあるまいが、別に官職をもたぬ身分だつたので、かく謙稱したのであらう。

天平六年は聖武天皇の御治世、奈良朝の最盛時で、文化の發展も一段の飛躍を示し、

青丹よし奈良の京は咲く花の匂ふが如く今盛りなり（卷三、小野老——328）

の「時代であつたとすれば、「天地の榮ゆる時」は、決して漫然たる諛言ではなからう。濱主も「草も木も榮ゆる時に」と歌つてゐる。この明時に際會し、幸に寵遇を得て望外の光榮に浴する。實に「生ける驗あり」と感謝するに足りる。岡麻呂の歡喜や實に察すべきである。

この歌はかくの如く、個人的感情から出發した歡喜の聲と聞くが至當であらう。君國の讃美聖世の頌聲の如きは、何を苦んで卑賤微臣の岡麻呂などに徵求されることがあらうぞ。

然し「御民われ」は日本臣民の意に擴充して現代意識に解釋すると、更により大きな感想となつて、聖代に生息する蒼生の偉大なる感謝を表し、その堂々たる雄渾の風格、和諧暢達なる聲調、相俟つて及び易からざる絶唱と見られてくる。尙「君が代」の歌が國歌となつて、その存在價値を高めたのと似てゐる。

春三月幸于難波宮之時歌六首

○春三月　續紀に、天平六年春三月、辛未（十日）行二幸難波宮一、戊寅（十七日）車駕還レ宮とある。

以下六首、難波に就いて歌はれたものなく、住吉地方は三首までも詠まれてある。「從千沼囘」の歌の左註にある如く、天皇は難波宮御滯在中、住吉方面に御出遊があつたのだ。

すみのえの　こはまの　あけもみず　こもりてのみや　こひわたりなむ

住吉乃　粉濱之四時美　開藻不見　隱耳哉　戀度南　997

綱 ○こはま　住吉の粉濱は住吉神社の西北に當り、今は全部陸地となつてゐる。この時代でも蜆が棲む處を見ると、水淺く泥沙の堆積した入江であつたらしい。○しじみ　蜆。貝鰓類中同柱類に屬する貝。初二句は「あけ」に係る序詞。○あけもみず。打開けてもみず。○こもりて　契沖訓による。略解訓コモリノミヤモ、

舊訓シノビテノミヤ、新考カクレテノミヤ。△地圖　挿圖28（二四一頁）を參照。

【歌意】住吉の粉濱の蜆貝のやうに、打開けるといふことも自分はせず、心の内にばかり込めて戀うて、月日を重ねることであらうかえ。

評　蜆とは妙な物を序詞に使つたものだ。その頃難波附近では粉濱の蜆が名物であつたのであらう。作者の戀の相手は從駕の女房か。とすれば迂濶に冗談口も利けない。さりとてさらりと諦めもし得ない。で「あけも見ず隱りてのみや」と、稍自嘲氣味にその力ない歎息を洩した。

右一首、作者未詳。

作者未詳とあつても、最初は分明してゐたのだらうが、人物の關係上わざと祕する場合もあり、又作者の意志によつて匿名にする場合もある。後世の勅撰集にも、往々これに似た事情の存するものがある。

まゆのごと　くもるにみゆる　あはのやま　かけてこぐふね　とまりしらずも

如眉　雲居爾所見　阿波乃山　懸而撜舟　泊不知毛　998

釋　○まゆのごと　眉の形の如く。遠山の細く靡いた狀をいふ。○あはのやま　阿波の國の山。仙覺註に、讃岐の屋島の邊の粟島とあるは無稽。古義がこれに依つて、「山」を島の誤かと疑つたのは愈よ妄。○かけて　此方から向ひへと懸けて。古義に、目に懸けてとあるは非。○しらず　知られずの意。

【歌意】眉のやうに細く、空遙に見える阿波の山、そちらへ懸けて漕ぐ船は、その泊り處がわからぬわい。

評　これは難波の海邊でもよいが、南に寄つた茅渟邊なら尚更ふさはしい。濱頭に立つて眺望すると、阿波國の方角に當つて雲山の影が模糊としてゐる。それは淡路島の南端である。「眉のごと雲居に見ゆる阿波の山」は作者の認識が既に誤つてゐた。然し今の我々が見ても、それが「阿波の山」と想像されざるを得ない地理的實狀にある。

天末一抹の山影に劃されたのみで、海は漫々として廣い。そこに一葉の舟が沖を臨んで駛走してやつてくる。作者は忽ち深い關心を以てその舟を諦視した。賴りなさ心細さ不安さ、あらゆる同情が次ぎ〳〵に湧き立つ。舟の安息處は泊である。然るにその泊さへ見當が付かぬ大海であつては、結局どうなるだらうと、傍觀者たる作者の胸を傷ましめる。さればその前提たる場處の指定は、事情の許すかぎり誇大である程、結果が強く反撥し、「泊知らずも」の詠歎の響が幅ひろく振動する。

說明すれば右の如くだが、作者は只感情の動きのまゝに、大らかに一氣にいひ下したもので、流石御身分がら、他人の到底企及し能はぬ高渾の格調を具へてゐる。

右一首、船王作。

○船王　淳仁天皇の御弟で、舍人親王の子。續紀に、神龜四年正月無位より從四位下、正平十五年五月從四位上、同十八年四月彈正尹、寶字元年五月正四位下、同二年八月從三位、同三年六月、御父舍人親王に崇道盡敬皇帝の追尊があつた爲、隨つて親王となり三品に敍せられ、同四年正月信部卿、同六年正月二品、同八年十月惠美押勝の亂により、詔に依つて降して諸王となし、隱岐國に配流された。その詔に、船親王は九月五日に仲

麻呂（藤原）と二人謀りけらく、詐作りて朝廷の答詔へ奉らむと謀りけり、云々。

ちぬわより　あめぞふりくる　しはつのあま　あみをほしたり　ぬれあへむかも

從千沼囘　雨曾零來　四八津之泉郎　網乎綱乾有　沾將堪香聞　999

【釋】○ちぬわ　茅渟の邊。「ちぬ」は和泉の海の稱から起つて地名ともなつた。記（中）に、五瀨命が御手の血を洗はれたので、血沼之海といふとの傳說を載せた。續紀に、靈龜二年に河內國の和泉日根二郡を割いて珍努宮に供せしむと見え、玆に和泉國が立つた。今の濱寺高石の邊は茅渟（千沼）である。「わ」を古義にはミと訓んである。○しはつ　「しはつやま」を見よ（六九六頁）。○あみをほしたり　「乎」原本に手とあるは誤か。「綱」は衍字。新考も同說。古義所引の大町稻城說はツナデホシタリと訓み、「網」は綱の誤、「綱」はおなじく衍字とした。「綱手」は曳舟などの繩であるが、それよりも網の方が干して風情がある。○ぬれあへむかも　沾れるに堪へようかまあ。早くいへば、沾れずにあらうかの意。「か」は疑辭。△地圖及寫眞　挿圖79（二四二頁）

79（二四三頁）を參照。

【歌意】茅渟の海邊から、雨がさ降つてくるわ。そこに磯齒津の海人が網を干してあるわ。あれが沾れずにあらうかまあ。

【評】左註にある如く、この日天皇は難波宮から住吉に御出遊であつた。生憎や遙か茅渟の方から海雲は春雨を運んで來たので、俄の御還幸だ。磯齒津路にかゝると、海人の家の軒にはまだ網が干し放しになつてゐる。であれは沾れてしまふにと、作者は餘所ながら心配をしたものだ。

左註によれば應詔の作であるさうなが、餘り出來榮のいゝものではない。

右一首、遊覽住吉濱、還宮之時道上、守部王王應詔作歌。

右は聖武天皇が住吉の濱を御遊覽、難波宮にお還りなされる時の途上で、守部王が仰言によつて詠んだ歌との意。この時御兄船王と共に行幸供奉に仕へ奉つたらしい。○王　一字衍。削るがよい。○守部王　舍人親王の子（紹運錄）。續紀に、天平十二年正月無位より從四位下、同十一月從四位上とある。

こらがあらば　ふたりきかむを　おきつすに　なくなるたづの　あかつきのこゑ

兒等之有者　二人將聞乎　奧渚爾　鳴成鶴乃　曉之聲　1000

【釋】○こらがあらば　「あらば」は居らばの意。「こら」は既出（五八八頁）。新考訓コラシアラバ。○おきつす　沖つ洲。沖合の浮洲をいふ。

【歌意】思ふあの兒が居るならば、二人で聞かうものを、あの沖の洲に鳴いてゐる鶴の、夜明方の聲をさ。

【評】文武天皇の難波宮行幸の御時、忍坂部乙麻呂は、

　倭戀ひいの寢らえぬに心なくこの洲の崎に鶴鳴くべしや（卷一——71）

とその孤獨の旅情を歌つた。これも同じ景致同じ環境同じ感哀のもとに生まれた雙生兒であるが、彼れは焦燥

の色濃く活動的であり、此れは沈鬱で内攻的である。凄楚の響こそ「倭戀ひ」に劣るが、「曉」の一語は下し得てよい。寢覺勝なる孤客の情が婉曲に映寫され、鶴の聲もこの背景によつて一段と凄凉味を加へる。「二人聞かむを」に、獨しては悲しくてとても聞くに堪へぬ意が暗示され、人戀ひしの情念がきびしく湧き立つて見える。これは住吉の粉濱あたりの曉であらう。なほ「倭戀ひいの寢らえぬに」の條の評語を參照（二九四頁）。おなじ作者の詠でも上の應詔の歌とは段違ひの出來だ。内におのづから感興が動いて發したのと、與へられて作るのとは、かうも違ふものか。

右一首、守部王（モリベノオホキミ）作。

ますらをは　みかりにたたし　をとめらは　あかもすそひく　きよきはまびを

大夫者　御獵爾立之　未通女等者　赤裳須素引　清濱備乎　1001

【釋】○あかもすそ　赤色の裳の裾。「たまも」を見よ（一六二頁）。○はまび　前出（一五　六四頁）。△寫眞　挿圖ロ（三六頁）54（一六三頁）參照。

【歌意】男達は御獵のお供に立ちなされ、少女達は奇麗な濱邊を、赤裳の裾を引いて遊ぶよ。

【釋】「ますらを」は男の官人、「をとめ」は官女である。男官は陛下の御獵に仕へまつり、官女達は後宮椒房の御方の濱邊の逍遙に仕へまつる。この相對的事相に敏くも著眼し、只その事を記して作者自身の感想は一語も挿まない。而も間接に難波宮御出動の盛世の勝事を頌してゐる。高手。初二句と三四五句とが對蹠的に合拍してゐる鼓法も、型が變つて面白い。

難波宮附近は水澤地で、狩獵に適する山林原野がない。又蘆荻の叢生はあつても「清き濱邊」ではない。住吉ならば「清き濱邊」があり、近く山林もあり原野もある。これも住吉での作と見られる。

右一首、山部宿禰赤人（ガネ）作。

○赤人　傳既出（七六三頁）。

うまのあゆみ　おさへとどめよ　すみのえの　きしのはにふに　にほひてゆかむ

馬之歩　押止駐余　住吉之　岸乃黄土　爾保比而將去　1002

【釋】○おさへとどめよ　「おさへ」は卷三にも「大御馬（オホミマ）の口おさへとめ」とある。舊訓オシテトドメヨ。○はにふ　既出（二四八頁）。「黄土」の下爾（ニ）の字脫かとも思ふが、無い助辭を訓み付けるのも例の事である。○にほひて　既出（一六五一頁）。

【歌意】これ皆の者、手綱を控へて、馬の歩みを抑へ止めなさい。この住吉の岸の黄土に、衣を染めて往かうぞ。

【評】住吉の岸の黄土の事は、既に卷一「草枕旅ゆく君と」（清江娘子）の條で、委しく評中に解說した。

白波の千重に來寄する住の江の岸の黄土に匂ひてゆかな（本卷、車持千年——932）

はこれと下句が全く同じい。只「馬の歩みおさへとどめよ」が一段の姿致を作り、黄土に強い愛著を感じた趣

が、間接に表現されて面白い。但「匂ひて行かむ」はあながちその實行を強要するものではない。只眼前の好風光をつぶさに翫賞しようの意を強調し誇張したまでゝある。

馬いたく打ちてな往きそけ並べて見てもわがゆく志賀にあらなくに（卷三、刑部垂麻呂――280）

の上句はこれに似てゐるが、下句は全く別趣のものである。

右一首、安倍朝臣豐繼　續紀に、天平九年二月外從五位下より從五位下を授くとある。作。

○安倍朝臣豐繼　續紀に、天平九年二月外從五位下より從五位下を授くとある。

筑後守外從五位下葛井連大成、遙見二海人釣船一作歌

○外從五位下　外は外位といひ、もと地方官に賜ふ位で、内位よりは輕い。民部式に位田は内位の半を減ずとある。神龜の頃より内官をも外位に敍すること始まり、後には内外官の論なく、姓氏の凡卑なる者を外位に敍した。○葛井連大成　傳既出（一九七頁）。

あまをとめ　たまもとむらし　おきつなみ　かしこきうみに　ふなでせりみゆ

海嬬嬌　玉求良之　奥浪　恐海爾　船出爲利所見

1003

評　○たま　鰒珠。上出（一六五三頁）を參照。○ふなでせりみゆ　「せりみゆ」の續きは古格。上出「さわぎたりみゆ」を見よ（一六四二頁）。

【歌意】　海人の少女は珠を探すらしい。沖の浪の恐ろしい海に、船出して居るのが見える。

評　沖に浮いてゐる舟では、その乘手を海人少女とは認定し難い。又題詞には釣船とある。釣船なら鰒珠を採取する舟ではあるまい。理窟をいへばかうだが、實は海上に浮沈する海人舟を見遣つて、興趣の湧くがまゝに誇大に下した想像で、か弱い海人少女を拉して、恐こき海に配合したことが手なのである。

桉作村主益人歌一首

○桉作村主益人　傳既出（七五三頁）。

おもほえず　きいますきみを　さほがはの　かはづきかせず　かへしつるかも

不所念　來座君乎　佐保川乃　河蝦不令聞　還都流香聞

1004

評　○きいます　「座」をイマスと訓む。過去を現在法に敍するは「たわやめの袖吹きかへす飛鳥風」（卷二）の例。舊訓キマセルは結句との打合がわるい。新考訓はキマシシ。○きみを　君なるを。○さほがは　既出（二七三頁）。△地圖　挿圖85（二七〇頁）を參照。

【歌意】　ゆくりなく入らつしやいます御方なのを、この佐保川の蛙（カジカ）を聞かせずにお歸ししたことよなあ。

評　益人の宅は佐保川のどの邊であつたかわからぬが、

うまのあゆみ　あまをとめ　おもほえず